

巻頭言

会長 木村高久

今年で本会は創立四十周年という輝かしい年を迎えることが出来ました。

振り返ってみますと、本会は昭和58年10月に大町頼勝初代会長により、「歴史研究会横浜支部（後に横浜歴史研究会と改称）」として設立されました。当時会員数は36名で中区山下町の「駐労会館」で産声を上げた次第です。現在会員数はおよそ150名となり各月の例会、歴史散歩、バスツアー、横歴はまよせ等の事業を展開するなど事業も規模も発展・充実することができました。これも偏に諸先輩方の熱意と尽力のお蔭であり、また現在の役員、会員の皆様のご支援の賜物です。心から感謝申し上げます。

さて、過去5年間の主な事業につきましては本誌八十頁の「横浜歴史研究会四十年の足跡」にまとめておきました。ご覧いただければお分かりの様に平成29年度から令和元年度までは研究発表、歴史散歩、一泊二日のバスツアーなどの計画事業が全て実施できていますが、令和2年度からは困難になりました。

それは、次の理由からです。令和2年から今日まで現代の魔物ともいべき新型コロナウイルスが世界中に蔓延し、多くの方の生命を奪い、社会・経済などに多大な被害を与えました。この魔物は本会にも損害をもたら

しました。各月の研究発表をはじめ諸事業の中止を余儀なくされたのです。このためコロナ禍前は会員が170名を越し、研究発表の参加者も100名を越していましたが、現在は残念ながらそれぞれ下回っています。

しかし、私たちはネバーギブアップです。いずれコロナ禍の前以上になるよう頑張りたいと思います。私たちは「楽しく歴史を学ぶ会」、そして「生きがいを得ることができる会」をモットーに創立四十五周年を目指す。皆様の一層のご支援、ご協力をお願い申し上げます。

結びに会員の皆様およびご家族の皆様のご健康とご多幸を祈念いたします。



俳画・藤盛詔子氏 作

創立四十周年 記念式典・祝賀会

令和4年9月10日（土）午前11時から、山下公園の向かい側にあるホテルメルパルク横浜において横浜歴史研究会創立四十周年記念式典・祝賀会が開催されました。

第一部 記念式典

式典には、神奈川歴史研究会会長 浅見 実様他5名の来賓のご来臨を賜りました。
まず、上野隆千副会長の司会により、熊本修一副会長の開会のことばから開始されました。続いて木村高久会長の挨拶がありました。その内容は本会創立四十周年を寿ぐと共に、今日の隆盛を迎えることが出来たのは先輩方、そして現在の役員・会員のお蔭ですと感謝の言葉。そして、今後は



式典に臨む木村会長

創立四十五年を目指し躍進しましょうと結ばれました。
次に、ご来賓を代表しまして、神奈川歴史研究会会長 浅見 実様、歴史学者 松尾 光様からご祝辞を頂戴いたしました。

「ご来賓氏名（順不同）」
江戸の歴史研究会
会長 高橋 倭子様
神奈川歴史研究会
会長 浅見 実様
神奈川歴史研究会
事務局長 榎 良生様
大正地区歴史散歩の会
会長 菅沼 富男様
中国の歴史と文化を学ぶ会
会長代行 朝倉 宏哉様
歴史学者 松尾 光様



ご祝辞を述べる浅見実様



ご祝辞を述べる松尾光様

続きまして表彰が行われ、初めに「特別功労者表彰」5名に対して木村会長から、各人の功績の紹介と共に賞金が渡されました。

「特別功労者表彰受賞者」
副会長 熊本修一様、副会長 高尾隆様、常任理事 山本修司様、監事 中澤静雄様、幹事 宮下元様
次に「永年在籍会員表彰」（24名）が実施され、代表者として佐藤好子様に賞金が贈呈されました。

加藤導男名誉会長の閉会の言葉で第一部の式典を終了いたしました。

第二部 記念祝賀会

正午から第二部の記念祝賀会が始まりました。村島秀次事務局長の司会進行により、両宮美千代理事の開会の言葉から開始いたしました。まずご来賓の言葉を、大正地区歴史散歩の会長 菅沼富男様に頂戴し、続きまして中国の歴史と文化を学ぶ会 会長代行 朝倉宏哉様に乾杯の音頭を取って頂きました。



ご祝辞を述べる菅沼富男様

に取り組みましたが、さすが横浜会員です。素早く正答が多かったですが、中には珍答もあり会場が盛況を呈したところです。午後二時半頃に祝賀会は竹内章二常任理事の中締め、そして、高島 治常任理事の閉会の言葉により、和気あいあいの中で終了しました。



乾杯の音頭をとる朝倉宏哉様



歓談に興ずるテーブル1



歓談に興ずるテーブル2

なお、参加者の方の感想の一部を掲載いたします。
○皆さんの歴史好きが良く分かりました。
○皆さんと一緒に過ごせるのが心と身体の健康の源です。出来る限りお付き合いしたい。
○40周年ということで、自分が子供の頃から存在していた会なので永く続いているんだと感じました。
○皆さんの造詣が深く広範囲に渡って御存じなので驚いた。
○骨折でお休みしていたので、皆さんにお会いでき感無量です。
○同好の皆さんと語り合うことは、実に楽しいことである。
○5年後に向けて頑張る意欲が出てきました。

参加者名簿

会員名（敬称略・五十音順）
雨宮美千代・粟 光行・石井昭徳
伊集院 忠・植木静山・上野隆千
牛山真弓・遠藤容弘・大岩 泰
大瀬克博・長田 格・遠田千代吉
加藤導男・加藤泰弘・加藤英雄
金子ユカリ・川幡敏代・木村高久
熊本修一・齋木敏夫・齋藤宗久
佐々木文江・佐々木眞佐子・佐藤猛夫・佐藤好子・清水豪志
摂待洋子・早田信広・平 博子
高尾 隆・高島 治・高田 茂
高野賢彦・高橋正一・竹内秀一
竹内章二・武中正文・田代信太郎・谷川操一・谷川美代子
寺田隆郎・外岡篤子・長尾正和
中澤静雄・中村康男・西川 章
橋本 誠・長谷川憲司・藤井靖之
藤平玲子・古谷多聞・真野信治
丸山雅子・宮崎幸世・宮下 元
村島秀次・本村かほる・山下美智子・吉田友雅・渡辺京子
渡辺美智子
（元会員）前出 郁子

計62名
（編・記）

創立四十周年記念 歴史講演と伝統芸能の集い

〔開催日時〕
令和4年10月16日(日)
午後1時～午後4時30分
〔会場〕
シアトルフォンテ
(泉区市民文化センター)

コロナ過で事業の開催が危ぶまれていましたが、幸いコロナも下火となり実施できて安堵したところです。

さて、当日は江戸の歴史研究会 会長高橋倭子様、神奈川歴史研究会 会長長浅見 実様、大正地区歴史散歩の会長菅沼富男様、歴史学者松尾 光様4名のご来賓をはじめ、会員およびご家族、ご友人、その他ホームページによるPRに応募して頂いた方々で会場は溢れんばかりの盛況でした。(参加者数344名)

まず、開演前に村島秀次事務局長からプロジェクトにより「横浜歴史研究会(以下「横歴」という)のご案内」がされた。続いて村島事務局長の司会で木村高久横歴会長の挨拶がされる。要旨は、ご参加頂いたことへのお礼、そして横歴創立四十周年について語られ、ついで本日の催しものを堪能頂き、文化を十分に味わっていただければ幸いですと結ばれました。

午後1時、第一部「伝統芸能」の開演となりました。

先陣を切ったのは参遊亭遊若さんの落語で、出し物は「あたま山」でした。人の頭に木が生えるとか、池ができるなど奇想天外な噺でした。次に登場は鹿鳴家河童さんの「鹿政談」で奈良奉行の人情お裁きであり、落語の終わりは浮世

亭寿八さんの落語「寝床」で、大旦那の下手な義太夫に付き合われる人々のてんやわんやの世界を語っています。お三方の落語に客席は笑いの渦に包まれました。



参遊亭遊若さん



鹿鳴家河童さん



浮世亭寿八さん

次に講談界の新星、宝井琴鶴先生の講談で名作「鉢の木」が熱演され会場からの万雷の拍手に包まれました。



宝井琴鶴先生

午後1時、第一部「伝統芸能」の開演となりました。先陣を切ったのは参遊亭遊若さんの落語で、出し物は「あたま山」でした。人の頭に木が生えるとか、池ができるなど奇想天外な噺でした。次に登場は鹿鳴家河童さんの「鹿政談」で奈良奉行の人情お裁きであり、落語の終わりは浮世

参加者からの感想
○昨日は素晴らしい時間をありがとうございました。落語も、講談も、そして、講演もとても素晴らしかったです。
○楽しい一日ありがとうございました。とても、充実した内容でした。とても、充実した内容でした。出席者一同大感激致しました。
○小和田先生の貴重な裏話なども聞けて大変楽しかったです。

編・記

休憩後、午後3時から静岡大学名誉教授で歴史家の小和田哲男先生の講演が行われました。演題は「いま徳川家康の生き方から何を学ぶか」でした。先生は、(1)時代で変化する徳川家康の評価(2)家康を育んだ「駿府人質」時代(3)家康の偉大な3つの功績(4)家康の人間の魅力についてお話しされました。



オペラ座風の客席

午後4時20分に終演となりました。

加藤導男名誉会長の閉会のことばで「歴史講演と伝統芸能の集い」を閉幕しました。盛況で、そして参加者の皆様の明るい笑顔あふれる集会でした。演者の皆様および当日役員の皆様のご尽力によるものでした。感謝いたします。

「創立四十周年式典・祝賀会」祝儀
江戸の歴史研究会
会長 高橋 倭子様
神奈川歴史研究会
会長 浅見 実様
神奈川歴史研究会
事務局長 榎 良生様
大正地区歴史散歩の会
会長 菅沼 富男様
中国の歴史と文化を学ぶ会
会長代行 朝倉 宏哉様
歴史学者 松尾 光様
会員 桑原 代津子様
歴史本部 村上 三枝子様
「歴史講演と伝統芸能の集い」祝儀
江戸の歴史研究会
会長 高橋 倭子様



演者と当日役員との集合写真

創立四十周年記念レポート 先人の叡智を継承しよう

加藤 導男

当会は本年秋で創立四十周年を迎えます。

私が入会したのは平成四年です。今年で満三十年になりました。同年入会された、いわゆる「同期の桜」は佐藤好子さん、藤平玲子さん、藤盛詔子さんの三名です。入会歴一番の方は、会員の安藤綾信さん（例会には最近お顔を見せませんが、以前、ご著書の『徳川譜代大名 安藤家の伝承ごと』をご寄贈頂きました。昨年九十歳を迎えられ、永年会員になられました）。一番は和田敏子さんです。前述の私達四名は三番目になります。

ここで、本稿の初めにお礼を申し上げたい方がいます。会員の川尻悦三さんです（令和元年一月、ご逝去、享年九十四歳でした）。※以後、物故者について没年は省

略させていただきます。

或る日、川尻さんより電話をいただき、「断捨離したけど、歴史本が沢山残っているの、会の人達に差し上げたいので、取りに来て頂きたい」とのことで、役員数名で、ご自宅に伺い、翌月の例会で会員に無料で配布しました。

翌月例会からは、毎月ご本人が書籍を持参され、皆さんに配付しました。そして、最終回には当方に「加藤さんは途中入会なので、当会の会報の創刊号から、お持ちしたので、いずれ必要な時がくると思うので、もらって下さい」と言われ、現在、当会会報は創刊号から、最新号まで手元にあります。本稿について大変参考になり、本当に有難うございました。

川尻さんは、高齢ながら研究発表には、ワープロを駆使し、毎回

所定時間の五分前に必ず終了するのです。

何故、いつも時間をキチンとされているのですか？との問いに、海軍にいた際に、上官より「時は貴重なものなので、常に気をつけろ、と言われた事を守っている」とのことでした……………。

※ ※ ※

当会は昭和五十八年十月に、大町頼勝初代会長によって、歴史研究会横浜支部として設立されたが数年後に横浜歴史研究会に改称したので。

例会の会場は開港記念会館が主でしたが、同所は昨年十二月より改修の為、二年程休館となりましたが、以前も同様の事があり、労働プラザや職能技能センター他に開催して、いました。

私共が入会した頃は関内駅前のセルテビルの上階の「飛鳥学院」という処で、四十名がぎりぎり収容できる会場でした。

大町会長は伊達藩金ヶ崎の城持ち城主の後裔であり、大柄であったが、気遣いの人でもありました。古代史・中国史の研究をされて

いました。

三年後の昭和六十一年に、中文会（中国の歴史と文化を学ぶ会）も旗揚げされた。

大町会長は即断即決の人でもありません。ある時、役員会で会計担当から「予算上、先行きの事を考慮すると、年会費の値上げを検討して頂きたい」との意見がでしたが、大町会長は「経費の削減が第一、会員の増強を図ること。現状では、値上げは認めない」と回答された。

そして菅原啓一郎常任理事（その後、相談役に就任。平成三十一年体調不良で退会）と小林勇常任理事が、金券ショップで、郵便切手を購入したり、従来翌月の例会案内は全ての会員に郵送していたものを、例会で配布し、欠席者のみ郵送する等々、経費削減に努力された。

(6)

また会員増強については、私が銀行での「行員紹介運動」を模して、「会員紹介運動」を提案しスタートしました（現在も継続しています）。そんなこともあり、現在でも年会費は当時と変更なく同額でやっております。

役員会にて協議して頂き、当方の会長就任の結論を頂きました。

※ ※ ※

平成二十三年の総会にて、議決により、当方は第三代会長に就任させて頂きました。

その三月十一日、東北大震災が発生しました。翌月の例会で、出席の会員の方々にお願いし、義援金を募り、慈善団体を通じて寄付させて頂きました。

翌年、平成二十四年は創立三十周年を迎へ、会歌の「作詞」は前述の通り、創立二十周年で選定したが、「作曲」は専門家をお願いすることになりました。会員の石井明典さん（令和二年体調不良で退会）より、小椋佳さんが私共と同じ銀行でしたので、石井さんと小椋さんと同じ支店で一緒にされた友人の方と当方とで、小椋さんの代々木の事務所に訪問しました。

(7)

田辺英治副会長は古代史、特に神社研究を得意とされていた。一方、会員の間淵二三夫さんはやはり古代史の『古事記』『日本書紀』に精通されていて、例会の後の二次会や一泊旅行の部屋飲みの際に、歴史論争を行い、何度も仲裁に入っていた事を思い出します。

平成十四年、創立二十周年を記念して、当会の会歌を会員より、「作詞」を募集し、入選作は丹下重明現相談役でした（私も応募しましたが、見事ハズレました）。

後日談ですが、賞金は三万円です。

湯川安雄初代会長は、当会が発足した前年に、戸塚の原宿交差点の近くで「大正地区歴史散歩の会」を立ち上げました。

湯川さんは古代から現代まで、勸善懲悪を旨として研究発表をされ、人柄もあって歴史研究会での講演会でも毎年発表されていました。

谷山康夫副会長は源頼朝の異母弟の源範頼研究の第一人者で、毎年命日には範頼の菩提寺の大寧寺（横浜市金沢区）にお参りされるほどでした。ユーモアのある研究発表で、当方もその仕方を真似したいと思うほどの方でした。

※ ※ ※

平成二十一年、総会にて八城東郷第二代会長が選出されました。

八城会長は寡黙な方でしたが、質実剛健そのもので、口にされた事は必ずやり遂げる方でした。

研究テーマは郷土に因むことが多く、『鶴見川のものふたち』『多摩川流域の古墳』『六郷の行方氏』や、中国史等、研究発表・会報投稿をされ、会報編集長の役職は十三年の長きにわたりました。今

四回は会員の谷川操一・美代子さんご夫妻が所有の日吉のホールをお借りして開催しました。その後、他の方にホールを貸されるので、会員の島田秀世・紀子さんご夫妻が経営されておられる蒔田の『旅館松島』をお借りし、落語・端唄等で三回開催し毎回大入りの盛況でした。

平成二十五年、ある出版社の社長さんより連絡があり、神奈川に関する出版を検討中との事で、お会いし、監修することを了承しました。

メイツ出版社より、同年七月、『神奈川県歴史』、二十八年二月には『神奈川歴史探訪ルートガイド』を監修し、全国で販売しました。監修には当方と堀江洋之・竹村紘一両副会長が担当しました(両副会長は体調不良の為、その後、退会されました)。

針靖人副会長は平成二十三年に事務局長に就任され、お人柄でハンサムであることから人気のある方で、当方の家内もファンでした。発表者の発掘や行事の計画等々、綿密で、一泊旅行や周年の年の二泊の旅行でも、下見もせず、現地のホテルや案内される方にも、連絡

を取ってもらい、予算等も狂いが無く、会員の方から、針さんを社長とし旅行社を設立したらとの声が上がるほどでした。

ただ、平成二十九年初め、我家に電話が入り、病院より「余命宣告」を受けたとの由。その日は私と家内は大泣きした事を今でも鮮明に記憶しています。

翌年の総会で副会長になっていただきました。平成三十年暮の役員会にて、当方は会長を辞任し、後任の会長に木村高久副会長が議決されました。

※ ※ ※

令和元年一月の総会で第四代会長に木村高久氏が選任されました。

木村会長は古代史を研究テーマとされて、お人柄円満であり、着任早々に当会規約の見直しや改訂にも尽力され、会の融和に努められております。

コロナ禍の状況下、木村会長は役員集約し、例会を急遽休会とする事等、苦慮されながら運営してきました。

昨年三月、歴史研究会吉成勇主幹が急逝されました。

当会の発足から始まり、当会の毎年一月総会には、江戸の歴史研究会高橋優子会長と共に、ご来賓としてご臨席頂き、励ましのお言葉を頂いてきました。当会の五年毎の記念講演会の講師は吉成主幹のご紹介で、創立五周年の永井路子先生から始まって、ずっと続いてきました。

今回、当会創立四十周年記念の講演会については、十年前の三十周年でお招きした小和田哲男先生に再びお願いした処、心よくお引き受け頂きました。これも吉成主幹のお蔭と感謝しております。

松尾光先生は当会とは、昔からご講演をして頂き、会報にも貴重な歴史論文を毎号寄稿され、一切謝礼も不要ですとの、ご協力いただいております。逆に当会の姿勢に大変ご賛同を頂いており、本当に有難いと思っております。

※ ※ ※

創立四十周年を迎へ、多くの方について述べてきましたが、もっと記したい会員の方々が居られますが、

会員研究

御堂家の摂関政治を支えた藤原彰子

山本 修司

一. はじめに

藤原彰子(ふじわらのしようし・988~1074年)は、藤原道長の長女で、一条天皇の中宮であった。また後一条天皇および後朱雀天皇の生母(国母)であり、さらに生後まもなく母を亡くした孫の後冷泉天皇を養育した。

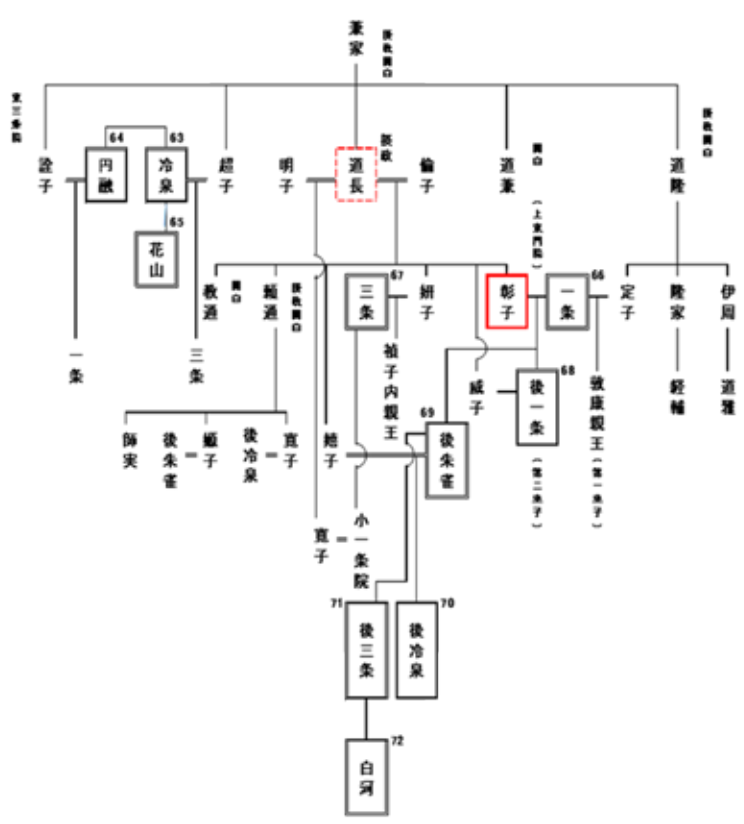
当時としては極めて長寿の87歳まで生き抜き、父の道長、弟の頼通、教通による御堂家による摂関政治を支えた。

彰子と血縁の濃い天皇は、一条天皇(夫)↓三条天皇(甥)↓後一条天皇(息子)↓後朱雀天皇(息子)↓後冷泉天皇(孫)↓後三条天皇(孫)↓白河天皇(曾孫)と66代から72代までの全ての7代に渡る。息子、孫、姉妹など身近な人々に先立たれたが、常に朝廷に身を置き続け、父・道長の志を引き継ぎ、道長の出家後は、50年以上に渡って彰子の令旨が摂関

二. 道長の台頭

正暦5年(994)~長徳元年(995)に、赤疱瘡(あかもがき)はしかが大流行し、朝廷の勢力図が大きく変わった。赤疱瘡等の犠牲者(長徳元年(995)3~6月)

関白	藤原道隆 (43)	逝去
左大臣	源 重信 (74)	逝去
右大臣	藤原道兼 (35)	逝去
内大臣	藤原伊周 (22)	
大納言	藤原朝光 (45)	逝去
大納言	藤原濟時 (55)	逝去
權大納言	藤原道長 (30)	



紙面の都合で記載できず、申し訳ありません。当会はこれから四十五周年、五十周年と続きます。これまでの多くの先人の努力の結果が、当会の発展に寄与してきました。どうか、これからも会員皆様のご支援を賜りながら、歴史知識を得て、楽しい会の発展を祈念して、本稿について筆を擱きたいと思えます。

完



名草子に大きな影響を与えた。鴨長明の『方丈記』、吉田兼好の『徒然草』と並んで古典日本三大隨筆と称される。

六・藏人頭・藤原行成（和風の書三蹟の一人で世尊寺家の祖）の活躍

藏人所は天皇の秘書官長的な存在であり、宮廷の財務機構の多くを掌握し、天皇・摂関・上皇・母后などの根回し役。時には意見具申・説得役であった。長徳元年（995）に藤原行成が藏人頭に就任した。また、安倍晴明は藏人所所属の陰陽師であった。

・彰子立后での活躍。

行成の論理は『東三条院詮子、円融天皇皇后遵子（じゅんし）、中宮定子ともに出家しているので藤原氏の祭祀を勤めるためにも彰子を立后すべきである』。

これにより初めての一帝二后を成功させたのである。

・敦成（あつひら）親王の立太子での活躍。

行成の論理は『定子所生の敦康（あつやす）親王ではなく、道長外孫の敦成（あつひら）親王を立太子にすべき（文徳天皇が正嫡の親

王でなく良房外孫の清和天皇を立太子した前例あり）。そうしないと変事が起こる。皇位は宗廟社稷（そうびょうしゃしやく）の神の思召しで人力が及ばない』。

さらに『定子の外戚高階氏は齋宮で不祥事があった（在原業平と齋宮恬子が密通、生まれた子を高階氏が引き取ったとの言い伝え）。その子孫（定子の母親は高階貴子）なので大神宮に祈謝しなければならぬ』。

行成は道長と同日、56歳で逝去しその生涯を道長に捧げた。

七・道長の後半生

「一家立三后の栄」の宴（1018、1016）

道長の3人の娘が、皇后（威子たけこ）、皇太后（妍子きよこ）、太皇太后（彰子）を全て独占した時の宴。この時、道長52歳で、まさしく人生のピークであった。

この時、あまりにも有名な、『望月』の歌を詠った。

しかし、御堂関白記には「われ和歌を読む」としか書かれていない。道長としてもそれほど良い歌ではなく、後世に残すつもりはなかったようである。一方、小右記には、

『和歌を詠もうと思う。必ず和すように』ということだ。答えて云ったことには、「どうして和し奉らないうことがありましよう」と。また、云ったことには、「誇っている歌である。但し準備していたものではない。」この世をば我が世とぞ思ふ望月の欠けたる事も無しと思へば』とあり、道長のイメージを決定づけるこの歌が後世に残ってしまったのは道長の本意ではなかったのである。

また翌日の小右記には道長は目の衰えを愁いている。『黄昏・白昼によらず、ただ特に見えないのである』。

道長には望月ははっきりとは見えていなかったのである（糖尿病網膜症?）。

八・彰子の生き方（まとめ）

・若い頃は強引な父（道長）と一条天皇との間で悩みも多かったが、慈悲心と母性に満ち溢れた中宮であった。

・12歳で入内し、24歳で一条天皇を彼岸に送り、29歳で国母となった。

・父が用意した文化サロンを継承・発展させ、文学的才能に溢れた女

会員研究

中尊寺を建立した

藤原清衡に学ぶ

高野 賢彦

藤原清衡は、この世に「みちのくの浄土を造り上げた。そして五十六億七千万年後の弥勒下生のとき復活することを願い、死してもミイラとなり、その時を待つことにしたというのだ。清衡が今や世界遺産となった中尊寺を、仏教文化がシルクロードを経て地球の東端の平泉に壮麗な寺院を、造営して魂の救いを求めようとした動機は一体なんであったのか。

一、清衡の出自と

当時の歴史的背景

東北地方は「東山道の奥の国」、すなわち「道奥国」（みちのくのくに）と呼ばれていた。その後「道」は「陸」に変わって「陸奥国」となり、「陸」の読みが「ろくニ六（むつつ）」であるから「むつ」が陸奥の一般的な読みになっ

たという。清衡は宮城県南部の亘理（わたり）権守（ごんのかみ）であったが、位があっても職がない散（さん）位（に）の藤原経（つね）清（きよ）と、みちのくの囚われの身であった俘囚（ふしゅう）（長安部（あべ）頼（より）良（よし）（頼時）の女との間に生まれた（一〇五〇）。

当時の歴史的背景は、聖武天皇によつて多賀城が築城（七二四）されたこと、みちのくから献上された黄金によつて奈良の大仏開眼（七四九〜五二）がなされたこと、桓武天皇によつて平安京遷都（七九四）と坂上田村麻呂を征夷大將軍に任命して行われた蝦夷（えみし）征伐という二大政策が推進されたこと。そして胆沢（いざわ）城（岩手県・水沢市）を設置（八〇二）すると、やがて蝦夷

族長の阿呂流為（アテルイ）と母礼（モレ）が降伏してきたこと。また天台宗・真言宗が開かれ（八〇五〜六）、円仁が不断念仏を起こし、空也が称名念仏を唱え、恵（え）心（しん）僧都（そうづ）源信が『往生要集』（浄土思想）を著わした（九八五）。そして摂関政治が全盛を迎え、藤原道長・頼道が法成寺・平等院を創建して阿弥陀堂を造り（一〇二二・五二）、末法時代＝絶望の時代へ突入（一〇五二）した

折しも藤原清衡が誕生し、前九年の役（一〇五一）が起こり、後三年の役（一〇八三）が起こったこと。そして白河上皇の院政が開始（一〇八六）され、中尊寺造営・落慶供養（一一〇五・二六）が行われ、清衡が死去（一一二八）。つづいて保元の乱・平治の乱（一一五六・一一五九）が起こり、法然の浄土宗が成立（一一七五）したことがあげられよう。

二、前九年の役と後三年の役

桓武天皇は再三にわたつて南方へ張り出してくる「まつろわぬ荒ぶる民」を征伐するため征夷大将

軍・坂上田村麻呂に節刀を与え、延暦二十一年に水沢に胆沢城を築かせた。

蝦夷の組織的抵抗は八世紀末から九世紀初めにかけて族長アテルイが同志のモレとともに大和朝廷と対峙したが、ついに田村麻呂の大軍に降伏したのである。

田村麻呂はアテルイらに夷（い）をもつて夷を制する方策、すなわち自治によつて治めさせる方策を上申ししたが、受け入れられなかった。そのため彼等は八〇二年に摂津の枚方（ひらかた）で処刑され、蝦夷との決着は前九年の役と後三年の役に持ち越されることになった。

安倍頼時の女を妻にしていた藤原経清は奮闘したが、厨川（くりやがわ）柵（さく）が落城のとき鈍刀で切り殺された。経清の子の清衡はこのとき若十七歳、安倍貞任の弟宗任は捕らえられて伊予へ連行された後に太宰府へ流された。その後、後三年の役が起きたが、これは源義家が介入した戦なので朝廷は義家の私戦と認識した。清衡は二十八歳となり、妻を迎え、子が生まれた。しかし清衡はその後の戦いで難を逃れたが、

妻子が犠牲になった。

前九年と後三年の二つの大戦で、ただひとり生き残った清衡は広大な領地を得たが、父が極刑に処され、妻子が殺害されるという大きな犠牲を払ったのである。

三、清衡が中尊寺を造営した動機
蝦夷は朝廷から再三にわたって討伐を受け、その都度、黄金、駿馬、絹布、漆、鳥の羽、昆布、アザラシやアシカの毛皮など北国の特産物を貢いできた。しかし彼らは政治の圏外へ置かれ、順化しても俘囚などとさげすまれ、まつろわぬ民でしかなかった。

清衡は権力者になったが、前半生の体験から、都人の利権をあさる介入と偏見ゆえの哀史を忘れることが出来ず、争いのない「みちのく浄土」を造ろうと考えるに至った。すなわち仏教の最高法典・法華経の根本精神である絶対平等の平和な世界を東北地方に実現することを悲願とし、長治二年（一一〇五）に中尊寺の造営に着手したのである。時に五十歳であった。

清衡は伽藍を築くまで二十一年を要し、死の二年前の三月によう脇士の弥陀像は九体。丈六の弥陀像が左右に並ぶ九品仏。源頼朝がその威容に驚き、鎌倉に永福寺を建立した（今は廃寺）。

五、金色堂と金鶏山

金色堂の木工は棟梁物部清国のほか小工十五人、鍛冶二人、そして仏師は定朝であった。壁、天井、床、扉、縁など、すべて布着せし漆を塗り金箔を押し仕上げ、柱には南方の夜光貝を埋め込んで荘厳している。この堂はずっと光堂（＝阿弥陀堂）とよばれていたらしく、金色堂と呼ばれた初見は安元二年（一一七六）、清衡の死から四十八年後である。

本尊は阿弥陀如来坐像、脇侍は左が観音菩薩、右が勢至菩薩の弥陀三尊である。その左右に三体ずつ六体の地藏尊が列立し、最前列では時国・増長の二天が憤怒の形相をして守護している。

金色堂はそもそも清衡の靈廟だったのか。清衡は南無阿弥陀仏を唱えながら、須弥壇の周囲を巡って常行三昧の日々を送っていた。金色堂は建立当初は阿弥陀堂であったが、清衡が弥勒下生とよき復活することを願って埋葬され

やく完成を見た。都から勅使を迎えて落慶を祝い、当代の一流の学者藤原敦光が起草し、能書家の中納言冷泉朝隆の筆になる「供養願文」のなかで造営目的を次のように述べている。

「ここに国家鎮護の大伽藍を建立し供養する。その鐘の音は平等に苦しみを取り除き楽しみを与える。ここでは古来、官軍・蝦夷ともに死ぬ者が多かった。鳥獣魚介の類でも殺されたものは数かぎりない。魂はみなあの世へ去ったかもしれないが、朽ち果てた骨は今もってこの地の塵（ちり）となつて止まっている。二階大堂の鐘が鳴って地を動かすことに罪なくして逝った者の靈魂（冤（おん）霊（れい））を浄土世界へ導いていただくよう祈る」。

「自分にはからずも俘囚長の地位にあるが、貢物の余りと財産の残り金すべてをはたいて吉相のこの地にお寺を建てた。これはまさに仏国土（浄土）そのものである。このようにして皇族、大臣諸侯、文武百官、万民にいたるまで治世を楽しみ、長寿を誇ることができるよう御願寺として長く国家のため心からの誠を祈るよう」

てから、靈廟としての機能を兼ねることになった。
なお遺体が腐敗せずミイラになっているが、これは偶然ではなく「聖なる存在」として残そうとした結果であり、そのために、漆、金箔、建材の青森ヒバ、棺底の砂などが使用されている。そして清衡は金色堂とセットの金鶏山（平泉の須弥山＝仏教世界の聖なる山）に経筒を埋めているが、これは弥勒下生の復活を祈ったものと言われている。

六、紺地金銀字交書一切経
これは清衡の寺院造営の発想の基底になったもので、わが国の写経史上の至宝である。経堂の創建は日本最古の棟木によって保安三年（一一二二）であることが分かっている。

清衡が自分よりやや年長の白河法皇をはじめ天皇家の人々の長寿を祈念し、併せて自らの功德によって極楽往生することを願って書写したが、どうして金銀字の写経をされたのであろうか。

それは京文化への憧憬、信仰、美意識、死生観がかかわっていたのか、悲惨な実体験からの魂の叫

たい」。

清衡は死に至る二年ほどの間、金色堂内の須弥壇を巡りながら南無阿弥陀仏を唱え、常行三昧の日々を過ごしていたようである。

四、中尊寺はどのような寺か
中尊寺の宗旨は天台宗（山門派）であり、最高法典は法華経である。そして開山は寺伝では慈覚大師円仁（下野の人）である。時は嘉祥三年（八五〇）円仁は比叡山の開山最澄に師事し、叡山の第三代座主で、山門派の祖である。最澄と同時に大師号を賜っている。

円仁は唐の五台山などに留学して天台教学を大成し、常行三昧堂を建立するなどして叡山興隆の礎を確立し、福利人民を旨指して衣川のほとりの関跡に草案を結び、天台教学を大いに鼓舞したというが、それは清衡が生きた時代とは異なる。清衡を開眼させたのは、後代の自在坊蓮光という叡山の法師と伝えられる。

草創は清衡であるが、すでに末法の世になっており、清衡らの関心事は「あの世」ではなく、「この世」を浄土にしたいということにあった。

びだったのか。さらには、前九年の役が始まった翌年が、末法時代へ突入した第一年目ということも分かっていたらしく、その動機にはいろいろなことが絡み合っていたようである。

写経の奉行には自在坊蓮光が当たり、少なくとも十数名の写経僧が八年がかりで、五三九〇巻を書写したという。

ところが不思議なことに、中尊寺経の一部が、高野山金剛峯寺や大阪河内の観心寺に現存している。移動した日取りは慶長三年（一五九八）六月八日といわれ、異動を命じたのは豊臣秀吉であるという。秀吉にそれを勧めたのは醍醐寺の座主三法院義演ではないかと言われている。その時期はおそらく醍醐の花見のときらしい。秀吉が死去したのは同年八月十八日である。

七、清衡の最期

清衡は天治三年（一一二八）七月十三日に死去。享年七十三。昭和二十五年三月、朝日新聞社学術調査団が金色堂に埋葬されている清衡ら奥州藤原氏の遺体の調査をした。俘囚を称していた同氏は、

中尊寺の僧が源頼朝に差し出した「寺塔以下注文」によれば、中尊寺の主な建物には以下のようなものがあつたという。

一基の塔、これは関山の山頂、一三四mに建てられた塔で、そこには釈迦如来＝中尊を納め、その下を奥大道（白河く青森・外ヶ浜）が走って人々が往来した。

笠卒塔婆、これは行程二十余日の奥大道一町毎に塔婆四千七百基を建てたほか、村々に堂舎を建設した。

そして塔婆正面に金色の阿弥陀像を描き、また園城寺、興福寺、東大寺などで大法会を開いた。金色堂、これはアフリカ象の象牙で飾られていた。棟上げは天治元年（一一二四）である。なお昭和二十五年に金色堂の学術調査が行われ、清衡らのミイラ三体と泰衡の首などが詳細に調べられた。

経堂、この本尊は騎師文殊五尊像であり、宋本の紺紙金銀字交書一切経（五三九〇巻）を収蔵している。このお経（きょう）が、中尊寺造営の基本的な考えの元をなしているという。

二階大堂（大長寿院）、これは高さ五丈。本尊は金色の阿弥陀像。

アイヌか、それとも日本人か、誰もが大きい関心を寄せていた。
調査報告によれば、清衡の血液型はA B型である。死因は『吾妻鑑』に入滅の年に臨んで、にわか

に初めて逆襲供養を行い、百ヶ日の結願のときに当たって一病もないのに合掌して仏号を唱え、眠るように閉眼したとあるが、実際は脳溢血のような血液循環障害であったという。さらに鼻高、指紋の型も日本人と同様であり、奥州藤原氏は総じて日本人そのものだったという。このことから安部一族もまたアイヌではないことが間接的に分かったというのである。（完）

【参考・引用文献】

- 日高の時代 野村哲郎 河北新報出版
- 中尊寺千に百年の真実 佐々木邦世 祥伝社
- 平泉中尊寺 金色堂と経の世界 佐々木邦世 吉川弘文館
- 藤原清衡 平泉の世紀 高橋富雄 人と歴史シリーズ
- 金色の棺 内海隆一郎 筑摩書房ほか 以上

『もうひとつの古代史』逸文④
 復原「空白の622年」考

忌部 守

はじめに

『日本書紀』の推古紀の記述には、二つの不思議がある。一つは、最初の女性天皇でありながら、女帝即位の経緯が書かれていない。当時はまだ、兄弟継承・長子継承などの決まったルールはなかったのだから、推古即位には相当な議論・争いがあったはずだが、それが一切書かれていない。

初めて女性が天皇になるとすれば、その正統性を示すことが必須であり、その「正統性」とは、皇祖神が女性という事であったと筆者は考えている。皇祖神が女性であれば、天皇が女性であると敢えて書く必要はない。(*1)

もう一つの不思議は、『日本書紀』によれば推古天皇の治世は三十六年と古代の天皇の中でも長いのであるが、何故か推古三十

り、当に釈像の尺寸王身なるを造るべし。(中略)二月廿一日癸酉、王后即世、翌日法王登位す。

この復原記事①は、法隆寺金堂に安置されている釈迦三尊像の光背の銘文である。聖徳太子のお膝元である斑鳩法隆寺の同時代史料であり、その信憑性は高い。一方、『日本書紀』によれば、聖徳太子の死は、前年の六二一年(推古二十九年)の二月五日の事とされているが、現在は六二二年二月が正しいとされて定説になっている。つまり、『日本書紀』は聖徳太子の死を前年の事として、六二二年の一年分の記事を削除していることが判明している。

加えて、『日本書紀』は聖徳太子本人の薨去のみしか記述しないが、光背の銘文によれば、聖徳太子の死の前日に夫人の膳妃が亡くなり、更には前年の十二月に母親の穴太部間人皇后が亡くなっている。つまり、僅か三ヶ月の間に三人が死亡しているという異様な状況だったのだ。

釈迦像の光背銘によれば、「深くおも(懐)い、毒をうれ(愁)いて、共に発願」して太子の等身

大の釈迦像を造ったという。通常であれば、「深く嘆き悲しんで」と読めるが、家族三人がほぼ同時に死に至ったという異様な状況を考えれば「毒を愁い」とも読めるのではないだろうか。

この光背銘は、釈迦三尊像の縁起を書いたものであり、縁起にはしばしば誇張があるが、仏教に帰依した太子の回復を祈って、王子らが発願したという内容には説得力がある。また、釈迦像は古式を残して太子と同時代のもので、銘文も直接光背裏面に彫られており、史料的な価値は高いといえる。

それでは、なぜ聖徳太子は暗殺され、その事実を『日本書紀』において隠されたのだろうか。筆者は、太子が斑鳩の地に斑鳩宮と法隆寺を建設したこと自体に答えがあると考えている。

よく考えて欲しい。推古天皇のいる飛鳥のみやこから斑鳩宮まで、直線距離で二十キロ程も離れており、大和川で船を利用するにせよ、太子道の陸路を使つたにせよ、半日程の時間が掛かってしまう。現代においても法隆寺は、奈良市内や明日香村から遠くて不便な場所だ。法隆寺を造つただけで

はなく、聖徳太子は自分の宮も建設して斑鳩宮に遷居したのである。これでは、推古天皇や蘇我馬子らとの決別を意味していると考

えざるを得ない。管見の限りでは、聖徳太子が天皇になった形跡はない。しかし、太子は天皇になろうとして暗殺された可能性が高い。

当時の太子周辺の状況を見てみよう。まず、推古天皇であるが、崇峻天皇が暗殺された後、太子はまだ若く、つなぎの女帝になったと考えられる。但し、詳しい経緯は『日本書紀』には記述はない。

それから十年以上経過して、年齢や実績から言って太子が即位してもおかしくはない状況になったはずだ。しかし、太子は天皇になっ

ていない。その太子が斑鳩の地に、自分の宮と壮大な寺院を遠隔地に建設して移住したとなれば、推古天皇は太子の意図を訝つたであろうことは想像に難くない。

一方、大臣蘇我馬子はどうか。蘇我氏が百済系の渡来人を積極活用していたことは有名な話であり、日本最初の本格的仏教寺院である飛鳥寺の建設に際しても、百済に支援を要請している

親百済派の政治家である。聖徳太子が高句麗僧である慧慈を顧問にして近侍させていることには快く

思っていないかつたのではないか。朝鮮側勢力からすれば、高句麗と百済は敵対関係にあり、それぞれ日本で主導権を争っていたのである。馬子は既に天皇になっていた崇峻ですら殺害している。

推古天皇であれ、蘇我馬子であれ、聖徳太子を殺害する理由も権力も持っていた。太子が、斑鳩宮に遷居した推古十三年(605)から推古三十年(622)の間に危機があったと考えられる。(*3)

一方、大陸では隋に代わって618年(推古二十六年)に唐が建国され、621年(推古二十九年)には唐が中国を統一して、問題の622年(推古三十年)を迎える事になる。

聖徳太子が亡くなり、国内の政治バランスが崩れ、政治状況が大きく変わったと推定される。隋が中国を統一すると直ぐに遣隋使が派遣されたが、今回の唐の統一には630年(舒明二年)まで遣唐使派遣は実施されていない。国外に対する目配りは無くなり、蘇我馬子を中心とする内向きの一極体

制になった可能性がある。

また、僧慧慈は隋との衝突が決着した後の615年(推古二十三年)に高句麗に帰国している。この後、日本の外交は百済重視政策を強め、663年(天智二年)の白村江の敗戦まで一挙に突き進む事になる。

2 アマテラスは男神だったのか？

【復原『日本書紀』②】
 是の年(六二二年)、酢香手皇女、自ら葛城に退きて薨せましぬ。是の皇女、橘豊日天皇の時より三十七年の間、伊勢神宮に拜して日神の祀に奉る。

この復原記事②は、実際には同じ『日本書紀』の用明天皇の即位前紀にある記事だが、そこには詳しい記事が推古紀にあると注記して置きながら実際には推古紀になつたため、『日本書紀』の編纂段階の途中で意図的に削除された事は確実だ。しかも、三十七年を計算すると、その死亡した年はピタリと622年(推古三十年)となる。わが意を得たりである。それでは、伊勢齋宮である酢香手(すか

て)皇女の薨去は何を意味し、そしてなぜ削除されたのか考えてみよう。

筆者は、論文「原アマテラス」の中で、「アマテラス」は、元々男神である「天照御魂神」(アマテルミタマ)という神であったが、それを意図的に女神にしたと論じた。そして、男神から女神に変身した時期を二人の女帝、すなわち推古女帝から、遅くても持統女帝の時代と考えた。しかし、今回の復原によって推古女帝の時代であることが明確になったと言える。(*4)

まず、酢香手皇女であるが、用明天皇の皇女で、母親は葛城直磐村の女である。用明(橘豊日)天皇の即位直後に伊勢齋宮に任命され、以後崇峻・推古と三代三十七年の長きに齋宮として奉仕したという。そして、引退した葛城とは母親の故地ということになる。

伊勢神宮の齋宮については、天武朝の大来皇女を以って齋宮成立の初めと一般には考えられているが、用明紀の記述は具体的であり、また退任した記事が推古紀になく、筆者は故意に削除されたためと考えている。

つまり、天皇の即位毎に齋宮の任命を開始したのが天武朝の大来皇女以降であつて、その前任である酢香手皇女は三十七年、天皇二代の長きに亘つて在任したのは、齋宮制度成立以前であつたからと考えられる。そして、天武天皇が制度を完成させたのは、壬申の乱の時の経緯によるものだ。天武天皇が朝明川の川辺でアマテラスを遙拝したこと自体、それ以前にアマテラス信仰が存在した事を傍証している。

それでは、なぜ酢香手皇女は622年に退任したのだろうか。その答えは二年前の620年にある。それは、『天皇記』及び『国記』が編纂された事である。『古事記』『日本書紀』に先行すると考えられる『天皇記』『国記』両書の編纂である。

もちろん、既に年配となつていた酢香手皇女が死を予感して退任した可能性もある。しかし、それならば推古女帝が後任を選定してもよい。実際には、その後約五十年後の大来皇女まで齋宮は任命されてない。さらには、酢香手皇女の関連記事が推古紀で削除されている説明もできないのである。

歴史書の編纂は、単に過去の記録をまとめるだけではない。時の政権の意向に基づいて新たな歴史観が示されるものだ。『日本書紀』の編纂時にも、まず天武天皇の正統性が示され、次に天孫降臨神話や出雲神話が語られ、そして持統女帝から孫の文武天皇への皇位継承の正統性が示されている。アマテラス（持統女帝）が、息子のオシホミミ（草壁皇子）ではなく孫のニギノミコト（文武天皇）に天孫降臨（皇位継承）させたことに良く現れている。

この『天皇記』『国記』が現代に残っていないことから、実際には編纂されなかったとする考えも根強いが、乙巳の変で蘇我蝦夷邸宅が焼けた際に『国記』を救い出したのが船史恵釈であつたとする記事はリアリティがあり、筆者は実際に編纂された可能性が高いと考えている。なぜなら、船史恵釈（僧道昭の父）は渡来人系で編纂に関与した可能性もあるからである。この記事を捏造した理由は低いと言つて良い。

それでは、『天皇記』『国記』の中には何が書いてあつたろうか。まず、蘇我氏及び蘇我政権の正

統性を主張している事は間違いない。事実、蘇我氏は、渡来人を使つて当時最新の政策を実施していた。そして、初の女帝である推古天皇の皇位継承の正統性だろう。そこに、アマテラスを男神であるアマテルから変身させる理由がある。天皇の祖先神であり最高神でもあるアマテラスが女神であれば、天皇が女性である事を説明する必要はないと言える。

日本の神々は本来は男神で、だからこそ神々の前で女性の巫女が舞を舞つて慰めるのだ。

このタイミングで、齋宮である酢香手皇女が退下し、その後任が任命されなかったことが興味深い。齋宮として男神アマテラスに奉仕していたその意味が変わつてしまつたと想定する事が出来る。これは、筆者の仮説に過ぎないが、620年の『天皇記』『国史』の編纂が622年の酢香手皇女の退下に直接繋がつてると考えている。したがつて、最高神であるアマテラスに622年にステータス変更があつたとすれば、これを『日本書紀』の記事に残すことは出来ずに、削除される可能性は高いのだ。

3 天武天皇の父親は誰なのか？

【復原『日本書紀』③】

天武天皇は、推古三十一年誕生し（中略）朱鳥元年丙戌九月九日崩す。六十五歳。高市県大内陵に葬る。

復原史料③は、『本朝皇胤紹運録』からの引用で、後代の十五世紀のものである。文面に推古三十一年誕生とあるが、数え年六十五歳で崩御するには、推古三十年でなければならぬ。朱鳥元年の死亡は、『日本書紀』にも詳しく記載されており動かない。しかし『日本書紀』には、年齢に関する事が一切書いていないのだ。そこで、他の史料に頼らざるを得ない。

天武天皇が推古三十年生まれであるとすると、この年の前後で、天武天皇の父親が活躍したことになる。『日本書紀』の天武紀の冒頭には、天武天皇は天智天皇の同母弟とのみ書いてあり、舒明天皇の皇子とは書いていない。そこで、母親である齊明紀を見てみると、齊明女帝（宝皇女）は初めは用明天皇の孫の高向王と婚姻して漢皇子を生み、後に舒明天皇と婚姻し

て二人の男（実名は無い）と一人の女を産んだと書いてある。

『日本書紀』は原則天皇毎に巻が分かれており、執筆方法がそれぞれ少し違うという特徴がある。また、壬申の乱の正統性を主張するために最初に天武紀から書かれたが、天武紀だけみれば、天武天皇は天智天皇の同母弟とのみ記述されていることになるのだ。

齊明女帝の子供で、舒明天皇の子ではないとなると、今度は齊明紀の記述が気になつてくる。それが、齊明女帝は最初に高向王と結婚して漢皇子を産んだという記述だ。天武天皇は、齊明女帝の子である限り、舒明天皇の子でなくとも一応皇位継承権はある。それでは、天武天皇は高向王の子である漢皇子なのだろうか？

推古三十年の時点で、高向王が誰かと追求してみると次の三人の可能性があると筆者は考えている。まず用明天皇の孫の高向王であるが、記紀や関連史料にこの高向王は全く現れない。つまり、高向王の存在は確認できないが、高向王の子とせざるを得ないというのが現在の定説である。

しかし、筆者はあと二つの可能性があると考えている。それは、齊明女帝の嫁ぎ先として便宜的に「王」としているだけで、高向を王ではなく氏と考えると、①蘇我氏系の高向氏、②渡来人系の高向玄理の可能性がある。（*6）齊明女帝は、皇后にでも天皇にでもなる存在ではなかった。具体的には、敏達天皇の三世孫で茅渟王の女だ。皇族ではあるもののその地位は低い。したがつて、本来であれば皇族の王辺りに嫁ぐべき存在であつた。だから、『日本書紀』は高向「王」と記述したのだろう。それが、再度天皇に嫁いだため、最終的には本人も天皇になつたということなのである。

通常であれば臣下である蘇我氏系の高向氏に嫁ぐ可能性は低い。それでは、有能な渡来人系の高向玄理の場合はどうだろうか？筆者は可能性があると考えている。

高向玄理は、七世紀中葉の政治家として重要な人物だ。『日本書紀』によれば、推古十六年（六〇八）に当時の大國の隋に留学し、帰国後の大化元年（六四五）に改新政府の国博士（国政顧問）になり、さらには白雉五年

（六五四）には遣唐使として重要任務を抱えて新羅経由で入唐、ついに唐で客死するという壮絶な人生を送つた。

玄理は、当初は「高向漢人玄理」と呼ばれ、カバネを得て「高向史玄理」となつて、四位まで上つた公卿クラスだ。「高向史」（たかむくのふひと）は、『新撰姓氏録』によれば応神天皇の時代に朝鮮半島から一族と共に渡来した阿智王の子孫という伝承を持つている。「漢人」（あやひと）とは朝鮮半島からの渡来人で中国系と称し、漢氏の配下にあつたものをいい、「漢」皇子にも通じる。天武天皇は、壬申の乱で大友皇子を倒して以後は親新羅政策を採つた事は有名な話で、この説にはとても意味がある。天武天皇の新羅ルートが解明できるからである。

しかし、筆者の高向玄理説にも欠点がある。それは、玄理の留学先からの帰国を『日本書紀』は、新羅経由で舒明十二年（六四〇）の事と記すからだ。しかし、それでは隋から唐に体制が変わつた中国の留学に三十二年も要した事になり、『日本書紀』には622年の一年分の記事が削除されている

事実も勘案すれば、中国や朝鮮半島の国際問題を抱えて、640年以前に日本に帰国した可能性も十分にあり、とても魅力的な推論だと筆者は考えている。

つまり、天武天皇の母親は齊明天皇であるが、父親は高向玄理であるという仮説である。

【註】
（*1）拙著「もうひとつの古代史」第4章「原アマテラス考」（歴史研）ご参照。

（*2）拙稿「聖徳太子Ⅱ斑鳩復活論」（『歴史研よこはま』第八十一号）ご参照。

（*3）齋木雲州『飛鳥文化と宗教争乱』（大元出版）も暗殺説を採り、犯人を橘夫人とする。

（*4）武光誠『誰が天照大神を女神に変えたのか』（PHP新書）は、六世紀の継体天皇と中臣氏の時期であるとする。

（*5）書紀成立区分論には、森博達『日本書紀の謎を解く』（中公新書）などがある。

（*6）小林恵子『興亡古代史』（文芸春秋）も高向玄理を指摘するが、推古三十一年の記事を同三十年のものと考えている。以上

会員研究

豪商を覗いてみる

瀬谷俊二郎

近世日本の経済発展の中で巨万の富を蓄えた江戸期の大商人（豪商）の中から話題性のある人物を取り上げてなかを覗いてみた。

織豊政権から江戸幕府の成立へと日本の統一が進み、鎖国前で海外発展を遂げることが出来た時代は小西隆佐、今井宗久等が南方貿易で活躍して巨利を得たが17世紀中葉に鎖国政策がすすめられ国内市場が安定化されるに伴い彼らは急速に没落していった。

他にこのころの豪商としては、朱印船貿易で財を成し高瀬川開削等を行った角倉了以やルソン（現在のフィリピン）を舞台に活躍した納屋（呂宋）助左衛門等が有名である。

・・・助左衛門はのちに、秀吉に献上したルソン壺が現地での安物（便器）であるとかわりその怒りを

その一方、江戸時代の豪商の中には創業当初の専門職種（蔵元、両替商、米商、海運業、呉服商、問屋、開発・・・）の規模拡大につれ周辺・関連業を兼ねて企業の発展継続を図る堅実経営志向型も出てきた。

呉服と両替商を営んだ三井家、酒造・廻船・両替・掛屋の鴻池家、銅の精錬と鉱山開発に携わった住友家などは着実に事業を継承し近代に入っても財閥として繁栄している。

三井家の場合は、当主が高利の時（1673年）本拠（伊勢松坂）から江戸本町に越後屋呉服店を、京都に呉服仕入れ店を開業して「現金掛け値なし」の画期的商法で人気を博し三越百貨店の基礎をきづいた。

越後屋呉服店は金銀御為替御用達も務めるようになり、商売も広告用チラシの配布、呉服地の切り売り、小切れの販売、店員の専門化などの創意工夫で売り上げを伸ばした。

大阪の鴻池家は摂津・伊丹の酒造業であったが、善右衛門（3代）

買ってルソン↓カンボジアへ脱出し、現地で再び豪商になったといわれている。

元禄期（17世紀後葉から18世紀初頭）になると「紀文」の名で知られる紀伊国屋文左衛門、「奈良茂」といわれた奈良屋茂佐衛門、西回り航路・東回り航路の整備で知られる河村瑞賢（彼らはいずれも材木商）が明暦の大火後の復興に伴う材木需要を利用して巨額の利益を上げ更に「紀文」は上野寛永寺の根本中道の造営を、「奈良茂」は日光東照宮修理事業を請け負い、ここでも利益を得たといわれている。一方河村瑞賢は御家人に取り立てられた。

その後、（吉原での）桁外れの豪遊が咎められたうえ新井白石の「正徳の治」において土木事業が差し控えられたため「紀文」と「奈良茂」

の時大名貸しを拡大するとともに新田開発にも着手した。宝永元年（1704年）大和川の付け替え工事の際に生じた土地を鴻池新田としたほか市街地整備にも注力し安定した地代収入等で繁栄した。

大阪淡路町の住友家は南蛮吹き の精錬で財を成し、初代吉左衛門が幕府御用の銅山師となり、その子友芳が元禄3年（1690年）伊予の国（愛媛県新居浜市）で別子銅山を発見し豪商の地位を不動のものとした。

江戸期の物流は廻船問屋が中心であり、和泉佐野の船問屋である唐金屋が大船を使って越中・加賀・能登などで産する米を運んで巨富を得たことが「日本永代蔵」で紹介されている。泉佐野だけで300石以上の廻船が80艘以上あったという。

瀬戸内海に面した諸港には大規模な廻船問屋があり、江戸米不足の折に庄内地方の米を江戸に運ぶ等航路を開発して商売とした。歌にもうたわれた笠島の丸屋はこの中の一つである。

長大な航路を航行して利益を上

は廃業を余儀なくされた。

大阪では、蔵元であった淀屋が、経済の中心的存在であった米の質・量・価格を安定させるため全国の米相場の基準となる米市場の設立を幕府に願って認められた。

材木商だった初代常安は中之島の開拓を行い、2代目言當は京橋に青物市、開削した海部堀川の船着き場「永代浜」に魚の干物を扱う雑喉場（ぎこば）市を設立し米市場と合わせ大阪3大市場を一手に握った。

さらに加賀藩の米も扱うようになって日本海から関門海峡・瀬戸内海経由して大阪に至る西回り航路を取る北前船の先鞭をつけ、糸割符の加入も認められて海外貿易をも始めた。

当時全国の米收穫量は約2700万石で大半は自家消費や年貢で市場取引分は約500万石であったが大阪でその4割である約200万石が取引されていた。

淀屋は米貯蔵のための蔵屋敷を中之島に135棟建て、そこへ渡るため土佐堀川へ淀屋橋を自費で架けた。

上げていた菱垣廻船や酒荷用の樽廻船を駆使した問屋商人は株仲間を結成して不正防止や事故防止を共同で行うとともに営業の独占も行っていったようである。

地方の豪商では加賀藩の銭屋五兵衛、出羽酒田の本間光丘、盛岡藩の小野組が有名である。

銭屋は戦国時代に滅亡した朝倉氏の末裔を称し、江戸時代後期の加賀の御用商人となり、宮腰（当時隆盛の北前船航路の重要な中継港：現在の金石）を本拠に海運業を行い、米の売買を中心に両替商、しょうゆ醸造、古着商等幅広い事業を行った。

最後の当主（3代目五兵衛：1774～1852）の最盛期には1000石積みの持ち舟を20艘以上、全所有船舶200艘を所有し、全国に34店舗の支店を構える豪商で各地の用地買収、新田開発事業、支店の開設などその商業記録は彼の手記「年々留」に詳細に記されている。

海外交易の必要性を痛感していた五兵衛は樺太でアイヌを通じて

米の取引は売買成立時に手形の受け渡しで行われたが、この帳合い米取引は世界の先物取引の起源といわれている。

なお、この淀屋の繁盛ぶりは井原西鶴の「日本永代蔵」の中にも記されている。

しかし宝永2年（1705年）5代目（辰五郎）廣當が22歳の時幕府の命により關所処分となった。理由は「町人の分限を超え、贅沢な生活が目にする」というものであったが、実情は諸大名に対する莫大な金額の貸付でその帳消しが目的であったと考えられている。

(20)

因みに關所時に没収された財産は、金12万両、銀125,000貫（小判換算約214万両）、北浜の家屋1万坪と土地2万坪、その他材木、船舶、多数の美術工芸品等の記録があるが、何よりも諸大名（40余）への貸し付けが銀1億貫余だったといわれている。

この淀屋の発展と凋落の顛末は近松門左衛門によって浄瑠璃「淀鯉出世滝徳：よごいしゅっせのたきのぼり」に描かれることとなった。

交易をおこない、国後・択捉ではロシアと抜荷取引を行ったが、自らも香港、厦門、タスマニアまで出向いて英米の商人達とも交易していったという。

しかし手を結んで密貿易を見逃す等後ろ盾となっていた金沢藩の勝手方御用係（藩政実務のトップ）の奥村栄実が死亡し、これと対立していた改革派が実権を握ると五兵衛の立場も変わってきた。

河北潟の干拓・開発工事を請け負った五兵衛は労働者として雇った地元住民と賃金のことなどから揉めた挙句、地域住民を全員解雇し能登から労働者を雇い入れて工事を始めたが難工事の上に地元民の妨害などもあって工事はうまく進まなかった。

(21)

さらに埋め立てに一部使用した石灰で魚が窒息死した際、周辺の農民・漁民が、銭屋が毒を流したと騒ぎ立て、五兵衛は噂を否定したが結局子の要蔵ら11名とともに投獄され獄死した・・・銭屋は財産没収・家名断絶となった。

山形酒田の本間氏は佐渡本間氏鎌倉～戦国時代まで佐渡国を支配

した氏族)の分家で酒田市を中心に農地解放による解体まで日本最大の地主と称された大庄屋・豪商で「本間様には及びもせぬが、せめてなりたや殿様に」と謳われるほどの

・・光丘が当主の時士分に取り

立てられ庄内藩の財政再建、砂防林の植林、米倉の建造(飢饉に備えた8か年備蓄計画)等を行っている。

盛岡の小野組は上方から木綿・古手などの雑貨を運び、奥州から砂鉄・紅花・紫根を上方に送り

物産交易で財を成していったが明治新政府の規制強化に対応できず1874年破綻した。

百貨店では、白木屋呉服店が寛文2年(1662年)江戸日本橋で、享保2年(1717年)に大文字屋呉服店(現在の大丸)が

会員研究

守成の名君忠宗の素顔

榎 良生

一. はじめに

宮城県牡鹿半島の付け根に万石浦(まんごくうら)と呼ばれる汽水湖が広がる。江戸時代には塩田が作られて仙台藩の財政に貢献した。現在では北岸をJR石巻線がとおり、湖面には牡蠣の養殖筏が浮かんでいる。

この名は仙台藩二代藩主伊達忠宗が鹿狩りにこの地に来た際に「ここを干拓すれば一万石の米が取れるだろう」と言ったことに由来すると伝わる。藩祖伊達政宗は三日月型の兜や右目の黒い眼帯(実際、

京都伏見で開業し現在に至っている。

・・幕府も諸藩も財政難に陥った際は豪商の御用金によって支えられてきたのである。 完

埋もれがちなその個性に着目して、江戸初期を逞しく生き抜いた彼の素顔に迫ってみたいと思う。

二. 政宗、忠宗親子の生涯

それでは父政宗と息子忠宗の生涯をざっと辿って行くことにしよう。伊達政宗は永禄十年(1567)出羽の国米沢城で十六代当主輝宗の嫡男として生まれた。南奥羽の広大な領地を拡大した後、天正十八年(1590)小田原攻めが開始されると、政宗はついに参陣を決意したが、伊達家の本領は十二郡七十二万石に削減された。そのうち、一揆を扇動したとして政宗はまたも疑われ、ようやく許されたものの本領のうち、四十四万石を没収され、葛西・大崎三十万石を得たものの所領は五十八万石に減封となったのであ

る。関ヶ原合戦の後、わずかに加増されて六十二万石の仙台藩主となったのである。その後は徳川三代に仕えて、外様でありながらこれをバックアップするようになっていくのである。三代將軍家光は戦国以来の武將として政宗を尊敬しており、御前での脇差帯刀も許したと伝わる。政宗が亡くなったのは、寛永十三年(1636)、江戸桜田藩邸で享年七十歳であった。家光は江戸で七日、京都で三日喪に服するよう異例のお達しを出したという。

忠宗は政宗と正室愛姫(めごひめ)との間に慶長四年(1600)年十二月、大坂城下で誕生した。姉に五郎八姫(いろはひめ)、異母兄に伊達秀宗がいる。徳川家康の五女・市姫と婚約していたが、夭折したため、池田輝政の娘(家康

の孫娘)の振姫(ふりひめ)が徳川秀忠の養女として嫁いだ。大坂冬の陣のち兄秀宗は伊予宇和島に十万石を与えられたので、忠宗が正式に宗家の後継者となった。政宗は死ぬまで藩主の地位に留まったので、家督を相続したのはその死(1636年)まで待たねばならなかった。姉の五郎八姫が嫁いだ家康の六男松平忠輝の改易や、政宗の母の実家である出羽最上家の改易など、伊達家は徳川から常にその動向を警戒されており、油断はならなかった。このため、政宗は藩主を降りることはなかったのである。彼は派手な父とは異なり謹厳実直で穏やかな人物であったとされる。父の死後、藩主として初めてのお国入りをすると、藩上層部の入れ替えを行い、新たな指導部を編成した。各種改革を実行し仙台藩の基盤固めを積極的に推進した。彼が亡くなったのは万治元年(1658)七月十二日、享年六十歳であった。

三. 守成の名君

それでは、本題の忠宗の藩政を見ていくとしよう。法治主義により藩政を確立し、四年目に検知を

実行し他藩と異なっていた度量衡を統一した。さらに「買米制(かいまいせい)」をはじめ、領内での

余剰米を江戸へ回送して販売し、その利益を農民にも分配したのである。これは農民のやる気を引き出して新田開発を促進する効果を生んだ。結果的に仙台藩は豊かなりなり、表の石高六十二万石のところ、実収は百万石を超えていたと言われる所以である。このようにして、彼は仙台藩の基盤固めに終生全力を投入したのであった。それによって、彼は「守成の名君」と称されたのである。

唐王朝を開いた二代皇帝太宗は臣下の諫言にもよく耳を傾け、これを纏めた問答集が『貞觀政要(じょうがんせいよう)』である。これは今でも帝王学の教科書として引用されることが多い。太宗が「創業(そうぎょう)と守成(しゅせい)はどちらが難しいか」という問いに家臣たちがそれぞれの立場で答えた。どちらも難しく比べようもないのではあるが、諺としては「創業は易く守成は難し」として、

新たな事業を興すことよりも、それを衰えさせることなく維持してゆくことは一層難しいとして、守

成の難しさを戒めるものとしてよく用いられている。特に、創業期の混乱を経て平和な「守成の時代」を迎えた時、リーダーとしてどう全うすることができるとは規模の大小を問わず経営者の愁眉の課題と言えよう。忠宗はこれをしっかりとやってのけたのだった。これには父政宗も相当に教育を施したのであったことが、佐藤憲一氏の著書『伊達政宗の手紙』(新潮選書)に記されているが、その手紙からいかに後継者の彼を大切に思っていたかがよくわかる。その中で息子に充てた一通を紹介するとしよう。これは江戸にいる忠宗に宛てた自筆の手紙である。

伊達忠宗宛

そこもと香会、葉流れ候様に承り及び候。用に候はんと伽羅(きゃら)三色遣はし候。(中略)尚々、息災に候哉。(中略)一兩日虫氣(むしけ)。はや本復、心安かるべく候。脇より聞き候はば機遣浸るべく候と、知らせ申し候。以上。(追伸略)

季夏九日九日
政宗(花押)

筆者の佐藤氏によると、政宗六十三歳、忠宗は三十一歳の頃、後継者として江戸にいるときは政宗に代わって幕閣や諸大名との付き合いをこなしていた。忠宗の香会に入用だろうと伽羅(香木)三種を送り届けたのである。虫氣(腹痛)があったが回復したぞ、と述べたのち、他から聞いたならば、かえって心配するだろうと思ったので、そなたに直に知らせたと結んでいる。見事なまでに人心の掌握に優れた政宗の真骨頂である。この術を後継者たる息子に自筆の手紙をもって伝授したのであった。息子も父と同じように心配りのできる人に育っていつて、守成の名君と讃えられたのである。

四. 終わりに

日本三景のひとつ松島には政宗が造営した瑞巖寺のほかにも伊達家にゆかりのある寺社が多い。政宗の正室愛姫(めごひめ・陽徳院)や長女五郎八姫の廟のほか、円通院という臨濟宗の寺院がある。境内には三慧殿(さんけいでん)という建物があり、別名御霊屋(おたまや)と呼ばれる。これは二代藩主忠宗と正室振姫との間に生ま

れた次光光宗（みつむね）の廟所である。兄の虎千代が夭折したため早くから嫡男として育てられた。文武に優れた性格も剛毅で政宗の再来かとも言われた。ところが、なんと十九歳の若さで急死したのであった。忠宗と振姫の悲しみと落胆はいかばかりであったろうか。

この建物は技術の粋を尽くした伊達家屈指の名建築で国の重要文化財に指定されている。その厨子には支倉常長が持ち帰ったバラの絵が描かれている。バラはローマ帝国の象徴であり、鎖国後のこの時期にこれを用いたあたり、忠宗の、穏やかながら芯の強い伊達家の意地のようなものを感じざるをえない。その後、忠宗は側室貝姫（かいひめ）との間に生まれた六男綱宗を跡継ぎとした。しかし、政宗から忠宗に伝えられた帝王学はこの時には引き継がれなかった。万治元年（1658）年、忠宗が齢六十で死ぬと翌年後を追うように振姫も五十三歳で死去した。綱宗は家督を継いだわずか二年後、酒食に溺れたとの理由で若く二十一歳で強制隠居に追い込まれて、これを契機として伊達騒動が始まるのである。三代綱宗の評判

は極めて悪いが、これは後世やや誇張された感が拭えない。彼はその後芸術的天分を発揮して、和歌、茶道、特に書画は狩野探幽に学んで優れた作品を多数残している。五十年に及ぶ江戸での逼塞した生涯ではあったが、帝王学ではないものの忠宗の優れた遺伝子が形を変えて引き継がれたであろう。

「伊達政宗の手紙」（佐藤憲一著：新潮選書）
「仙台藩ものがたり」（河北新報社編集局編）
「Kappo 2017.9月号」（伊達政宗の人間力）（プレスアート社編集）
この他瑞巖寺、円通院のHP、ウイキペディアを参考にした



伊達忠宗（ウイキペディアから）



円通院三慧殿（円通院HPから）



特別寄稿

古代びとの犯罪被害（二）

松尾 光

三、富士河畔の常世の虫騒動

道教という宗教がある。日本では道観（道教の寺院）をあまり見かけないが、台湾に行けば珍しくない。筆者は台北を訪れたさい、龍山寺の壮観さとその盛行ぶりを目の当たりにした。それだけでなく、小さな路地の左右を横目でみただけでも、家々には道教の祭壇が設けられているのがわかり、人々の信仰の篤さが窺えた。

道教の教えは五四八五巻の『道蔵』に纏められているというが、もともと難しい教義などなかった。当時も今も、人々がいちばん望んでいたのは、金を得ることと長生きすること、究極は富貴と不老不死でしかないのだ。

『日本書紀』皇極天皇三年（六四四）七月条に、東国の不盡河の辺に住まいする大生部多がこの望みに応えた宗教的勧誘をしは

じめたとある。多は、村人たちにある虫を祀ることを勧めながら、此は常世の神なり。此の神を祭る者は、富と寿とを致す。

といった。そして多に随従する巫覡らがこれに続いて、神がかりして得たという神の言葉を伝えると称して、

常世の神を祭らば、貧しき人は富を致し、老いたる人は還りて少ゆ。

と、尻馬に乗ってか報酬を得てか、ともかく勧めた。

このなかの常世とは、ずっと変わることのない世の中の意味で、『日本書紀』垂仁天皇九十九年明年条では吉祥である「ときじくのかぐの美」（じつさいは橘の実）がなっていると思われていた。変わらない世界というだけならば、長寿・不老不死だけしか想定されていないようだが、貧窮にあえいだ状態が

未来永劫続かれては、困り果ててしまう。だからもちろん前提となる望みとして、富み栄えた状態が求められ、同時にそれが永久不変に続く。そういうことが実現された社会が想定されている。

ここで富貴を齎すとされたのはじつさいは蠶（蚕）のことで、蚕が常世の神の神変自在の姿として出現した、と主張したのである。

此の虫は、常に橘の樹に生る。或いは曼椒に生る（曼樹、此をば褒曾紀と云ふ）。其の長さ四寸余、其の大きき頭指許。其の緑にして有黒点なり。其の完全ら養蠶に似れり。

とある。曼樹は『和名類聚抄』にイタチハシカミとあり、樹皮の色の山椒（はじかみ）で、たしかに芋虫・毛虫の類いがたかりやすい樹種である。山蚕が山繭を作り、それを

紡げば麻よりずっとましな繊維になり、資産もできるという筋書きだったろうか。それをうんと短絡させて、蠶を祀ればすぐにでも富貴になると謳ったのであろう。この呼びかけに、人々は、飛びつ

是に由りて、加勸めて、民の家財を捨てしめ、酒を陳ね、

菜・六畜を路の側に陳ねて、呼はしめて曰はく、「新しき富入来れり」といふ。都鄙の人、常世の虫を取りて、清座に置き、歌ひ舞ひて、福を求めて珍宝を棄捨つ。

とあるように、この虫の形を取った神が家や村の樹に付くようにと、財宝を投げ出して、道の辺に惣菜・獣肉や酒を並べたのである。もちろんそれらの供物は、この宗教集団や随従する巫覡たちのもとに運ばれ、かれらの富貴・蓄財の供給源となったのであろう。宗教の本部が荘厳で物が潤沢であればあるほど崇敬と信頼を得られるのかもしれないが、それは信者たちが財を投げ出した結果であり、出した人たちの生活はしだいに細っていくことになる。

この修羅場は、つい最近ならオウム真理教でも繰り返されていた。財産をまるごと教団に寄付してしまい、家族が食うにも困る状態となった。あるいは親がいくら説得しても家出し、子を返せといに行っても聞いてもらえない、とか。騙されているのだと周囲は訴えるが、教団も当の本人も耳を貸さない。『一遍聖絵』（岩波文庫）第四／

福岡の市の場面は、武士の留守中に一遍の説法を聞いた妻が、信心をいだいて出家してしまう。拐かされたと激怒した夫が、一遍に斬りかかろうとするところだ。

福岡の市にて、聖にたづねあひたてまつりぬ。大太刀わきにはさみて、聖のまへにちかづき侍りけるに、聖いまだ見給はざるものにむかひて、「汝は吉備津宮の神主の子息か」とたづねられるに、忽に瞋恚やみ害心うせて、身の毛もよだちたふとくおぼへけるほどに、即本鳥をきりて、聖を知識として出家をとげにけり。(三八頁)

とあり、自分が名乗る前に名を言い当てられたことで、かえって入信してしまう。夫の名は襲ってくるかもしれないとして入信時の妻から聞かされていたのかもしれないのに、それをいわば聖蹟と信じて入信・出家したので。夫婦の入信はそれとして、母・父とも出家されたら、その子たちはあとどう生きればよいのか。その親類縁者・家来など残された人たちからの、教団への批難・怨嗟の聲が聞こえてきそうだ。立場が異なれば、片方の誘いは悪魔の囁きである。

だが信者・宗教というものは、人側であり、みずから結婚を約束してそれによって相手の譲歩を得ている。結婚をちらつかせて、相手を操るのは、結婚詐欺でないのか。有り難い法話に無粋な申しようだが、蛇側に落ち度はない。殺されても仕方ないような要求などしていない。ほかの提案で応じたかもしれないのに、結婚という甘い罠にはまって、結局死に至らしめられたのである。

「七日を経て来」というのは、じつは「永遠と思えるほど長い時間の例えで、事実上の不履行宣言」ともいえる(拙稿「古代における七日と八日」「歴史研究」六一二号)。人間界では七日七夜、神の世界では八日八夜が、遠大な時間を意味する。「おととい、来やがれ」は「来るな」という意味であり、それと同じような逆の意味だったともいえる。しかしそれは人間界の慣用語で、蛇には通じない。

もちろん私たちにとって、蛇との結婚などありえない。異類婚が成り立つはずもない。それを実現しようとする蛇に無理があり、押し通そうとした蛇は破滅してよいとの判断もあろうか。しかし繰り返すが、この話の経緯で、蛇にはな

うしたものだ。信じない人からみれば、まことに愚かしく見える。都て益す所無くして、損り費ゆること極めて甚し。

と認識する中央政府は、これを禁庄・討滅すべく使者を送った。その使者は、秦河勝であった。

葛野の秦造河勝、民の惑はざるるを悪みて、大生部多を打つ。其の巫覡等、恐りて勧め祭るところを休む。時の人、便ち歌を作りて曰はく、大秦は 神とも神と聞こえる常世の神を打ち懲ますも

といい、討ち果たしてしまった。ただ河勝としては、宗教の弾圧をしたつもりなどなかったろう。河勝が討伐責任者に指名されたのは、秦氏の所管製品に絹織物があり、その独占生産体制を阻害するから。政府の宗教政策に抵触したとか団結力や影響力を恐れたとかでもなく、人民の生活を破綻から救おうとかの話でもあるまい。

四、命の保護が結婚詐欺か

『日本霊異記』中巻第十二の話は「蟹と蛙との命を贖ひて放生し、現報に蟹に助けられし縁」である。要約すると、聖武天皇の時代(じ

んの落ち度も瑕疵もない。

もともと、蛇が人と婚姻しようとは分を弁えない望みなのだというような常識が、当時いやこの説話集のなかに認められるだろうか。

『日本霊異記』中巻第四十一には、河内国更荒里で桑の木に登っていた娘が蛇とともに落ち、蛇は娘に巻き付いて婚してしまった。その蛇は殺され、蛇の子たちも掻き出された。それから三年して娘は

死んだが、蛇への恋情が深く染みついていて「我死にて復の世に必ず復相はむ」と言い遺した。そして編者(僧景戒)も「其の神識は、業の因縁に従ふ。或いは蛇馬牛犬鳥等に生まれ、或いは畜生とも為る」とし、蛇の姿も靈魂の生まれ変わりの一つと認識している。蛇だけを、結婚相手から排斥するいわれなどない。それに、そもそも排斥されるとわかつていたのに相手に結婚を提案して相手を破滅させたのなら、娘の方こそ報いを受けべきではないか。

べつに娘に辛く当たるともりはないが、結婚をちらつかせて自分の要求を実現させ、さあいざ結婚しようとその家に赴いたら、翌朝バラバラ遺体で発見された。これって短

つは孝謙朝)の山背国紀伊郡の女人が、牛飼いの子供が焼いて食べようとしていた八匹ほどの蟹を、着物と交換して逃がしてやった。べつ物の日には、大蛇が蛙を呑み込もうとするのを見た。女人は供え物と引き換えに解き放つてくれと頼んだが、承知しない。神として祀ると提案したが、なお呑み続ける。そこで「此の蛙に替へて、吾を妻と為む。故に乞我に免せ」というと、大蛇はこれを聞き入れ、頭を高くもたげながら女の顔を凝視して、蛙を吐き出した。女人は大蛇に「今日より七日経て来」と約束した。ところが親は「能はぬ語を作せる」と憂え、ともに行基に相談を持ちかけた。行基は「唯能く三宝を信ずらくのみ」といい、ともかく約束の日の夜、家屋を閉鎖し、沐浴などして身を清めひたすら祈禱した。大蛇は家につわりつき、尾で壁を叩き、屋根の萱を引き抜いて穴を開け、女人の前に落ちる音がした。翌朝見ると、八匹の大きな蟹によって、蛇はズタズタに切り裂かれていた。つまり買いつけて放してやった蟹が恩に報いたのだ、という話である。

『日本霊異記』中巻第八にも「蟹

絡すれば、どうみても典型的な結婚詐欺(及び殺人?)の筋書きだろう。もつとも筆者の叔母は、婆を殺してその夫(爺)に婆汁を食わせた罪作りな狸が泥舟とともに沈むという「カチカチ山の狸」の話の子どものころに聞いて、「溺れる狸がかわいそう」と涙したという。話は聞きようなのだろうか。

と蛙との命を贖ひて放生し、現報を得し縁」があり、置染鯛女は尼法蓮の娘で、行基に菜を届けつつ摘みのきなか、蛙を呑み込もうとされている大蛇を見つける。そして「我、汝の妻と作らむ。故に幸に吾に免せ」と提案し、大蛇は頭を高くもたげて鯛女の顔を凝視し、やがて蛙を吐き出した。鯛女は「今日より七日を経て来」と約束した。その約束の日に「屋を閉ぢ穴を塞ぎ、身を固めて内に居るに、誠に期りしが如くに来り、尾を以て壁を拍く」ので、翌朝行基に相談したが、「汝は免るること得じ」といわれる。その帰り道に蟹を持った老人に会い、その蟹を着物と引き換えに助けた。そしてその夜、家に侵入した大蛇をその蟹が切り裂いて助けた、という。

ともに良い話と感心してもよいのだが、ちょっと違和感がある。

右の話のなかで、大蛇は女人を襲う悪者となっていて、あたかも殺されて当然な要求をしたかのようだ。しかし本文を読めば、そうは書かれてない。「私があなたの妻になりましよう。七日後に来て下さい」と提案したのはいずれも女



エッセイ

古歌を訪ねて・その十四

いぎ言問はむ

業平東下り

丹下 重明

名にしおはば

いぎ言問はむ都鳥

わが思ふ人はありやなしやと

古今和歌集・羈旅歌(411)

在原業平朝臣

今年もまたコロナ禍に悩まされる年となっています。いつまで続くぬかるみぞ、といった感があります。

先日、テレビ画面に浅草界隈の風景が映っていました。賑やかだったかつての風景にはまだおよぼないものの、かなりの人出が見られるようになりました。吾妻橋の人通りも結構増えているようです。その吾妻橋から隅田川を500メートルほどの上流にあるのが、言問橋です。人よりも車の通りの激しい橋です。

「言問橋」―この橋は昭和3年の架橋なのですが、名前の由来は冒頭の和歌にあります。

作者の在原業平(825～880)は、知られるように親王を父に、内親王を母とする高貴な生まれの人です。正史「三大実録」の業平卒伝によれば「業平体貌閑麗……善ク倭歌ヲ作ル」とあり、美男で和歌の才にすぐれた人物であったことがわかります。後に六歌仙や三十六歌仙にも入った人です。

☆ ☆ ☆

その在原業平がモデルといわれている歌物語が「伊勢物語」ですが、中でも有名なのが9段の章の「東下り」です。「身をえうなきものに思ひなして」都を離れた業平と思しき「むかし男」が、東国に貴種流離の旅に赴くという物語です。

冒頭の歌は、おおよそ三つに分けられる9段の文章の最終部分にある一首で、中間には、三河国八橋(現在の愛知県知立市八橋町)で詠んだという「か・き・つ・ば・た」の5音を詠み込んだ折句でよく知られる

唐衣きつつなれにしつましあれば

はるばるきぬる旅をしぞ思ふ
古今和歌集・羈旅歌(410)
の歌があります。

業平一行が東国の何処まで行ったのかは判然としませんが、冒頭の歌から、物語を真実とすれば、現在もある隅田川に達していたことになりそうです。

☆ ☆ ☆

ところで「古今和歌集(905年撰進・以下古今集)」にある冒頭の歌には、次のような長文の詞書が添えられています。

『武蔵の国と下総の国との中にある、隅田川のほとりにいたりて、都のいとこいしうおぼえければ、しよし河のほとりにおりあて、思ひやれば、かぎりなく遠くもきにけるかなと思ひわびて、ながめるにわたしもり、「はや舟にのれ、日くれぬ」といひければ、舟にのりてわたらむとするに、みな人もわびしくて、京に思ふ人なくにしもあらず、さるおりに、白き鳥の、嘴と脚とあかき、川のほとりにあそびけり。京には見えぬ鳥なりければ、みな人みしらず、わたしもり「これはなにとりぞ」ととひければ、「これなむ宮ごとり」といひけるをきよてよめる』

とあって詠んだというのが冒頭の一首です。

歌の大意は「みやごとりなどという大層な名前の鳥ならば、是非聴いてみたいものだ。京の都にいる私の思ひ人が元気であるかどうかを」現代語に訳しては、味も素っ気もないものになってしまうのですが、この時代、京を遠く離れて、残してきた思い人を心から思いやる気持ちだが、この歌からしみじみと感じられるのです。

ちなみに、詞書に書かれている「宮ごとり」とは「ユリカモメ」のことだそうです。この当時、今日いう東京湾は、隅田川の現在の言問橋近くまで、深く入り込んでいたので、この少し上流付近で川を渡ったとすれば、カモメをみることは珍しくなかったようです。

☆ ☆ ☆

ここで古くから注目されているのは、この詞書が前記の伊勢物語九段の最終部分、名文といわれている通称「隅田の渡し」の文章にとっても似ていることです。

こちらは、文章の初めに、「なほゆきゆきて…」との言葉が入り、最終行の「ききてよめる。」の部分は、「…とよめりければ、舟こそ

りて泣きにけり。」となっています。そのほか、中間部分にもいくつかが若干の違いが見られます。

文章としては、総じて伊勢物語の方が文言数も多く、情緒表現にも優れているように思われます。その記述からは、遠い昔の隅田川の日暮れのわびしい風景が、しみじみと感じられます。旅する都人一同、遠く離れた京に思いをはせる様子が、詩情ゆたかに描かれていて、心を動かされます。

☆ ☆ ☆

古今集には合計30首の業平歌が取り上げられています。ちなみに、今日、業平作として確定されている歌は、この30首のほかに数首あるだけです。その古今集の業平歌はすべて伊勢物語に取り上げられています。特徴的なのは、そのほとんどに、詞書が添えられ、それも比較的長い詞書が多いことです。そのなかでもとび抜けて長い詞書のある一首が、冒頭歌なのです。

そこで古来議論されてきたのが、この詞書と、名文といわれている伊勢九段本文と、どちらが先の存在だったのかということ。そのことは同時に、古今集と伊勢物語の

出来上がりの後先にもつながってくることです。ただ結論は今日でもはっきりしていません。

その原因は、主として伊勢物語側にあります。ちなみにこの歌物語は、当時としては、「竹取物語」とともにひらがな文字によって書かれた文学作品の嚆矢といわれている作品です。

☆ ☆ ☆

その伊勢物語は、今日に至るもその作者は不詳、作成年代は十世紀前後といわれていますが、定かではありません。

そうしたなかで注目されるのは、この物語には「原伊勢物語」的な作品があり、その後、平安末期にかけて、複数の作者により、歌や文章が順次、追加増補されていったのではないかと、という説です。この説は今日、当該学会ではほぼ定説となっていますが、誰が、いつ、それを行ったのかはこれまた確かなことはわかっていません。

伊勢物語は歌物語とあって、和歌の総数は209首にのぼります。

(1255段ある初冠本による)。そのうち古今集歌は63首とりあげられています。内訳は、前記の業平歌30首のほか、詠者のほつき

りしている歌が10首、その他は詠み人知らずの歌ですがそのなかには、今もよく知られている歌もあります。(段数は伊勢物語)

行く水に数書くよりもはかなきは
思はぬ人を思ふなりけり

恋歌・一(522) 50段

五月まつ花橘の香をかげば

むかしの人の袖の香ぞする

夏歌(139) 60段

この2首はかつて筆者が「古歌を訪ねて」で、テーマとして取り上げたことのある歌でもあります。

ほかに後撰集からの業平歌3首、万葉集歌などからの採歌も若干あります。

そこから推測できるのは、業平歌を核として作られています。業平歌以外の歌も、いくつも存在していることから、この物語が、複数の作者の手によって出来上がっているということを示唆しているのです。

こうしたことから言えることは、この物語の主人公ともいえる「むかし男」たる業平と、その詠歌とが、当時の貴族社会の間で、とて

も人気が高かったことをものがたっていると考えられるのです。そうであればこそ、この男女の恋のみならず、広く人の情愛を描いているこの歌物語の人氣にあやかうと、複数の書き手による、歌や文章の追加増補といったことが行われたのです。

☆ ☆ ☆

その伊勢物語にも取り上げられている、古今集の業平歌をいくつか挙げてみます。(段数は伊勢物語)

世の中に絶えて桜のなかりせば

春の心はのどけからまし

春歌・上(53) 82段

ちはやぶる神代もきかず龍田川
からくれないに水くくるとは

秋歌・下(294) 106段

月やあらぬ春や昔の春ならぬ
わが身ひとつはもとの身にして

恋歌・五(747) 4段

これらの歌は、前記の伊勢9段の2首とともに、業平歌を代表する作品です。二首目の歌は、小倉百人一首にも取り上げられていて、よく知られています。

☆ ☆ ☆

平成16年5月発行の本誌54号に、『伊勢物語・9段』業平の東下りより』と題した筆者の記事を載せて頂きました。本稿冒頭に掲げた「言問橋」についても、その中の『言問橋と隅田川』のくだりで触れています。

言問橋のある隅田川の右岸の墨田区。当時は下総国には、現在も業平に因む名称が散在します。吾妻橋を渡って浅草通りを押し上方向に進むと、右側に「業平1丁目」5丁目」の地名が見られます。その途中には「業平橋」があります。また近くの東武鉄道の駅名にも、今は「とうきょうスカイツリー駅」と名前が変わった「業平橋駅」がありました。

こうした在原業平に因んだ名称は、古くからこの地に、さまざまな業平伝説があり、それらは、冒頭の業平歌や、この歌を取り入れている伊勢物語・9段の「東下り」に由来しているのです。

☆ ☆ ☆

「ここ」で気になるのは、その「東下り」で隅田川を渡った場所は現在の隅田川のどの辺りだったのでしょうか。

平安時代中期に成立した「類聚三代格」の承和2年(835年)6月29日の項の付記一に「住田ノ渡」があり、そこに伝説として

『清和天皇ノ頃力在原業平東国ニ来リ住田ノ渡ヲ過グルト伝フ』

諸資料によると、前頁にも述べたように、当時の隅田川河口は、現在よりはるかに上流にあり、現在の言問橋付近まで海が湾入していたといわれます。従って業平たちが渡った「住田の渡」はさらに上流にあったと推定されます。

さらに注目したいのは、当時の東海道、いわゆる「古東海道」がどの辺りで隅田川を渡っていたかということです。1987年刊行の「江戸東京学辞典」によれば、現在の白髭橋附近に「橋場の渡」と呼ばれていた渡し場があった。平安時代は東海道の官宮の渡船場で、「隅田の渡」と呼ばれていたとあります。おそらくは、ここが前記の業平の渡った「住田の渡」だったと考えられます。

古東海道は、武蔵国と下総国とを分けていた当時の隅田川を超え東岸にわたると、現在の東武線「鐘ヶ淵駅」付近を通じて、同じく

現在の葛飾区立石から千葉県・国府台に達していました。

これらの資料を総合すると「隅田の渡」は、前記のように、現在の白髭橋と、さらに上流にある水神大橋との中間くらいにあったと推定されるのです。言問橋、業平橋ほか業平ゆかりの地名などの残っている辺りとはやや離れた場所だったのです。

☆ ☆ ☆

この原稿を書いていた最中の、6月6日付の朝日新聞夕刊に、東京スカイツリーと業平とのゆかりについての記事が載っていました。「まちの記憶」と題した記事で、今回は「東京スカイツリーかいらい」――橋と地名に平安の色男の残り香」とあり、この辺りに残る在原業平にかかわる伝承について解説されています。

その記事にも、業平たちが隅田川を渡ったところは、「業平」の名称がついている、前記の橋や地名、駅名のある現在の場所よりも上流だったとありました。

☆ ☆ ☆

言問橋が、冒頭の業平歌にちなんで名付けられたことは、今日、よく知られていることです。ただ

エッセイ

一九九〇年山寺にて

市川 康夫

科学研究費はとかく大学の教職者に振り分けるから、実地診療に明け暮れている医師のための研究費をという、メンタルヘルス岡本記念財団(岡本常男理事長)に応募して、啜うべきことだが小生が班長ということで、近隣の医師にも協力をいただいたことがある。

勤務先の国立横浜病院の看護研究会(会長A看護婦長)と勉強会を共催したときは、当時の一般の耳目を集めていた「エイズ」を取り上げ、講師にはそのテーマで有名であった都立駒込病院の医長をお招きして、盛会であった。

夫から感染した妻が、「お陰様で、わたしも移ったわよ」と夫に告げた、二人とも重症化していった、等を講演する医長の、のめり込むような診療の態度に圧倒された記憶は、今も鮮烈である。

その年の秋であったが、国立病院

療養所総合医学会という厚生省の学会が国立仙台病院で開催されて出かけた。分科会では取るにたぬ研究発表をし、義理で座長がする追加質問に小生が答える等を、やっつてやっつてると家の者も納得したようであった。

小生は真面目に、全国から集って来た精神科医らと懇親を深め合った。家の者は観光バスや遊覧船に乗って、松島などを見物したと、後から聞いた。

その翌日であったが、立石寺へ足を延ばした。そして山寺の頂上で国立国際医療センターのB看護部長から突然の尋問を受けた。国立横浜病院では小児科病棟の看護婦長であったが、その時は三副制とあって副看護部長を三人従える厚生省の看護職の天辺に登り詰めてたいへんな貴族であった。「この人は何ですか」と。

二人の取り巻きが付き従っていたが、その中の国立栃木療養所のC総看護婦長が即座に、「奥様です」と代返してくれた。Bさんは管理職が長く、看護婦らの男問題のご苦勞も多かったであろうと推察した。Cさんは国立横浜病院の附

属看護学校の専任教員や病棟婦長をしていたことがあり、資格を取ったばかりの、ほやほやの臨床検査技師の若い女を憶えてくれたのだ。

そもそも九十二歳にもなったのにAさんの名前を憶えているのは、彼女がお若くてたいへんお綺麗な品位をそなえた女性だったからであろう。学会の閉会の後、小生らは仙台駅から鳴子温泉へ、さらに立石寺へと考えて列車に乗ったが、途中の駅で下車した看護婦さんたちの中のAさんが小生にたいへん親し気につこりと手を振った。それは一大事であったのだ。

その晩に鳴子温泉の宿に大雨が降ることになったのである。夕食時の僅かなアルコールで家の者が感情失禁に至り、しかもそれは夫に手を振った若い女性が綺麗な人であったからだ、正直に告白された、小生はいささか持て余したものであった。

その後三十年も経った今では、自分が到底及ばない気品のある若い女を思い、感情が溢れて知ったのだと、家の者も当時のことを客観

命名についての経緯については諸説あるようですが、明確ではありません。

ただ言えることは、遠い平安の昔の、そして今日でも、その名を知られる抒情詩人、在原業平の名歌に心を動かされた、地元の人々の強い思いが、きつと、「言問橋」の名前の決め手となったのでは、と思うのです。

名にしおはばいざ言問はむ都鳥
わが思ふ人はありやしやと

そんないにしえの歌などお構いなしに、橋の上は、今日も、634メートルの巨大な鉄塔を写す人たちが行き交い、大都会の喧騒を運ぶ車が連なる、現代を象徴する風景が展開されているのです。



おわり

視することが出来るようになった。歳月が過ぎ去ること、人間が成長し続けること、等々と考えさせられることはあるが、あらためて女の人生、女の生き方ということを考えるとき、男が気付かない機微に、溜息をつかざるを得ない。

話は元に戻るが、時代の推移だけとは言えぬほど、エイズについての受け止め方も変った。これはイノベーションによるところが大きいであろう。新しく出現した敵に向って、竹槍で立ち向うだけの時代ではなくなった。しかしなお旧時代からの生き残りのような勢力も我々の中に混在し、良い意味では多様性と呼ばれ、あるいは単なる時代遅れと言わざるを得ないものもある。

現在はコロナ禍と呼ばれ、そのウイルスの起源に関しても様々なことが言われている。この感染症の推移はこれからどうなるのであるか。かつて治療法のない疾患と一般に恐れられたエイズが、今では・・・期待している。

東戸塚駅40年 色葉匂へど その7 (ゲンさんの歴史幻想)

宮下 元

東戸塚駅が出来て40年経った。
JR東日本(国鉄)の横須賀線
で新駅が開業したのが1980年
(昭和55年)10月1日だ。
我がマンションも駅から少し離れた
場所(徒歩8分)築38年経った。
中古で購入したもので20年
経った。昨年は大規模給水管工
を行い、1月に我が家の洗面所蛇
口が詰まり交換工事を行った。
40年という歳月は、老朽劣化
が始まり大規模メンテナンスが必
要になる年月なのかもしれない。

◆山野からマンション街へ
開業前に、父が退職前に近くの
平戸町分譲地を購入し家を建てて
50年も経つ。当時、新入社員
の私は、隣の保土ヶ谷駅まで渋滞な
ので60分もかけて、バスで通った

◆男のマスタープランと執念 *1
驚くのは、一人の民間の男がマ
スタープランを立て、開業後30年
も掛けてプランを実現したその執
念である。私は敬意を込めて福原
翁と呼びたい。呼ばれている。

岡山出身の新橋の事業家(福原
政二郎)が駅の土地を無償提供
し、国鉄(現JR)の駅を誘致し
たおかげだ。彼の新一不動産とは、
東京新橋で一番のビル業にする
の意。

新事業の展開計画で、東海道線・
横須賀線の保土ヶ谷・戸塚間が8
kmもありながら、品濃周辺が山野
のままだったの目をつけた。
そこは何度も新駅招致に失敗し
ていた場所である。例えば大正
12年に「武蔵駅」設置が決まっ
たが、関東大震災で頓挫したとい
う。

翁は地元民を説得し、地区ごと
に区画組合をまとめ、土地を集
め、国鉄と横浜市と調整し、執念
で開設にこぎつけた。条件は新駅
の全額地元負担だった。開発費約
30億円の内、横浜市負担5億で、
福原翁が25億円無償提供した。
翁の基本プランは、人にやさしい
街づくりである。だから、坂の街

ものだ。
それが今や、東京・千葉・成田
だけでなく、湘南新宿ラインで新
宿・池袋・宇都宮まで一本で乗り
換えなしで行けてしまう。

道も横浜環状2号線ができて、
横浜新道(国道1号線バイパスII
ワンマン道路)、横浜横須賀道路(国
道16号保土ヶ谷バイパス)を使え
ば車移動も楽だ。

開業前の駅付近は、山林・雑木
林の科野(傾斜地)だった。開業
当時、駅前には何もなかった。パ
チンコ店が目立っていたが、高層マ
ンションやデパート予定地の空き地
だらけだった。

当初描いたニューシティ構想が完
了するのに開業後、実に30年も
かかっている。

40年経った今や、高層ビル
やマンションだらけのコンクリー
ト街だ。便利で小綺麗で人気の
ニューシティになった。1日の平
均乗降客数は当初の1.8万人
から11万8658人に増えた
(2019年)。なんと変化が激し
いのだろうか。

植音は今も続いており、最近
は高齢者施設が多くなった。時代
の流れでもある。

なのに高架通路が多く、駅前
は便利だ。

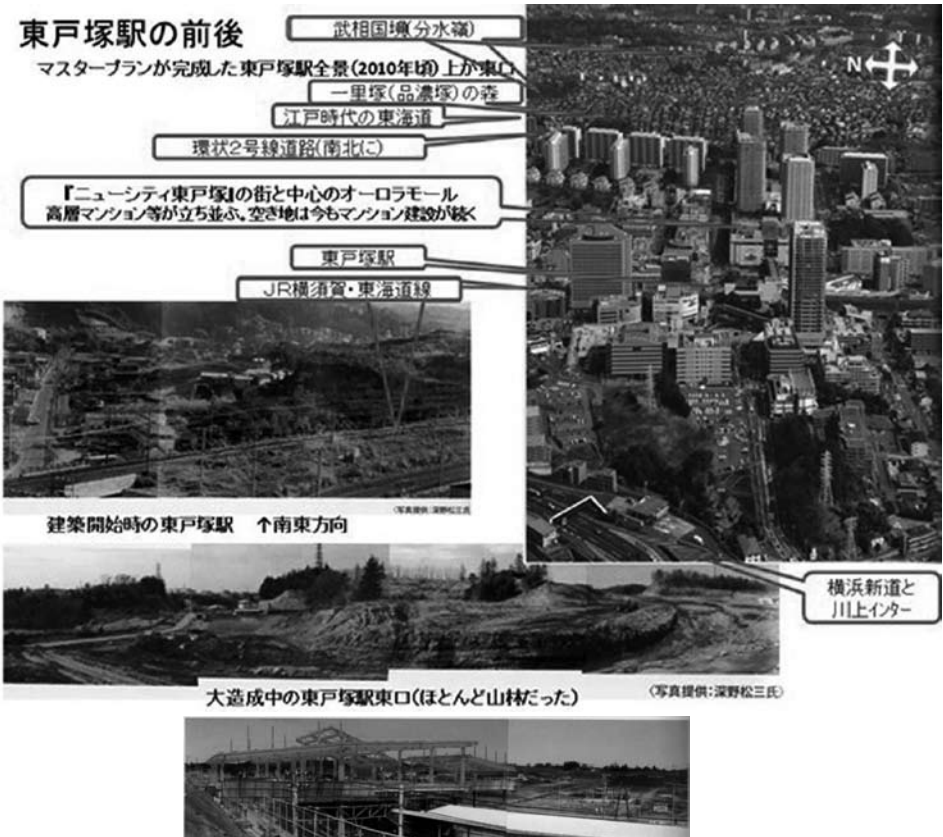
なお、駅名でももめた。品濃、
川上など地名が上がったが、結局
無難な東戸塚となったようだ。単
に戸塚区の東部という名前だ。

なお、戸塚の由来は富塚(トミ
ヅカ、『富』の字も使う)からで、
富塚八幡宮は富属彦命の古墳の上
に建てられた。富属彦命は相模国
造弟武彦の二世の孫で、境内山頂
の古墳がその墓と伝え、これを富
塚と称し、やがて「トツカ」とな
った。

◆相模と武蔵の国境は分水嶺

東戸塚は武蔵と相模の国境に
ある。近くに境木地蔵尊がある。
旧東海道で峠の茶屋。一服休憩の
旅人に焼餅を提供。坂を焼餅坂と
いう。

保土ヶ谷宿と戸塚宿の丁度中間
点で、品濃塚がある。江戸時代の
一里塚で両側に今も残っているのは
たった数か所だ。大変貴重な塚で
ある。江戸時代の街道の雰囲気
の名残があるので、そのまま保存
して欲しい。昨年、残念なことに木
が大きくなりすぎて切られてしま
い、一部無残な姿になっている。



(32)



国境いは高台で分水嶺だ。北東
側は東京湾に、南西側は相模湾に
注ぐ。箱根駅伝の難所の権太坂(狩
場)も国境いである。品濃塚近辺
の旧東海道からの富士山の眺めが
素晴らしい。品濃富士と呼ばれる。
丁度丹沢山塊の端に富士がすそ野
まで見える(写真参照)。
国境は、港南区以外はほぼ区境

である。瀬谷区・泉区・戸塚区・
栄区が相模国。港南区は縦に2分
割される。なお、北の方の国境は
境川になる。

◆ムザ国は渡来民移住地

横浜市の北東半分が武蔵なのだ。
武蔵国久良岐郡(クラキコオリ)
と都筑郡(ツヅキコオリ)という。
南西半分を相模国鎌倉郡(カマク
ラコオリ)。市の南隣が三浦郡。
相模とは、草木の茂った荒れ山
野の意と思う。*2

武蔵をムザンと呼ぶのは無理があ
る。当字だ。当初は無邪志国(ム
ザン)と表記。邪心の無い志の民
の意か。国名命名権は朝廷にある。
漢字2字で佳い名に変えるよう勅
命がでた。

武蔵・相模は兄弟国である。相
武(サガム)とも呼ぶ。元は『ム
ザ(ムサ)』国だったのではないか?
ムザ上国がムを省略してサガミ(相
模)。ムザ下国がモを省略してムサ
シになった。読みにくいザをサに変
えて…。(国名の由来には諸説あ
り確定してない)

武蔵と相模にはなぜか『タマ』と
『クラ』の付く名前が多い。多摩、
埼玉(サキタマ)、見玉、鎌倉、久

良岐、新座（ニイクラレンシンザ）。
縄文&弥生初期からの古来の原
住民をタマ（魂Ⅱ玉）と称した。
渡来人や朝廷官吏の新たな人を
アラタマ（荒魂・新玉）と称した。
大和朝廷への税（米他）の保存
倉『屯倉』（ミヤケ）や武器庫が
重要施設だった。伝説のヤマトタケ
ル（大和武尊）の東方征伐の記念
として『武』の字を使った。

相模・武蔵は多摩川辺・利根川
辺を除くと、丘陵・雑木林・荒野
である。だから、大和政権は新た
に逃げてきた韓半島などからの渡
来民に関東の土地を与えた。新座・
狛江・高座（タカクラ・コウザ）郡・
高麗神社（コマ。高句麗王若光）・
秦野（秦氏）などなど。

古来地元民も新規渡来民も、邪
心の無い素直に朝廷に従う良い民
と思われていたのではないかと。

◆一宮は諸国の地元神か

ところで、武蔵の一宮は現在大
宮の水川神社である（小野神社説
もある）。主祀神はスサノオ命であ
る。出雲大社斐伊川（ヒイ）から
来ている。時代が経ると、多摩府
中市の大國魂神社が総社として代
わられていく。

相模の一宮は相模川縁の寒川神
社（サムカワ）である。主祀神は
寒川大明神（夫妻）で正体は不明
瞭だ。サムカワという名の川は存
在しない。私は寒河（サガ）神社
と思う。サガミの魂の神様だ。
水川と寒川とよく似ている。『氷』
『寒』という漢字は大和朝廷からみ
たら卑語だろう。渡来人か弥生以
来の土着民かはわからないのだが、
地元系の神様だと思う。

◆義時も領有した肥沃な山ノ内荘
戸塚は鎌倉郡山ノ内郷である。
北鎌倉や大船だけでなく、栄区や
戸塚区を含めた柏尾川流域一帯を
山ノ内荘園と称す。境川に合流し
藤沢の江の島に流れる。

1180年10月に源頼朝が鎌倉
入りする前は、山内首藤経俊の所
領だった。経俊は平家方で没収さ
れ、土肥実平へ。土肥家は和田合
戦で負け没収されて北条義時へ。

鎌倉・室町時代は鎌倉の北に位
置し、北や江戸に抜ける重要拠点
であり肥沃であった。だから、義
時も山ノ内荘を領有した。以後、
山ノ内荘は北条得宗家の所領とし
て管理された。のち関東管領の上
杉氏も北鎌倉に居を構え山内上杉

と称される。
◆東海道の変移
東海道古道を歩いてみると結構
くねっているし、坂も多い。また、
ルートを何度も変更したとのこと。

東海道とは本来は正に海運用の
海の道だった。沿岸航路である。
だから、相模国の次は房総半島
先端の安房（あわ）、上総（かずさ）、
下総国（しもつぎ）の順。ちなみ
に『フサ』とは半島の垂れ下がった
形であり、麻布など産物を指す。
次に沿岸に街道ができた。

竹内秀一氏によれば、奈良時代
に幅10mもの立派な官制街道を
国中に作ったという。国府や郡衙
を結び極力直つすの最短経路な
ので、大工事だったろう！
茅ヶ崎の中原から江戸に抜ける
真つすぐな街道だ。今の中原街道
に当たり、山ノ内荘の北端を通る。

しかし、官制街道はメンテナンスが
行き届かず、やがて農地に奪われ
細い道になった。
なお、現代日本が新たに築いたの
がほぼ同じルートの国道246号
と東名高速道である。

◆家康が戸塚ルートを突貫工事
平安時代は、藤沢から大船・上

大岡に抜け、蒔田（まいた）・保土
ヶ谷に戻るルートだった。
鎌倉時代は、鎌倉から八方に抜
ける騎馬道を築いた。鎌倉街道だ。
何本もある。

そして、今の東海道の戸塚ルート
を築いたのが徳川家康という。
藤沢・戸塚・境木地蔵・保土ヶ
谷ルートだ。1591年に汲沢村
の森義秀に道普請を命じた。突貫
工事だったという。少しでも関西
に早い道をとということで、関ヶ原合
戦前の軍用として大軍を通す為だ。

家康は道を重要視していたのだ。
柏尾川などは氾濫多く、すぐ通
れなくなる。それで、江戸時代も
川沿いの氾濫防止工事をして尾根
沿いの道を減らしていった。

◆戸塚宿を新設して栄える

戸塚が栄えたのは、1604年に
戸塚宿が出来たからだ。当初は藤
沢宿・保土ヶ谷宿間約20kmに
宿場はなかった。藤沢宿が大反対
したという。戸塚村が幕府に懇願
して戸塚宿ができた。江戸を朝七
つ立ち（夜明け前4時前後）して、
最初に泊まるのが保土ヶ谷宿か戸
塚宿だ。
保土ヶ谷は必死に旅人を泊めよう

と引き留めたので保土ヶ谷（程ヶ谷）
宿の『留女』（とめおんな）という。

戸塚宿は川沿いの狭い谷なのに、
栄えたので周りの急坂の丘に住居
を切り開いた。そのため、道が狭
くくねって、登り下りが激しく、
行き止まりが多く、家も隣りあわ
せだ。

私は剪定・草取りで巡っているが、
運転するのにもとても疲れる。地図
ナビが頼りでもある。

戸塚駅前には西口再開発でやっと
整備された。タバコ禁煙条例でポ
イ捨ても減り、よい街に変わりつつ
ある。

ただ、残っている山林や丘や窪地
は次々に開発されていくので、も
う開発を止めて欲しい。緑や自然
は残して欲しい。わがままだろう
か？

幸い、東戸塚近くには鳥獣保護
区や市街化調整区域があるので、
むやみな開発が避けられている。

多分、終の棲家となるつもりなの
で、ゴミ処分も含め、自然との調
和のとれたのかな街になるよう
に願っている。

◆変わるものと変わらないもの

昔は人生4〜50年。今は80

年だろうか。歴史からみたら40
年なんて一瞬である。それでも一
つの人生分であり、これだけ変化
変貌するのだ。
ただ、変化しないものもある。そ
れが人間の心であり、争い合う心
だ（領土・民族や国家間など）。
現代のウクライナ侵略は、古代
中国の春秋戦国時代や日本近世室
町・戦国時代とよく似ている。
歴史から、変わるものと変わらな
いものを見極めて学んでいきたい。
そして、この歴史研究会の講演で
様々な人生模様を聴かせてもらい
たいと思っている。（以上）

*1、福原政二郎（ふくはらせい
じろう）：80万坪の街を作る。
25億円提供。岡山県出身。心境
は「照一隅」。元内務官僚、弁護士。
不動産業。1997年没（93歳）
*2、『相』：盛んに生い茂った木
の姿を見ること。『模』：草木が
広々と荒大な様。

《引用・参考文献》『民間活力で生
まれた街 東戸塚。東戸塚Ⅱ福原
政二郎の軌跡』：新一開発興業株
式会社街づくり編集室編集発行。
2010/4/19

『放浪 神奈川』HP



旧東海道戸塚区ガイド
出典：広報よこはま戸塚版

武相国境線
出典：『放浪 神奈川』

特集 これが横歴会員の実際

創立40周年を機に実施した会員のアンケート調査をまとめました。調査は未来の仲間にも2022年の我々の実像を知ってもらいたいとの思いから実施しました。会員の出自や歴史観、会に対する思いなどが綴られています。

横歴40周年記念広報部会

1. 年齢構成 (92/142)

極めて高齢。活動の原動力が60〜70歳であることから、知力・体力を備えたシニアが求められる。最年少は小6男子。

◆60歳台 15%

◆70歳台 54%

◆80歳台 23%



2. 会員歴 (92/142)

創立時からの会員はわずか。会員の約半数は5〜10年で入れ替わる。

在籍年数	人数
5年未満	29人
10年未満	15人
15年未満	19人
20年未満	8人
30年未満	3人
30年以上	4人

3. 男女構成 (R4・8月現在)

男性112名 78%、女性31名 22%

4. 会員在住地 (R4・8月現在)

会員の多くは横浜市在住で全体の7割を占める。その内、青葉区が最多の12名。神奈川県内が2割、他県からは、東京5名、埼玉2名、千葉・茨城から1名となっている。



北部最大派閥が青葉区なら、南部は戸塚区。



注：住まいと会の活動は何の関係もありません。

5. 会員出身地 (92/142)

都市では東京都13名が1位。横浜市9名が次に多いが、神奈川県以外の括りでは19名になる。地方別では、静岡、長野、大阪、福岡が目立つくらいでほぼ全国に分かれている。40年後は外国も加わるかもしれない。



東国の優勢

地名上の○数字は人数

6. 入会の動機 (92/142)

*会員の紹介 59

*ホームページを見て 14

*その他

・県・市の公報・新聞・パンフ 9

・20周年記念講演会を聞いて 1

・知人に勧められて 4

・歴史散歩に参加して 1

歴史に親しむように
なったきっかけ、
関わり、楽しみ、喜び

歴史小説が好き 1人

・登場する人物の動き、その時の歴史背景等、虚実含めて調べるようになった

・司馬遼太郎の『街道を行く』を読み、関連する歴史を勉強したくなった

・司馬遼太郎の作品を読み始めてから(2)

NHKの大河ドラマ 4人

時代劇映画が好き 4人

時代検証番組 1人

古典文学 1人

子供の頃の影響・環境

・小学生のころから百科事典をボロボロになるまで読んでいた

・高校の担任が歴史を専攻していた

・出生地で縄文土器が出土しており小学2年の時に興味を持ち、それ以来。恩師は峰山巖氏(故人)北海道文化財研究所所長、縄文晩期遺跡の発掘調査

・子供のころに父に買ってもらった『三国志』が面白くて日本の古い時代に関心を持つようになった

・幼児期に民話・絵本をみて、また、皇居前を通ったことがあり、古い建物に興味を持つ

・生まれ育った家が旧東海道沿いにあつたことで歴史を身近に感じた

・小学3〜4年の頃は「物語」「偉

人伝」としての歴史が好きであり、小6の敗戦後は激変した「国家」「政治体制」に興味を持つようになった

・幼少の頃からの時代劇ファンが大人になって武士の時代の歴史に興味を持つようになった

・高校時代、日本史が得意科目で大学も文学部で日本史を専攻した。社会人になってからもずっと関心を持ち続けていた

・学生時代より日本史が好きで得意だった。特に戦国時代

・小学校高学年の時初めて「歴史クラブ」を発足させた。それ以降この世界に浸っている

・高校生の時に読んだ宮崎康平著『まぼろしの邪馬台国』(1967年出版)



・母が近くに歴史の本を置いてくれたことから興味を持ち、城など見に行くようになった

・兄と弟が大学の史学科で父親は時代小説作家。自身は落語の演

者として必然的に関心を持つ

・中学時代の社会科担任教師からの影響。大学で歴史を専攻したかったが父から歴史では飯が食えないと諭され断念、娘に夢を託し史学科専攻学芸員になりました

・父親から歴史の面白さを学ぶ

・小学校担任教師の社会科の授業

・自分の誕生した土地がフォッサマグナや中央構造線といった地質学的に、また神話時代はともかく悠久の歴史に数々の登場を見せていることに深い興味を覚えた

時間に余裕ができた学が楽しみ

・定年後の自分探しのため放送大学に3年ほど在籍、その中で最後まで日本の歴史に興味を持ったことがきっかけ

・学問が不得手な私が楽しく学べると思った

・鶴見大学(中世・鎌倉)講座参加

・時間に余裕ができ、振り返り記憶をたどると食い違いが多かった。整理し正しく理解するために：がきっかけ

・先祖のことを何かと知りたいと

○数字＝順位 票数

石器 縄文 弥生時代	18
③古墳時代	28
①飛鳥時代	33
②奈良時代	29
平安時代	14
③鎌倉時代	28
室町時代	12
南北朝時代	5
戦国時代	10
安土桃山時代	18
②江戸時代	29
⑤幕末時代	27
⑥明治時代以降	23
戦後	5
世界史	14
その他	12

**あなたが
魅かれる時代**
(複数回答可)

思うようになった





- ・自分のルーツを調べたことが契機
- ・中国の南京に駐在したこと。中国の歴史の深さを感じ各地を訪れ歴史を調べることに喜びを感じるようになった
- ・30年以上前、週刊百科『日本の歴史』を買って求めたあたりから
- ・もともと歴史は好きであったが退職後、暇にかまけて購入した『大系日本の歴史』を読み、一層面白く好きになった
- ・日本の国宝(2000年1月指定505件) 各種国宝・重要文化財の鑑賞、パソコンで写真文章をまとめ、ファイリング
- ・奈良大通信教育部文化財歴史学科に入り歴史の面白さに目覚めた。様々な人間ドラマがおもしろい
- ・定年退職した頃、新聞に卑弥呼の三角縁神獣鏡が話題になり興味をわき横歴を知り入会した
- ・新しくも(幕末から現在) 古い歴史(磯子平子庄、金沢北条氏、三殿台遺跡、野島貝塚他)のあ
- る「横浜」をもっと知りたいと思った
- ・学生時代に習った歴史というのが戦後ガラリと変わったの

**あなたが魅かれる
歴史上の人物**
(複数回答可)

で色々知りたいと思った。皆さんの知識で知ることの喜びを頂いた

- ・史跡や文化財を見学する機会に恵まれ、その背景や時代を知りたくなった
- ・知人(郷土史研究家)が歴史への奥深さを高い見識で語ってくれたこと
- ・定年後まったくのゼロのスタートで最初の一年はNHK・Eテレの高校日本史講座で学んだ
- ・学生時代から興味はあったが退職後に時間的余裕ができてから親しむようになった
- ・定年後、慶応大学通信課程文学部二類で歴史を学び、歴史により一層興味を持った
- ・三味線を教えるようになり、お弟子さんたちに古典歌詞を解説するようになってから
- ・古事記、日本書紀の比較から始まり、三国志に行きついた
- ・歴史は謎だらけで想像するだけでも面白い
- ・仏像を拝観しその創られた時代背景を知りたくなったから
- ・横歴に入会し、会員の研究発表を聴講したことが端緒。全てが新鮮で今少し本を読んでいます

<p>1位 織田信長 7票</p>  <ul style="list-style-type: none"> ・現代の日本人にない革新、斬新な発想と行動力 ・時代を開いた 	<p>2位 徳川家康 6票</p>  <ul style="list-style-type: none"> ・戦の無い世を築いた ・多くのプレーンをもち得た 	<p>3位 卑弥呼 3票</p>  <ul style="list-style-type: none"> ・古代史最大の謎 ・わからないことが多い
--	--	---

<p>3位 西郷隆盛 3票</p>  <ul style="list-style-type: none"> ・江戸城無血開城 ・国難を乗り越える姿 	<p>3位 坂本龍馬 3票</p>  <ul style="list-style-type: none"> ・船中八策と大政奉還 ・ダイナミックな動きと国家観 	<p>3位 山岡鉄舟 3票</p>  <ul style="list-style-type: none"> ・金も名誉も命もいらぬ人柄 ・江戸城無血開城真の立役者 	<p>3位 明智光秀 3票</p>  <ul style="list-style-type: none"> ・郷里の丹波に縁がある人物 ・『本能寺の変 431年の真実』を読んで 	<p>その他 2</p> <p>聖武天皇／聖德太子／天武天皇 真田幸村／小栗上野介／ 武田信玄／立花宗茂／徳川慶喜</p>
---	---	---	--	--

石垣に感心したことからお城が好きになり歴史が好きになった。当時は空想するのが好き。

- ・日本史が好きだったので入会
- ・50代会社の仲間誘われ、神社仏閣巡りをしていこううちに自然と興味を持つようになった
- ・子供の小学校の校長先生の歴史散歩の会に入り、校長も会員もユニークな方ばかりで30年近く楽しんだ
- ・知人に歴史を勧められた。楽しみは歴史に触れながら散策をすること
- ・出張やぶら旅などで訪れた名所(神社・寺院・城)でその歴史に興味を湧き、楽しくなった
- ・日本人の由来が知りたい。中国4千年は分かるのに...
- ・奈良明日香村を訪ねたことが歴史の世界に踏み込みきっかけに入会前に家内と鎌倉の寺院をほ



<p>1位 城郭 27</p> 	<p>2位 神社仏閣 25</p> 	<p>3位 仏像 21</p> 	<p>4位 遺跡 12</p> 	<p>5位 政治 10</p> 	<p>5位 生活 10</p> 	<p>7位 文化 6</p> 	<p>7位 美術 6</p> 	<p>7位 伝説芸能 6</p> 
--	--	--	--	--	--	---	---	---

**あなたが
魅かれる対象**
(複数回答可)

ぼ巡り、鎌倉時代それにつなが

- る室町時代に興味を持った
- ・町内会で地元の郷土史勉強会に入会し、地域の遺跡を調べてから
- ・出雲を旅行し古代日本に興味を持ち、古事記を読んだ
- ・地元の神社仏閣の歴史を調べていきたい
- ・20代より旅が好きで、その地域の風景と街の人々の話を聞くことが楽しく、その土地の歴史を調べていた
- ・知らなかった歴史上の人物や建築等の話が歴史ツアーや散歩等でも教えて頂き興味が沸きました
- ・子供の高校受験の日本史の問題を見て難しさにビクビク。せめて高校レベルにと勉強しているうち歴史小説や大河ドラマにハマりすっかり趣味になった
- ・事象・人物・建築・文化など幅広く楽しみが増え、興味を同じくする友人ができた喜びがある
- ・古代に生きた一人の皇女の生涯を追い求めたいと思ったこと
- ・喜びは今まで不明だったことが自分なりにつかめたとき

横歴に対する期待 活動に対するスタンス

有効票数85

- ◆ 常に新しきを探る活動の基本 87%
- ◆ 例会での聴講 74%
- ◆ 講演会の聴講 72%
- ◆ 春・秋2回史跡めぐり 59%
- ◆ 歴史散歩に参加 50%
- ◆ 老いて語りうう学友 56%
- ◆ 仲間づくり・懇親歴研鑑賞 48%
- ◆ 40年の貴重な記録 49%
- ◆ 会報の購読 42%
- ◆ 歴史ツアーに参加 33%
- ◆ 市民と共に楽しむイベント 33%
- ◆ 伝統芸能会の鑑賞 28%
- ◆ 発表回数 トータル千回超え 29%
- ◆ 例会での発表 25%
- ◆ 会報への発表 22%
- ◆ ホームページの閲覧 15%
- ◆ ホームページの投稿 2%

会への要望・思い



- ・ 会員の才能を生かして活動の枠を広げたい
- ・ 会員の中から同好の研究グループ等ができるとう嬉しい(グループでの研究発表とか)若い人や女性会員が増えてほしいのでそうした企画ができれば嬉しい
- ・ 大きな会になりました。今のまま暖か味のある交流、続けて頂きたい
- ・ 歴史研究会・研究の名称に相応しく会員による侃侃諤々の場
- ・ 在野で日本一の歴史研究会を目指すこと
- ・ 歴史という共通の趣味を介して仲間づくりができるようにしたい
- ・ あくまでも趣味の会であること認識し楽しい会が続きますように願っている
- ・ 会員の皆様の意識が高く素晴らしい活動をされていると思う
- ・ 本当にすごいサークルだと思えます。皆さんの研究発表が素晴らしいすぎる。これからもずっと続いてほしいです。
- ・ 会の皆様がフレンドリーに接して下さり、楽しく学ばせて頂きましたことにより感謝申し上げます
- ・ 毎回の会員発表が素晴らしく大変勉強になります。これからも楽しみにしています
- ・ 会の活動が様々な情報源になる例会での講座と皆様との会話が楽しみ
- ・ 横浜歴研が永久に発展していくことを心から祈ります
- ・ 願いはこれからも会が存続し続けること
- ・ 会の運営に携わる役員の皆様に感謝しております
- ・ 現況で十分です。役員の方々に感謝です
- ・ いつもありがとうございます
- ・ 今のままで十分満足、体の続く限り聴講したい
- ・ 内容がアカデミックになり堅苦しいムード、もっと楽しく。
- ・ 充実した組織だと思うので今後も続けて頂きたい
- ・ 今のまま自由にそして明るく
- ・ 会員さんが満足する会の運営といつまでも継続され発展することを願っている
- ・ これからも永く、続いてもらいたい、これからも研究発表を

- ・ 聞かせて下さい
- ・ おおらかで楽しい会でありますように
- ・ 横歴は自由闊達で自分にとっては非常に居心地の良いサークルです
- ・ 早くコロナが収束し、以前の賑やかさを取り戻せることを願っている
- ・ コロナ禍で会員数の減少及び会員相互のコミュニケーション不足が懸念
- ・ コロナの世の中が治まって一日も早くみなさんと一緒に過ごせる時間が来ますことを祈るばかりです
- ・ 役員の方が素晴らしいと思う。収支面のためだけでもこれからも貢献していきたいと思っ先輩諸氏との交流に期待しています。どのような経歴をお持ちなのかほとんど知りませんが、知れば有効も深まる気がします
- ・ 皆さん自分の視点で自由に活動できていることがこの会の良さだと思っ
- ・ (役員室より)即答が難しいご意見も多々ありました。これらは機会を設けてご回答させていただきます。

2062年の仲間達へ向け 2022の 会員メッセージ

会員の歴史への考えや会の未来への思いを綴りました。
*あいうえお順
*回答いただいた方のみ掲載。

雨宮 美千代 探求心を失わず、真実の解明に挑戦！いまこの時もやがて歴史の一コマになるのです。
石井 昭徳 歴史を学ぶ事は楽しいことです。多くの方にこの楽しさを知って欲しいです。
磯目 健次 石関さん紹介で入会させていただき楽しかったです。今後も歴研を続けてください。
市川 康夫 そっけない学者に比べ横歴の目を見張る発表。小生のつたない文芸も載る。厚かましくも。
上野 隆千 集まり散じて人は変われど、楽しく歴史を学ぶ交流の場としての横歴が続きますように。
牛山 真弓 歴史は変わっても我々の探求心は不変。楽しい仲間と新しい発見にワクワクし続けたい。

遠藤 容弘 40年続けてきた歴史研究会です。皆様も更に当会に輝きを与え、会を発展させて下さい。
大岩 泰 宗教・文学・科学、なんでもよい。政治史以外の歴史を研究すると時代の理解がより深くなります。
大瀬 克博 歴史から日本人を学び、考えましょう。
太田 重明 皆さん方の学ぶ姿に多くの明るい刺激を与えられ感謝しております。
大利 憲 お勉強と歩行を励行しましょう。
大友 俊幸 真実を知ろう！知りたい！
大山 義雄 幅広い歴史の話聞き楽しいです。また大勢の楽しい仲間ができてありがたいです。
長田 格 文献・先行研究を緻密に調べよう。その上で現地を訪れて自分の眼で感じよう。
遠田 千代吉 歴史は流れ生き続けます。そこに自己を投入できる課題を見つけてもらいたい。
加藤 導男 当会に入会し30年経ち、記念誌に先人達の功績を寄稿し、当会の発展の一助としたい。
加藤 泰弘 70年前位から日本は厳しい状況が続いたが、国民が頑張ったのでここまで成長できた。

加藤 英雄 金と力は無くても発想力と展開力で新しい歴史の創建に貢献しよう。
金子 ユカリ 40年後の私は94歳。かなり微妙ですが長い歴史の1コマを横歴で学びましょう。
川床 滋尊 もう一度生まれ変わってこの会に参加しているでしょう。
川端 敏代 横浜歴史研究会が永遠に続くことを心から願います。
木村 高久 私達は新型コロナに勝ちました。皆さんも困難に負けずに楽しんで歴史を学んでください。
熊本 修一 楽しく歴史を学ぶ仲間間の輪を広げよう。
桑原 代津子 会員の皆様の歴史への熱い探求心とチームワークの良さで更なる前進を願っています。
小林 秀章 歴史を学ぶことは未来への道標です。横歴の活動を通して、考えたいテーマです。
斎木 敏夫 歴史は幅が広い。好きなことから始め、徐々に深めていく楽しさを味わってほしい。
佐々木 文江 コミュニケーションの場、癒しの場、憩いの場が長く通える場所でありたい。
佐々木 眞佐子 横歴は年齢を忘れて学生に戻った気分になれます。面白い話は元気になる薬です。

佐藤 猛夫 昭和・平成・令和：四十年後(創立八十周年)の年号は？あと半歩で百周年！！頑張れ
佐藤 好子 お互いを認め合う仲間間は人生の糧です。学ぶ心を失わず楽しく集いましょう。
澁井 和夫 横浜歴史研究会40周年おめでとうございます。当会の一員になれてうれしいです。
島田 紀子 学歴身分問わず歴史好きの仲間がそれぞれの分野で学びを共有し楽しい場所となりますよう。
島田 秀世 ほとんど参加できていませんが、女房が頑張っています。
清水 漢 「横歴・40年」集まり散じて人は変われど、歴史を知り学ぶ楽しさよ！！
清水 豪志 歴史を顧みる事は、未来を占う事に繋がります。40年後の永続を御祈りいたします。
赤土 一郎 私は生来勉強が嫌いな人間です。機会を得て入会させていただきましたので、頑張りたいです。
白藤 有三 これからもよろしくお願ひします。
鈴木 美恵子 オーイ、40年後の仲間たちよ！横歴のバトンをつないでくれて、アリガトウ！！
関根 万司 埋もれた歴史の数々を教えてくださいこのサークルと仲

間に感謝しています。

瀬谷 俊二郎 同好の士(歴史学習を共有)との語らいの場が持てることは素晴らしい。

平 博子 今まで知らなかった事を知る事ができて、この先の人生も楽しくなりそうです。

高尾 隆 歴史を学ぶ素晴らしい仲間に出会えた事に感謝！会が未来永劫この地に根ざしますように。

高島 治 目指すこと＝心象俳句の上達

高田 茂 終活とは人生の学び直し。退職後の終活こそ、人生の発展期である。

高橋 正一 小学生の頃から歴史が好き。いまの取組んでいるテーマは「神沢杜口の研究」

竹内 章二 2022年は新刊ゴロナとロシアの理不尽な戦争に悩まされた2062年も歴史は繰り返していますか？

武田 収功 故きを温ねて新しきを知る楽しみを続けていきたいと思っています。

武中 正文 歴史を学ぶことは、自分自身の成長に役立ち、人の輪も広がります。今後の活躍に期待！

田代 信太郎 賢者は歴史に学ぶという。40年後に存在し日本の良識の核となることに期待します。

谷川 操一 横歴の皆様の歴史への熱意に只々脱帽するのみ。諸先輩の意志を継ぎ更なる発展を望む。

谷川 美代子 横歴先輩諸氏の熱意と活躍は偉大でした。後輩諸君の活躍と横歴の更なる発展を願います。

常住 良三 連綿と命を繋いでくれた先人達が、どんな時代を生き抜いたのか。多方面の研究を請う拝聴。

手塚 康一 小学3・4頃は「物語」「偉人伝」としての歴史。小6の敗戦後は激変した「国家政治体制に興味」

寺田 隆郎 温故知新を体現するこの会の活動が、未永く続くことを心から望んでいます。

徳植 保男 80年前にスタートした歴史を学ぶ素晴らしい横浜歴史研究会。皆様も続けよう。

外岡 篤子 生まれ変わった私がまたこの会で歴史の勉強を楽しんでいることでしょうか。Enjoy！私

永井 幸雄 孫達よ歴史に興味を、そして学び、より知って欲しい。すべての解決糸口は歴史にある。

長尾正和 我々世代の40年前と今では歴史観も大きく変わった。さらに40年後は大いに楽しみですね

長倉 洋子 例会に出席して新しい見方を学びました。充実した楽しい会の発展を願っています。

長里 三郎 連綿と続く歴史を学べる境地は、己を振り返り、先をも見据えられる最高の一時です。

中澤 静雄 横浜歴史研究会を通して良き友を得よう。

中島 弘美 人生はたった一度！歴史を学ぶことで私たちは何度も違う人生を生きる事ができる。楽しみめ！

中村 康男 40年の足跡を次の時代の道標に！歴史や落語を語り未来へ繋ぐ。横歴栄あれ！

西澤 昭 歴史は事件と年代を語るものではありません。人の生きるものを知ります。

西村 恒己 毎回聴講しましょう。自分が興味を持ったものは徹底的に調べましょう楽しんでください。

西山 達夫 経済と社会の変化への関心 興味ある人物：変革期のリーダーシップ

野尻 喜代 若い方が多く参加して仲間づくりして楽しい横歴になることを願っています。

野尻 忠生 今の横歴や歴史の定説に不満です。40年後には私は生きていないが変わると思う。

橋本 誠 さまざまな人の異なる歴史の見方、考え方を大いに楽しく語り合ってください。

長谷川 憲司 人類の叡智は歴史

を知ることから始まる。また歴史は繰り返す。

浜 敬三 会員歴を重ねることで「温故知新」を日々実感され貴方の人生がより豊かなものへと。

春口 健二 「老兵は死なぬ ただ消え去るのみ」。が今しばらくは仲間と共に在りたい。

藤田 哲三 歴史に興味を持つ横歴の仲間と例会を通して過去を学び正しい未来を模索しましょう！

藤平 玲子 横浜歴史研究会が40年後も続きますように願います、

藤盛 詔子 座右の銘 キーワードは好奇心 残りの人生もこのことをモットーに楽しく生きていきたい。

古谷 多聞 歴史からその時代の問題を捉え、現今の問題解決の足掛かりにする事を冀望する。

植 良生 歴史を学ぶことは未来への道標です。しっかりと学んで良い未来にしてください。

松木 文朗 ブローデルに出会い、歴史の楽しみが豊かになりました。良い指針にお会いください。

真野 信治 年月が経っても歴史探求は不滅です。40年後には新発見の史料と共に斬新な歴史事実を。

丸山 雅子 歴史を学ぶことよって平和で豊かな未来を切り開き

ましよう。横歴の益々の発展を願う。

宮崎 幸世 歴史好きは過去の影と光を感じて今を俯瞰する。楽しみながら仲間と親交を深めてください。

幻想の宮下元 40年後も歴史は続く、そして繰返す。真実真理を探り横歴の仲間と語り合うのが楽しい。

宮本 正文 横浜歴史研究会は素晴らしい会です。未永く続くことを願っています。

村島 秀次 2062年の横歴の発展の基礎を作ったのは創立40周年に集った会員の仲間たちです。

桃原 廣二 卑弥呼の鏡は解明されたか、邪馬台国の結論はでたか、興味はつきない。

森 彩子 「知るは喜びなり」という言葉があります。歴史の世界に分け入り楽しみましょう。

森岡 璋 歴史研究の面白さは定説に疑問を持つことに始まり、独自の解釈や別回答を示すことです。

森田 紀雅 例会発表者の皆様へ：毎回多方面に見る研究発表に心を持って楽しみ聴講しています。

山崎 稔 歴史は後になって変えたり、起らなかったことにはならない。歴史研究は人生の羅針盤にもなる。

山下 美智子 自分が知っている以外の歴史を教えてください。よろ

しくお願いいたします。

山本 創心 横歴が歴史好きの人々が互いに学び合う場所であり続けることを心から願っています。

*現在当会唯一の小学生会員。好きな歴史人は真田信繁と立花宗茂。創心君がいる40年後の横歴は？



山本 修司 現在の横歴の活動内容は質・量において我が国最大級です。さらなる発展を期待します。

吉岡 靖矩 大学で歴史専攻も糧にならずと断念。史学科選考学芸員になった娘にその夢を託す。

渡辺 京子 静岡県出身。石器・縄文・古墳時代、世界史に魅かれる。

渡辺 美智子 歴史は人々が織りなす壮大な物語。わからない事を推理するのは楽しい。

渡会 裕一 例会後に懇親会があると聞いて入会しました。「昔を訪ねて未来を知る」

【その他横歴会員】

安部 義則／有本 誠一郎

栗 光行／安藤 綾信

池田 篤雅／石井 正彦

石川 勝義／伊集院 忠

伊豆 昌貢／岩下 修三

植木 静山／内山 昇

影浦 能章／木山 和義

熊川 誠／小林 道子

斎藤 勁／斎藤 宗久

志賀 昌満／下垣 有加

早田 信広／高野 賢彦

多嘉山 テル子／竹内 秀一

丹下 重明／内藤 信行

中島 建次／中島 賢治

中島 のり子／西川 章

蛭田 喬樹／布川 二三夫

藤井 靖之／星見 定弘

前川 泰雄／増田 勝

松本 政雄／水野 嘉和

宮嶋 正樹／宮屋敷 秀明

本村 かほる／山本 大作

吉田 圭佑／吉田 友雅

若林 敏男／和田 敏子

渡邊 直人

*令和4年8月度在籍

横歴は人生経験豊かな多種多彩な人材がいっぱい。

- ・修士(史学)
- ・将棋、囲碁、木彫
- ・社会人落語家(江戸、上方、英語、和道流)
- ・空手道七段、教師師範、端唄柏葉流名取バイオリン
- ・クラシックギター演奏
- ・いけばな
- ・なぎなた3段、能10年
- ・連珠五段、傾聴(敬聴)
- ・簿記、調理師、製菓衛生士(お菓子)
- ・江戸文化歴史検定一級
- ・医学博士、放射線取扱主任者、食品保健指導士
- ・三味線(新内流)、新内、端唄、都都逸
- ・危険物甲、特化測、有機測
- ・気象予報士、公害防止管理士等
- ・歴史検定日本史2級、殺陣の稽古に通った経験があり
- ・17関連なら古今未来まで語れる
- ・落語口演
- ・横浜ライセンサー級、情報処理学会終身会員、中国語翻訳
- ・飛鳥奈良が好きな会員が多い中、奈良大の通信卒業のOBOも多い。

雑詠

竹内 章一

告知受く友と眺むる花吹雪
向日葵や猛き兵士の群れならむ
行き合ひの空に異国の孫想ふ
暮れてなほ煩惱深し老いの秋
四十周年祝ひて仰ぐ天高し

海

長尾 正和

五月雨や舳先寄せ合う釣魚船
「慎太郎」海葬待つや春の海
風光るもやい解こう蒼き沖
レガッタに勝つてずぶぬれ夏の波
潮まみれデッキを洗う夏夕焼

桜桃忌

藤盛 詔子

予定有ることの幸せ花は実に
行く春や色の溶けゆく入浴剤
万緑に抱かれ閑か武相荘
工事に聞く津軽弁桜桃忌
麦秋や相模の国の国府跡

雑詠

澁井 和夫

五月晴術後の散歩五分から
風の出で青水無月の棚田かな
茄子の花下校のチャイム鳴りにけり
空広く色丹島へ墓参かな
夜学子や駅中蕎麦の竹輪天

壇はま

鎌倉散策

高島 治

海の香の風通りすぐ夏座敷
鉄砲百合乱世を偲ぶ切通し
どの谷戸も仏在すや竹落葉
夕星に矢を射る如く二日月
寿福寺や虹あるが如空しさよ

春夏秋冬新年

市川 康夫

元町は春こそよけれ女連れ
石麻呂の痩せ思ひつつ鰻食ふ
もみづりて火炎を噴くか鳴子峡
音しげく荒磯揺るがし冬怒涛
初釜や師匠に見とれ茶花見ず

俳研よ

我が庭の花を愛でつつ

谷川 操一

ひと枝の梅の香散らす花鋏
紫陽花の毬一日の安らけく
しんとして雲育ちゆく薔薇の園
青き実を残しトマトの立ち枯るる
艶やかな万両の朱の静かなる

夏を詠む

森 彩子

蜘蛛の巣に捕らえらりたりひと雫
残り香を留めたき夜の酔芙蓉
空蟬に恋は遂げしかたずねけり
絵手紙に躍る朝採れきゆうりかな
くちびるに触れて冷たきサクランボ

市川康夫

高野賢彦

山本修司

壇はま

定家は古典によりて注記せり
紅旗破賊は非吾事とて

初春の葉山の海のそよ風に
走るヨットの白帆かたむく

巢ごもりの時間支える
原田マハ癒しをくれる向田邦子

賢聖は神佛なき国に出づ
有り難きかな道を説く君

寒暖の風に吹かれし
花びらは世々のうつろい秘めて
散るらむ

秋日和久方振りの
外出はかつて歩いたムクゲ咲く道

攻め込みて四囲の輩は同化せり
長安嘗て進士の都

夏木立みあげて高き
夕空に真白にうかぶ半月うるわし

せわしなくゆきかう街で
友と会い久方振りにのどかな時間

我先に首級捕らんと斬り込めば
勇者の前に虎虎虎と

カラマツの枯れ葉ちり敷く
高原をとともに歩んだ日々は懐かし

医学の祖ヒポクラテスは
「空腹が万病治す」至極名言

小国を圧倒せんと競ひ合ひ
強者どもの夏の夢かな

その昔縄文人が祈りし
星を見上げて我はなにを祈らん

頻繁の緊急アラーム
止められずなすすべもなく夜明け
迎える

その昔大航海に後れたり
鉄砲鍛冶は数多をりしに

亡き父母を思うて遠き
故里の山なつかしみ友と語らむ

今はやり鎌倉殿とオミクロン
無言の感動マスクをつけて

和辻説く『鎖国』に曰く極東の
民拡散し大陸に発果つ

西伊豆の駿河の海に向かい立つ
富士の高嶺は天に溶け込む

果物をトルコブルーの
皿にのせセザンヌきどる大寒の夜

走れ！タンゴ

丹下重明

壇はま

砂をけちらし

チェロとバンドネオン

水をけちらし

ぶつかるリズム3・3・2

悲しみもうれいもけちらし

走れ！タンゴ

ヨーヨーマは往く

踊れぬタンゴ

ピアソラは往く

リベルタンゴは往く

詩研よ

音はいなずまとなって

空を大地を駆け巡り

力強く水面を叩き

なおも突き進む

歌研よ

創立四十周年記念

春の歴史散歩

―目指せ源氏山―東国から始まった武家政権―

令和2年度、3年度の春と秋の歴史散歩は新型コロナウイルス感染症のため中止となっていた。今回久しぶりに歴史散歩が開催された。

実施日 令和4年4月23日(土)
散策道順

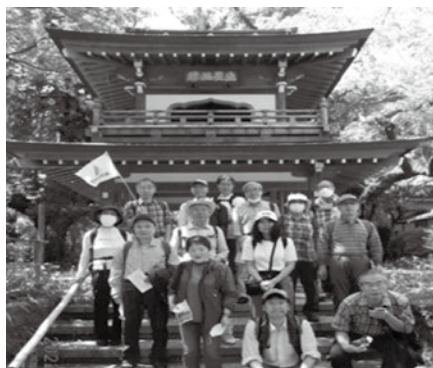
葛原岡神社→銭洗弁財天→佐助稲荷神社→鎌倉歴史文化交流館→鎌倉駅

その他

「楽ちんコース」と「健脚コース」の2組とし、葛原岡神社で合流し昼食とする。その後は一緒に解散の鎌倉駅まで歩いた。

さて、当日の23日(土)は、気温26度の夏日であり、山歩き

には暑い天気であった。健脚コース組は、10時に集合場所の北鎌倉に15名が集う。いずれも歩くのが大好きで足に自信がある面々であった。歩き始めて約10分したら鎌倉五山第四位で臨済宗円覚寺派の浄智寺に着く。太鼓橋と山門を通り境内に入る。後は自由見学であった。境内は樹木も豊富で起伏もありまた本尊を安置する曇華殿や石仏、などの見どころも多々ある。心が穏やかになった。



浄智寺山門前で記念写真



春の坂道

一方、楽ちんコース組は10時半集合場所の大船駅南口に14名が集合し、路線バスで源氏山入口まで乗車した。バス停から1キロ弱の上り坂を歩き葛原岡神社へ向かう。のどかな新緑の坂道で清々しい。

正午近くに2組が葛原岡神社前の広場でめでたく合流する。そして楽しみとしていた昼食タイムとなった。



幸せな昼食タイム



賴朝像の前で集合写真

昼食後、一回目の青空講座を開催。講師村島秀次さんが「二つの鎌倉討幕計画と葛原岡神社」を論ずる。話の中で賴朝は中世人であり、義経は古代人と述べたのが印象的。続いて、源氏山公園の賴朝像前で2回目の青空講座となり真野信治講師が「賴朝政権と鎌倉武士団」を講義する。
その後、一行は山を下りながら「銭洗弁財天」や「佐助稲荷神社」を訪れる。そして最後に「鎌倉歴史文化交流館」を見学し、鎌倉の歴史を改めて学ぶ。鎌倉駅前解散となった。新緑がまぶしい鎌倉を久しぶりに散歩できて、参加者の皆さんは満足感に満たされていました。(高尾 隆記)

会員研究

大伯皇女 皇女たちの恋

遠田千代吉

―はじめに

若き女性はいつの世も恋を夢見たことがあるのだろうか。はたまた結婚を通して男性との結びつきはなかったのだろうか。古代に生きた一人の女性としての皇女の恋に関心を向けざるを得ない。本論では、古代の女性たちの置かれた社会的背景を先ず見て、次に皇女という立場からくる制約に言及する。そのうえで天武天皇の四人の皇女の恋・結婚に触れ、それとの比較のなかで大伯皇女の特性を明らかにしたい。それも古代の女性たちの「脇」に静かに入り込み、その息吹を感じながら叙述できれば、と思っている。

二 古代の女性たちの恋
まず古代の女性たちの置かれた

社会的背景の様相に触れねばならない。

(一)「ヲトメ」となる年齢

古代、肩に切りそろえられた切り髪メノワラハが成人・ヲトメとなるのは十三歳であった。女性は、数えの十三歳ないしは初潮を迎えることを機に成人となり、裳を身に着け、婚姻の有資格者として認められた。このことは古代令制のうえでも『令義解』に次のように見られ、社会的慣行となっていた。

『養老令』・「戸令」第二十四条聴婚嫁条(婚姻が可能になる年齢)「凡(おほよ)そ、男の年十五、女の年十三以上にして、婚嫁すること聴(ゆる)せ」

古代社会にあつては、生涯寿命が短く、婚姻年齢にも若くして到達した。

(二)母のきびしい目

古代の親子関係は、父子よりも母子関係がより緊密であった。通い婚を基本とする往時の婚姻を背景に、子は母の許(もと)で育った。

子に母が乳を与え、その手許で養育したことから母子関係こそが家族構成の基本であり、子にとつて「親」とは「母親」の意であった。このことから、必然的に母が子の婚姻に、その幸せを願い、強い関心を向ける。特に母は娘の結婚にきびしい目を向け、結婚の承諾権は母が持っていた。一方、男性の婚姻規制は総じて緩やかであり、結婚に際し母親の承諾は必要としなかったようである。【註一】

(三)ツマドリ・通(かよ)い

古代に在つても若い男女は種々の出会いの中に想いを通わせた。その属する階層で、「恋と婚姻」の形態は相違するが、一般的には男性が女性の許(もと)を訪れる求愛行動が基本となる。恋は専ら男性が女性の許を夜間に訪れることを重ね、成就する。女性は男性の訪れを、ひたすら「待つ」。「待つ」ことは女性の心に「何時来てもくれるのか・訪れがないかもしれ

ない」との「不安感」も生む。この恋にまつわる不安感が『万葉集』に見られる多数の相聞歌を生んでいるのである。これまでの叙述では恋の行方に男性が主導権を握るように見えるが、そうではない。

いつの世も恋の「勝利者」は女性である。男性が、娘の好みに合い、母親のメカネにかなうかどうか結婚に至るかどうかの岐路となるのである。特に傍らで娘を監視する母親の許しが得られるかどうか恋の行く末を決めた。恋が実つた後、古代、明確な成婚儀礼は存在しなかったようである。その母の承諾をえて、男性が女性の許へと通う事実の集積が婚姻とみなされた。【註二】

(四)ゆるやかな結びつき

この通いを経た後の、当時の婚姻生活の形態はどのようなものであつたのだろうか。古代の婚姻形態については、諸説が展開されてきたが、現在拠るべき有力な説は、関口裕子氏の、次の見解である。【註三】

「当時の婚姻形態は、一定の妻問期間を経た妻方居住婚が新処居住婚であり、本質的には離合がゆるやかであり、生涯にわたる強固

だったのであろうか。ここでは大伯皇女と同じ天武天皇の皇女で、齋王に派遣された託基（たき）皇女と田形（たがた）皇女を取り上げる。

大伯皇女は天武朝を通じて齋王を勤め上げ、十三年の長きにわたったが、文武朝に派遣された託基皇女は三年（六九八〜七〇一）、文武・元明朝に派遣された田形皇女も短い任期（七〇六〜？）と推定され、ともに短い任期であった。

① 託基皇女

託基皇女の母は、地方豪族穴戸臣大麿の娘・カジヒメノ娘（いらつめ）で、忍壁皇子以下四人兄弟姉妹の末娘である。託基皇女の婚姻については、『万葉集』に次の記録が残されている。

「春日王が歌 志貴皇子の子、母は多紀皇女といふ

あしひきの 山橘の 色に出でよ 語らひ継ぎて 逢ふこともあらむ 卷四一六六九」

志貴皇子は天智天皇の皇子であり、多紀は託基である。ここでの題詞は、託基皇女が志貴皇子と婚姻関係を結び、春日王を生んでいることを伝えている。

② 田形皇女

田形皇女の母は、蘇我赤兄の娘大薙娘（おおぬいのいらつめ）で、先に言及された穂積皇子、紀皇女に続く末娘である。田形皇女についても、婚姻の記録が『万葉集』に残る。

「笠縫女王が歌一首 六人部（むとべの）王が女。母を田形皇女といふ

あしひきの 山下響（とよ）め 鳴く鹿の 言ともしかも 我が心夫 卷八一六一一」

以上齋王に就任した皇女が、その退下後、婚姻関係を持った事例を二例記述したのであるが、ここにみられるように、齋王として一旦神に仕え、祭祀に携わった身であっても、役割の終わった後には、皇女としての恋・婚姻の途（みち）は開かれていたと認められるのである。

五 おわりに 大伯皇女の恋

さて本論は、ここに至り結論を述べねばならない。「大伯皇女は、その生涯において恋をし、婚姻関係を持ったのであろうか」。このことに関し、『万葉集』をはじめとして他の史料にも、記録は一切残

らない。先に天武皇女二名、齋王経験者一名で記述したように、皇女としての制約は受けながらも、さらには齋王経験者であっても、皇女たちが恋をし、婚姻関係を結ぶことは自然に行われていた。このなかで大伯皇女の恋・婚姻についての記録は、何も伝えられていない。

すべからく万人が恋心を抱く。大伯皇女も、その機会は持ちながらも、そのことは心の深奥に秘めたままにしたのであろうか。十三歳で齋王となり、齋王を退下し帰京後、恋ないしは婚姻に踏み切らなかつた要因を考えれば、次のことが考えられる。

①肉親として愛する弟・大津皇子を謀反の嫌疑で失い、精神的打撃が余りに大きかった。

②母を既に七歳で亡くし、後ろ盾はなく、弟の死で天涯孤独の身となった。

③齋王退下時の年齢は二十六歳であり、今と違う当時の短い生涯年齢を考えれば、この年齢は既に女性として一定の域に達していた。

これらのことが考えられるが、私は①の要因が一番大きいと考え

ている。余生を、弟大津皇子を弔っていくことに決意させたのではないだろうか。

結果として大伯皇女は、『万葉集』に弟を想う秀歌六首を残したが、その後（のち）は、『続日本紀』に皇女の薨去記録が記されるだけであり、その余は、一切記録を正史上残さず、沈黙したままである。

大伯皇女にかかわる、この「一切の沈黙」が、皇女の「清明さ」として、今に伝わっているのである。

—了—

「註」
「一」森浩一編 『女性の力』 日本
本の古代十二 服藤早苗 「古
代の母と子」 中央公論社
一九八七・十

「二」岩波講座 『日本歴史 古
代四』 今津勝紀 「古代の家族と
女性」 岩波書店 二〇一五・一

「三」歴史研究会 『講座 日
本歴史二』 関口裕子 「古代家
族と婚姻形態」 東大出版会
一九八四

「四」荒木敏夫 『古代天皇家
の婚姻戦略』 吉川弘文館
二〇一三・一

会員研究

狛犬研究 狛犬探訪

雨宮 美千代

はじめに

今日、神社などでは当たり前のように見かける狛犬だが、祈願、記念、御礼など様々な奉納理由があり、そこから時代背景や人生の「コマをうかがい知ることが出来る。

狛犬研究については先駆者で神職にある故上杉千郷氏を始めとして、小寺慶昭氏、三遊亭円丈氏などが全国の狛犬を訪ねて狛犬の歴史、分類、特徴等研究されている。石造狛犬では石工の研究も行われ、地域による特色なども研究されている。また、三遊亭円丈氏は「日本参道狛犬研究会」を発足、全国の会員が各々独自調査を行い、データの収集・分類をしている。鳥取県立博物館の狛犬調査事業では県内のデータを公開している。

しかし分類方法や名称などは確立されておらず、更なる研究が期待される分野である。

狛犬は鳥居・参道・社殿前その他、境内の摂末社の前、また小さな祠の中に在ったり、「二対並べられていたり、まったく無い神社もあり、設置については一様でない。

刻銘は擦れたり欠けていたり、台座が土に埋まってしまい判別できないものや、元から無い物も多く、拡大鏡、軍手、ライト、汚れを拭く布巾を使用して確認に努めた。なお、文中にある「左・右」の表記は社殿に向かっての位置・方向を示す。

（一）狛犬の歴史

古代オリエントにおいて王権の象徴とされたライオン（獅子）は、インドでは仏教を守護する霊獣となり、中国では守護獣あるいは縁

起の良い瑞獣「獅子」として取り入れられた。大陸から仏教とともに伝わった中国の唐獅子は、日本では「獅子・狛犬」として独自に発展してきた。奈良時代に大仏開眼供養で演じられたという「蘇芳菲の舞」「狛龍の舞」という舞楽が「獅子・狛犬の舞」の原型と言われている。「蘇芳菲」とは犬のような頭で身体は獅子、全身が金色の一角獣で、「狛龍」は「駒形」とも呼ばれる霊獣である。

日本独自の狛犬が誕生したのは、おそらく奈良から平安時代にかけて大陸発祥の霊獣や舞楽に登場する霊獣が大きく影響したものである。

（二）狛犬の役割

獅子・狛犬は平安時代に厄を祓う舞として、また朝廷の儀式の場や貴族の装飾、調度品として獅子・狛犬の画像や木製の置物として登場する。平安時代後期に編纂された『類聚雑要抄』には「左獅子

於色黄 口開 右 胡麻犬 於色白 不開口 在角」と書かれており、京都御所の紫宸殿の賢聖障子の狛犬はまさにこの通りである。京都市賀茂別雷神社の本殿・権殿正面の「影狛」もこれにそっくり

なものが描かれている。また、御簾の裾を抑える鎮子という実用的な役割もあった。

『枕草子』の92段では「後の屋の行啓。御産屋。みやはじめの作法、獅子、狛犬、大床子など持てまゐりて、御帳の前にしつらひすゑ、内膳、御入つひわたしたてまつりなどしたる。」と描かれ、256段では「一条の宮の定子中宮の御座について「関白殿、二月十日のほどに、御しつらひ、獅子・狛犬など、いつのほどにか入りゑけむとぞをかしき。」と描かれている。帝、後の御帳台の前には、鎮子の獅子・狛犬が揃って置かれているのである。同段には「おは

しましつきたれば、大門のもとに、唐土の樂して、獅子・狛犬をどり舞ひ、笙の音、鼓の声にもおぼえず。」とある。獅子・狛犬の舞楽である。

やがて宮中から寺社へと神仏の守護獣としての役割に移り、鎌倉時代に入ると石造狛犬が増えてくる。

『徒然草』236段「丹波に出雲と云ふ所あり」で始まる一文には、聖海上人とその一行が出雲にやってくる。神社の狛犬の背中合

わせに置かれているのを見て、都の風習と違い何か深い云われがあるのだらうと感激し、涙を流して神官に尋ねると、また子供がいたずらをしたのだらうと言いながら神官は狛犬を前合わせにして元に戻した。上人の感涙は無駄になつたという話であるが、子供が簡単に動かせるところを見ると小型で軽いものだったと想像できる。

時代が下るにつれ社殿の中から外へ、さらに社殿前へと下がり、現在では参道に見られるものが一般的となる。鳥居の脇に鎮座して神域から内には魔を寄せ付けない守護獣としての役目を發揮するのである。特に江戸時代には武士の奉納に加え、経済力をつけた商人など庶民の奉納が多くなり、石造狛犬が増大する。

(3) 狛犬の姿・形

通常狛犬と言われるのは、「獅子・狛犬」または「獅子・獅子」の一对になつているものである。中国から伝わつたのは「獅子・獅子」の一对だが、日本文化特有のアシメントリーを好む気風から「獅子・狛犬」の型が出来たと考えられている。

獅子はたてがみがあり、流れる

ような毛、或いは巻き毛を持つている。狛犬は頭に角や宝珠がある。左右とも宝珠、あるいは角は狛犬、宝珠は獅子と分ける場合もある。

阿吽の形は日本特有のもので、向かつて右の口を開けている「阿」像が獅子である。左像は角を持つ狛犬で「吽」で口は閉じている。

しばしば阿吽の位置が逆になつているのを見かけるが、これは移設の際に単純に置き間違えた場合と最初から左右逆に作られた、あるいは設置の仕方が作り手の思惑と違つた等、考えられる。左右で性別を持たせた狛犬もある。

情報の発達していない昔、一般庶民が目にするのではない獅子や実在しない狛犬は、口伝えや想像で作ることしかできなかった。そのため一口に狛犬と言つても一様ではない。

狛犬という名称から「犬」の姿に似せて作られているものもある。まさに犬そのものである。



川崎市橋樹神社

設置されたところ。修復経費は約八百万円となつている。

南区日枝神社には「木造朱塗獅子狗一对 日枝神社蔵」とある。寛文十三年癸丑曆九月十日(1673年)の銘が台板裏に記されており、吉田新田の開拓者、吉田勘兵衛が奉納したものである。

②石材

中世に一時期かなりの数の石造狛犬が造られ、小ぶりで社殿の扉前の縁上に置かれた。大型の石造狛犬が露座で置かれるようになったのは江戸が始まりとされている。

凝灰岩は堆積岩の一つで比較的軟質で加工しやすいため、古くから石鳥居や石仏などに使用されている。千葉県富津市にある鋸山は房州石(凝灰岩)の産地で、麓の港から神奈川に船で石を運んだ。

厚木の七沢石(凝灰岩)は信州高遠の石工が厚木の鐘ヶ岳周辺に石切り場を開いた。安価で加工しやすいため、一般庶民の石材として各地で用いられた。

石造狛犬が現れるのは鎌倉時代に入ってからである。鎌倉時代には花崗岩、安山岩などの硬質で耐久性のある石材が用いられるよう



墨田区三囲神社



千葉県玉崎神社

また「獅子の子落とし」から獅子山型の親子狛犬も多い。玉を持ち、子を伴う姿の狛犬は多いが、時代を映して戦時を思わせる砲弾を抱えている像もある。

関東で見かける狛犬の多くは蹲踞、すなわち座っている状態であるが、「構え型」と言われ出雲地方に多く見られる狛犬は、今にも飛び掛からんとしている様である。

逆立ちしている狛犬もある。



山梨県筒口神社

になった。

神奈川県真鶴小松石(安山岩)、小田原根府川石(安山岩)、鎌倉石(砂岩、現在採石禁止)や静岡県の伊豆石(凝灰岩・安山岩)などが石造物に利用された。

奈良県東大寺南大門の狛犬(獅子)は、建久七年(1196)中国南宋の伊行末によるもので、年代がわかつている石造狛犬の中では最古の物である。

京都府宮津市の籠神社の石造狛犬は鎌倉時代末期製作と言われたきたが確証はなく、今では研究者の間で疑義が呈されている。安土桃山時代から江戸時代にかけてのものではないかという研究者もいる。凝灰岩製で国の重要文化財に指定されている。

岐阜県神戸町の日吉神社の狛犬は、天正五年(1577)、砂岩で造られており、重要文化財に指定されている。右前脚に「不破河内守光治造立」左前脚には「天正五丁卯季五月吉日」の刻銘がある。この時代の狛犬には凝灰岩や砂岩のものが多く見られる。

江戸時代に入ると、徳川氏をはじめとする大名、経済力を持つ町人の寄進が増えて、石造物が増大

石川県の金沢市近郊で見られる「逆さ獅子型」も非常に珍しい形である。このような地方色豊かな狛犬を意外なところで発見する。

護国神社などで見られる「威嚇型」は屋内に置かれた木彫狛犬に似せて作られており、毛並みの美しい「唐獅子型」は関東に多い。現在よく見られる「巻き毛型」は大正時代以降、愛知県岡崎市の石工によって作られたもので岡崎型とも呼ばれている。江戸の初めに造られた単純な形の狛犬は「はじめ型」と呼ばれ、前脚の間がくりぬかれていないものもある。

(4) 狛犬の材質

①木材

木造の狛犬は、大陸から入ってきた当時から鎌倉時代以前にかけて作られたものに見られる。

京都府教王護国寺(東寺)の木彫狛犬は9世紀前半のもので国の重要文化財に指定されている。滋賀県栗東市の大宝神社は12世紀末の小型の木造狛犬で、やはり国の重要文化財の指定を受け京都国立博物館に寄託されている。東京都府中市大國魂神社の木造狛犬は鎌倉初期の国指定の重要文化財で伝運慶作となつている。

する。現在みられる関東の狛犬の多くが、この頃より作られ始めて現在に至っており、今回の調査でも最多であった。石屋の徒弟制度も多大な需要に応じて進む。

江戸時代以降、参道等でよく見られる石造狛犬は安山岩、花崗岩、大理石、コンクリート等の石材で造られている。大理石製のものに中国より寄贈された鎌倉市高德院の狛犬がある。入口門前に向い合わせでなく、各々が前向き姿勢で設置されている。

鎌倉市鶴岡八幡宮の二の鳥居前にある狛犬も前向き姿勢で、こちらはセメント製である。神奈川県最大のものだが、迫力があるというよりは愛嬌がある二頭身の唐獅子で、阿像は笑っている様でなんとも可愛らしい。他に狛犬ではないが石造の獅子舞なども川崎の浄慶寺に在る。

③青銅

仏教とともに入ってきた獅子は、仏像の台座の獅子座や仏具の装飾として用いられた物など金属製のものが多かった。しかしその後の青銅製の狛犬は少なく、近年になって芸術的な価値観から青銅製の狛犬が造られるようになって



富岡八幡宮の木造狛犬は桃山時代の奇木造・漆塗りと説明書きされており、屋内の陳列ケースに飾られている。大きさは40センチ程で社殿内に置かれていたものと思われる。他にも一対の木造狛犬が神社に遺されているということである。

八雲神社の狛犬は社殿内奥にあり、小型で横に20センチ弱位の大きさである。左右ともに角があり、流れるような巻き毛等細かい細工がしてある。かなり不気味な印象である。

また、横浜市金沢区の瀬戸神社の神社報によると、奇木造の狛犬の玉眼が落ち、奇木の材が分離してバラバラ状態だったものが、神奈川県立博物館館長の薄井和男先生指導により、鎌倉の光圓美術研究所において修復作業が行われて完了し、本殿階の両側の縁部分に

きた。

鎌倉市建長寺法室内には釈迦苦行像の前に一体置かれ、龍のようなひげを持つているが青銅狛犬である。背中にふたがあり開いていて香炉のようである。大山阿夫利神社の狛犬は敵めしく、実に堂々とした姿である。

川崎市稲毛神社の青銅狛犬は「天地睨みの狛犬」と名付けられ、上半身の不調には右像、下半身の不調は左像を撫でて参拝するご利益があると記されている。

他に東京都文京区の「文京ふるさと歴史館」に展示されている富士神社から寄託された小型の狛犬がある。社殿内に置かれていたと思われる。実は木造狛犬で取り上げた鎌倉市八雲神社の狛犬が、これとよく似ている。暗くて不鮮明であったが、もしかすると青銅製かもしれない。中央区の日本橋にも青銅狛犬は鎮座して橋を守護している。

兵庫県生田神社の狛犬は筋骨隆々として躍動感がある。1959年大坂今村久兵衛謹鏤、後藤光行謹作で、戦災で焼失した神社の復興を記念して建立された。

戦時中には昭和16年の金属類回収令で物資の不足を補うため(特に武器生産)銅の供出が行われて鑄造所に多くの狛犬が収容された。当時の過酷な様子が伺われ、歴史の重さを感じられる。

④陶製

陶製狛犬は江戸時代に主に瀬戸・美濃地方で造られた。一般庶民が絵馬と同様に神社に奉納したもので、小型の瀬戸焼狛犬が800〜1200体現存している。愛知県瀬戸市の深川神社の「陶製・古瀬戸狛犬」は瀬戸焼創始者の加藤是正(藤四郎)作・奉納である。陶製としては大型で重要文化財に指定されている。

大型で堅牢な備前焼狛犬は岡山地方を中心に造られた。元禄年間、備前藩主池田侯は木村長右衛門を細工御用人として取り立て、六代目からは木村長十郎を襲名している。

東京都品川区の品川神社の狛犬は木村長十郎作である。前足が破損しており、嚴重に金網で保護されている。

三浦郡葉山町の神明社の備前焼狛犬は明治時代の作で比較的新しいものである。拜殿が焼失したた

め現在は簡素な建物がボツンとあり、狛犬だけが際立って見える。



葉山町神明

前足の爪が欠け、胴体は擦れたり、ひびが入っている箇所が見られる。千葉県金谷神社は小さな神社だが、赤茶色の狛犬が光っている。後ろ足の甲から先がなかったり尾や耳の先端が欠けていたりしているが、社殿前に立派に鎮座している。

先ごろ岡山県内での備前焼狛犬の盗難が相次ぎ、複数の神社が被害にあった。中が空洞になっていたので石造に比べ軽く運びやすかったために受難にあっってしまったようだが、モラルの問題だけでは片づけられない。防犯対策の検討が必要である。

おわりに

神奈川県内の狛犬で文化財として保存・保護されているものはわずかである。現存の古い狛犬は少なく、明治時代以降のものが殆どである。災害等で失われたものもあるが、江戸庶民文化である東京に比べて、元々、狛犬の作成自体

がそれほど多くなかったからと思われる。

寺社に置かれている狛犬は、神仏の守護の役割だけでなく、人々の信仰心と深く結びついている。

狛犬は、そこで暮らす人々によって育まれてきた文化の中で創造され、今日まで伝わってきたが、地方の過疎化、高齢化、また、核家族化等でその在り方も変化してきている。特に横浜市内では人々の流動が激しく、「土地に根付く」ということが減っている。

狛犬の表情や姿形は作り手の違いだけでなく、時代や地域によって大きく変わっている。しかし時代とともに奉納や作成自体が減少しつつある中で、今、在るものを継承していくことは重要である。

また、その在り方も変化していく可能性を秘めている。幾多の社会変動を生き延びた狛犬に刻み込まれた歴史を尊重し、それぞれの地域の生活・文化、背景となる歴史に思いを馳せ、時代とともに変わりゆく狛犬の役割・形態・材質・在り方を「温故知新」の精神で活かし、学ぶことは意義深いことである。(参考文献『狛犬の事典』『徒然草』『狛犬の歴史』他)

会員研究

藍の世界「ジャパン・ブルー」と「ツタンカーメンの衣装」

鈴木 美恵子

日本の植物学者、植物分類学の父と言われる牧野富太郎博士は著書の中で、藍の生葉や乾燥させた葉を煎じた液は、消炎、解熱、解毒、虫さされ、痔、殺菌、止血効果、更に扁桃腺炎、喉頭炎に効果があると記している。

藍はポリフェノールや食物繊維が豊富で栄養成分が多く、健康食品にも応用されている。最近になって紫外線の防止効果が分かってきた。

藍の歴史と特長

日本における藍染めの歴史はかなり古い。藍染めの発祥は古代エジプト時代と言われている。日本には古墳時代五世紀頃、中国から朝鮮半島からの渡来人によって伝えられたと言われている。法隆寺や東大寺正倉院の宝物の中には、多

数の藍の染色作品が残されている。

飛鳥時代には、華やかな青色、薄い藍色に染めた衣服が好まれた。これは貴重な色であったが、特権階級の人へのみ用いられた。藍染めは染め方によって微妙に色が変わり、淡い水色からかなり黒に近い色に染めることが出来る。染める回数によって濃淡に違いが出る。この時代の青色は藍でしか表現できなかったのである。

鎌倉・室町時代になると、褐色(かちいろ)という濃く染めたものが好まれた。戦国時代、戦に出ていく武士の間では「褐」を「勝」にかけてあやかろうとしたのではない。また、藍には止血作用、殺菌効果、虫や蛇を寄せ付けない成分が含まれている等から、戦場に向かう武士の鎧の下には藍染め

の衣類を着ていたとも言われている。

やがて、庶民の間に広く普及してくるようになったのは江戸時代になってからである。藍染めは綿、木綿、麻に良く染まるが、特に木綿に良く染まり、何回も染めることで生地が丈夫になる。汗臭さを抑える消臭効果があるので、山や畑での野良着や手ぬぐいにも適していたのである。現在では剣道着や袴など武道の稽古着にも使われている。

それまで庶民の衣服は麻が多かったのだが江戸時代になって木綿の栽培が盛んになり、江戸中頃から自分の土地で藍を育て、藍染めをする紺屋が全国に広まった。木綿に良く染まる藍染めが生活の中に入ってしまったのである。婚礼祝いに藍染めの風呂敷が贈られ、寝具の生地も藍で染め上げられていた。

明治大正時代の実業家で、近代日本経済の父と言われた渋沢栄一の生家も、藍の生産農家であった。

さて、明治時代になって来日した外国人(イギリス人の化学者ロバート・ウィリアム・アトキンソン

達)は、日本の生活用品の多くが青いことに驚いた。また、日本人の多くが青い衣装、すなわち藍色を身に着けていることに驚き、それを「ジャパン・ブルー」と呼んだ。彼らにとって日本の印象は「青色」だったのである。

明治二十三年に来日したパトリック・ラフカディオ・ハーン(後にパトリックを嫌って消してしまい、ラフカディオ・ハーンと名乗る)、日本名を小泉八雲と言った、「青い屋根の下の家も小さく、青い暖簾を下げた店も小さく、青い着物を着て笑っている人も小さいのだった」と語っている。青に溢れている日本はミステリアスだったのだらう。

酒造業、蕎麦屋、呉服商など、多くが藍染めの「暖簾」を利用していた。現代でもそれは続いている。

それほど人々の生活に入り込んでいた藍染めだが、明治時代後期になってドイツから化学染料が入ってくると、天然の藍の葉を利用して染める、日本古来の技法が日常から少なくなっていく。化学染料は大量に染めることが出

来、安価なのだ。種から育てた藍の葉を、三カ月余りかけて発酵させ、「すくも」を作り、「藍の華」と呼ばれる染料液が出来るまでの丹念な仕事で、日本古来の技法なのである。

更に、第二次世界大戦の影響も大きい。大戦で不足した食料を増産するために、畑での藍の栽培を禁止したのである。多くの藍農家も生活のために転業せざるを得なくなってしまった。

そのような状況の下、日本一の藍の生産地として知られる徳島県の「阿波藍」も、一気に需要が落ち込んでしまった。しかし、最上級と言われる阿波藍の復活を願う、天然藍染めの伝統と技術を守ろうとした人がいた。

最上の阿波藍の種を絶やさぬために、警察に見つからないようにと密かに山の中で藍を育て、種を採取していった。必ず藍染めの時代が再びやってくると信じ、それを強く願っていた。懸命の作業である。なんとか天然藍染めの伝統と技術を後世に残そうと、大変な苦勞と努力をしてきたのである。その甲斐あって阿波藍の技術は今も、代々後継者に受け

継がれている。

実は「藍」という植物はない。藍の色素を持つ植物が、それぞれの気候に合う土地で栽培され使われている。

日本や中国の温帯地方ではタデ科一年草の蓼藍。インド、アフリカの熱帯地方ではマメ科のインド藍（インディゴ）やナンバンコマツナギ。中国南部やタイ、沖縄など亜熱帯ではキツネノマゴ科の琉球藍。ヨーロッパ、北海道など寒帯ではアブラナ科の靑（ウォード）が使われている。日本の藍染めはタデ科の蓼藍を使う方法である。

ツタンカーメン王の衣装の復元

古代エジプトではミイラを包む布に藍染めが使用されていた。

エジプト王ツタンカーメンの墓が発掘調査され、黄金のマスクなど多くの出土品があった。その中の服飾品はかなりの劣化が進んでボロボロであった。そこで織物技術が進んでいるスウェーデンで、その劣化した衣装を復元するプロジェクトが発足した。一九九〇年のことである。

世界中の研究者、技術者の協力により、衣装の多くは白を基調とした麻織物であることが分かった。その中には藍で染められている色のものは藍で染められていることが判明した。だが当時のヨーロッパでは藍染めを再現する技術がなかったため、日本の中島安夫さんがプロジェクトに参画することになった。

「埼玉県無形文化財・武州正藍染め技術保持者」の中島安夫さんは、江戸時代から続く歴史ある中島紺屋の四代目であった。

依頼を受けた中島さんは、ボロボロに朽ちた織物を参考に調査研究を重ね、ニキログラムもある麻糸を二カ月で染め上げた。青い部分はインド藍で染めた。研究者の間では「古代エジプトの色と風合いが再現されている」と評判になったという。

やがてツタンカーメン王の衣装は五年以上かけて復元され、欧州では展示会が開かれた。日本でも中島さんが埼玉県知事に相談し、スウェーデン大使館、エジプト大使館の協力と多くの後援会の力添えにより、羽生市の中島紺屋資料館で、古代エジプト王ツタ

ンカーメンの衣装展が開かれた。二〇一三年秋のことである。その後、衣装はスウェーデンにて永久保存されている。

藍の魅力

藍染めには日本古来の伝統的な技法で、藍の葉を乾燥させ、発酵熟成させて作った「すくも」を使う方法と、生葉を収穫し、それを絞って作った液で染める方法がある。どちらも染液に浸した布は、最初は緑色をしているが、それが空気に触れることで酸化し、青色へと変化していく。わずかな時間で劇的に変化していく様に驚き、感動する瞬間こそが藍染めの醍醐味と言えるだろう。

「すくも」から作った染液に浸し空気に触れさせる。この作業を何回も繰り返すことにより、濃い藍色へと変化していく。染め上げてから二十年三十年と長い年月を経たものは、さらに深い紺色になる。百五十年経たものでも鮮やかな青色を留めている衣装もある。天然の藍染めは色褪せることが少ないのだ。藍を下染めして他の植物染料を重ねると、粋な色合いを出してくれる。藍はどのような

色と合わせても面白味のある色を出してくれる。

緑色の葉を何カ月もかけて、多くの手間もかけて、ようやく藍という青が生まれてくる。その青は身に着ける人によって、それぞれの味わいが出てくる。作品を使い

込むほど馴染んでくる。

それが藍の魅力と言えるだろう。

参考文献

「趣味工房シリーズ 華麗優雅につぼんの色を染める 講師 吉岡

幸雄」(NHK出版)

「草木染・四季の自然を染める」

山崎和樹 (山と溪谷社)

「NHK美の壺 藍染め」(NHK出版)

「藍染め」(藤沢市リトマス)

「匠の技」(朝日新聞)



会員研究

間違えられたわけではなかった！？ ― 源実朝暗殺事件の真相 ―

真野 信治

令和四年の大河ドラマは「鎌倉殿の十三人」である。ドラマの後半は、鎌倉幕府初代将軍源頼朝が亡くなった後、次世代の「鎌倉殿」らを巻き込みながら、有力御家人同士の抗争が果てしなく続いていく状況をそれぞれが演じている。なかでも長男頼家（二代）・次男実朝（三代）はそろって天寿を全う出来なかった。頼朝はそんな我が子らの惨状をあの世で嘆いていることであろう。ドラマは、その

頼朝が一番信頼をしていたのは北条義時であるとし、義時であれば自分の子や孫をしつかりと守ってくれると安心していた頼朝を描いている。しかし当の義時は、頼家・実朝・一幡というまさに頼朝

近親の殺害に関与しており、さらには、ほとんどの御家人肅清事件に首謀者として関わっていく。さすがの頼朝も、義時の奥深くに潜むダークな面を知りうることはできなかつたのか。今後はさらに暗

黒面に堕ちていく義時をドラマはどのように表現していくのか、非常に興味深い。反面、息子の泰時が、逆に若き日の正義感あふれる義時を彷彿とさせる男に成長してきている状況も面白い。今後は暴走する父のブレーキング役になっていくのであろうか。そんな中で、本稿は建保七年に起こった実朝殺害事件、それと同時に殺された源仲章について少しづつやいてみたい。

武士として初めて右大臣に任官された鎌倉幕府三代将軍源実朝であったが、建保七年（一一一九）一月二十七日、甥の公暁（こうぎょう）によって暗殺されるといふ凄惨な事件が勃発した。一月二十七日は一晚で二尺（六十センチ）も積もる大雪であったとされる。午後六時ごろ、実朝が右大

臣拝賀のため鶴岡八幡宮に参詣する。夜になって参拝を終えて石段を下り、公卿・殿上人らが立ち並び前に差しかかったところを、山伏の格好をした公暁が襲いかかり、下襲（したがさね）の衣を踏みつけたことで実朝が転倒したところを「親の敵はかく討つぞ」と叫んで頭を斬りつけ、その首を打ち落とした。同時に三、四人の同じような恰好の法師が、参詣の供の者たちを追い散らし、殿上人十人の最後尾右にいた源仲章を切り伏せた（公暁が実朝・仲章を次々に殺めたという説は、殺害にかかった時間と手間から考えて現実的ではない）。前駆の最後尾右に

いるはずの北条義時と間違えて殺害したと言われている。『吾妻鏡』によれば、仲章は急に具合が悪くなった義時と御剣役を交代してい

た(「心身違例」と記しているがめまいのことらしい)。因みにこの拜賀の行列に並ぶ随兵の人選は前年十二月二十六日に行われている。それがどのような経緯で公表されたかは不明であるが、定説では暗殺者は、実朝のみにとどまらず行列最後尾右にいるはずのもう一人の人物もターゲットにしていたとされる。もちろん北条義時のことである。しかしながら、その位置にいる人物を本当に義時と認識した上での犯行であったのかどうか、安易に結論付けはしないほうがいい。殺される運命にあつた者がその直前にそれを見事に回避したという経緯は、何となくできすぎた話と考えられているからだ。その後、公暁は実朝の首を持って雪の下北谷の備中阿蘭梨宅に戻り、食事をとるが、その間実朝の首を離さなかったとされている。そして乳母夫の三浦義村に使いを出し、「今こそ我は東国の大將軍である。その準備をせよ」と言い送った。この時点で、公暁は完全に義村を味方だと考えている。義村は「迎えの使者を送ります」と偽り、すかさず北条義時にこの事を告げた。義時は躊躇なく公暁

を誅殺すべく評議をし、義村は勇猛な公暁を討つべく長尾定景を差し向けた。一方、公暁は義村の迎えがなかなか来ないので、一人雪の中を鶴岡後面の山を登り、義村邸に向かうのだが、途中で討手に遭遇してしまう。討ち手を斬り散らしつつ義村邸の板塀までたどり着き、塀を乗り越えようとした所を討ち取られた。享年二十。以上がほぼ定説となっている実朝暗殺から公暁殺害までの経緯である。『吾妻鏡』によると、八幡宮の石段の上から「我こそは八幡宮別当阿蘭梨公暁なるぞ。父の敵を討ち取つたり」と大音声を上げ、逃げ惑う公卿らと境内に突入してきた武士達を尻目に姿を消したとある。一方、『愚管抄』によると公暁はそのような声は上げておらず、鳥居の外に控えていた武士たちはお供の公卿らが逃げてくるまで襲撃にまったく気づかなかつたとある。というのは、義時は実朝に「中門にとどまれ」と命じられており、拜賀を終えた時点では他の前駆の人々と共にかなり離れた中門付近に待機させられていたからである。つまり実朝が襲撃された際、数千の兵はすべて鳥居の外に控えていて、その場に武装した者はいなかったということになるわけだ。仮にこの『愚管抄』の記述が正しいとなれば、なぜ『吾妻鏡』はそのように書かずに、わざわざ義時の離脱の状況を創作したのであるのか。事件直前に離脱したことは、あらかじめ襲撃を知っていたかのように勘繰られ、加えて、知っていたにもかかわらず襲撃回避のための行動をとらなかつた義時にさらに疑惑の目が向けられよう。すなわち、義時の指示で実朝暗殺が実行されたことが容易に想像できてしまう。そう考えると、北条氏を顕彰する『吾妻鏡』が、ことさら義時の疑惑を伝えるはずもないので、非常に不可解な記述といっている。或いは、義時の「心身違例」とする体調不良は、意外に真実を伝えていたと考ええるべきなのであろうか。

このように、当時の描写が史料によつてはかなり相違するなか、当然のことながら事件の黒幕の有無が話題になつてくる。もちろん直接の実行犯は公暁でありその事実は動かすことはできない。問題なのは、公暁がこのような暴挙にでた背景には、「親の仇は実朝

である」と誰かしらに吹き込まれた可能性があると考えられることだ。その誰かが黒幕といえは黒幕なのであろうが、今のところ、それを明らかにすることは出来ない。もちろん、公暁が乳母夫である三浦義村と深く繋がっていたことは間違いないので、義村が怪しまれることは仕方がない。ただ、実際に義村が実朝らの殺害を指示した具体的証拠はない。併せて、源仲章の殺害が、果たして義時と間違えた上での行動だったのか、この辺りも検証すべき事柄であろう。古くは五味文彦氏(東京大学名誉教授)が、仲章が持つ二重又パイ的な立場から彼自身が初めから襲撃の目標に含まれていたのではないかと主張している。すなわち、実朝が北条氏の傀儡ではなく將軍親政を機能させ、尚且つ後鳥羽上皇との連携を目指していたことに対し、北条義時・三浦義村ら鎌倉御家人が手を結んで、実朝および後鳥羽と実朝を結びつける後鳥羽の近臣・仲章の排除に乗り出したとする説である(「源実朝―將軍独裁の崩壊」『歴史公論』1979年)。そうであれば、まさに一石二鳥の暗殺劇である。

繰り返すが、実朝暗殺の黒幕の存在を推量した場合、事前に知っていた可能性のある義時が怪しいと言つ説は、以前より根深い。ただ、義時・政子にとつて実朝は唯一の権力基盤であり、その実朝を殺害する必要性は全くない。あえて言えば、よく見受けられる『吾妻鏡』の得意技ともいえる描写が気になる。すなわち、殺害された実朝にいわれる死亡フラッグ(不吉な前兆)を立てている点である。まず始めに、出発の際に大江広元は涙を流し「成人後は未だ泣く事を知らず。しかるに今近くにいると落涙禁じがたし。これ只事に非ず。御束帯の下に腹巻を着け給つべし」と述べたとある。これは頼家のときと同様に実朝も死ぬ運命であったことをさりげなくほめかしてあり、『吾妻鏡』の特徴が顕著に表れる常套フレーズである。さらに、いよいよ出立という時に実朝が詠んだ歌が伝わるのだが、「出でていなばぬしなき宿となりぬとも 軒端の梅よ春を忘るな」というもので、いわゆる「禁忌の歌」として有名である。これなども、菅原道真が大宰府に左遷される直前に詠んだ歌と

同様、あまりにも不吉で限りなく死を予感させるものである。まだまだある。実朝が南門を出る時、源氏の守り神である白鳩がしきりにさえずっていたり、牛車から降りる時太刀が牛車の台に引つ掛つておれてしまつたり、と凶兆のオンパレードである。このように『吾妻鏡』が宿命論や運命論的な描写をする時は、決まって北条氏のダークなイメージを隠蔽する時である。つまり、体(てい)のいいすり替えをしたり、或いは架空の出来事を挿入したりする。今回もその常套手段を使つたとすると、義時になにかおやけに出来ない由々しき事柄があつたと想定できなくもない。ただそれを示す具体的史料が出てこない限り、何とも言えないのである。

では、三浦義村はどうか。まず義村はこの拜賀の儀式に参列していない。当時の最有力御家人である義村が不参加なのは解せない。こちらは何らかの企てを目論んでいたと想定してしまふ。ただ、公暁をそそのかして彼の叔父実朝及び政敵義時を殺したとしても、殺害犯の公暁自らがその後將軍になれる可能性は非常に低い。暗殺

という非情な手段を駆使して將軍職を横領したことに對し、他の御家人・世間が納得するとは思えないからである。したがって、義村が政権転覆を狙うとしてもこのような強硬手段を画策するとは思えない。一方の公暁は、当然のごとく義村を味方として認識していたことは間違いない、その点は重要である。従前より、巧みに権謀術数を用いる義村のことなので、あらかじめ公暁と密談をしていた可能性は十分あり得る。ただ、これも義時同様、公暁と連携する義村を徴証する材料はないのである。先に触れたとおり、北条氏・三浦氏が共謀して、実朝・源仲章を殺害したという説は、それぞれの単独黒幕説よりは、やや可能性はあると思われる。三代実朝政権は北条氏の傀儡ではなく將軍親裁が徐々に機能してきており、後鳥羽上皇との連携を目指したと想定することにそれほど無理はない。上皇が実朝の官職を驚異的なスピードで昇進させたのも、その証左であると言つていい。すなわち、建保六年(一一二八)後半、左近衛大将任官、次いで十月には内大臣となり、官職では父頼朝を超え

普通だが、博学がりはそれなりの定評があったらしく、学問に優れた人材に乏しい鎌倉においては幼少の実朝の教育係に適した人物であったと言われている。実朝から気に入られた仲章は將軍の御所の近くに邸宅を賜った。その一方で、朝廷の官吏としての地位も保持しており、時折上洛しては後鳥羽上皇に奉仕して幕府内部の情報を伝えるなど、今日で言うところの「二重スパイ」のような役目を果たしていた。このあたりを義時・義村が危険視していた可能性は大にある。また仲章は京都では、盗賊の追捕や幕府との連絡係を務めていた時期があり、建仁三年には阿野全成の三男頼全を処刑している。このことが、阿野全成没後に阿野一族を統括していた可能性のある後家阿波局、及びその背後にいる北条義時との関係性にどのような影響をもたらしたのか。非常に気になる場所である。おそらく、阿野・北条サイドは仲章に少なからず遺恨を持ち続けていたと推察できなくもない。その状況下で起こった仲章殺害であったことを勘案すると、義時と間違われて殺されたとするよりは、決して間

違えられたわけではなかった、と想定するほうが自然である。もちろん義時の暗躍が考えられる。ただ、一方の実朝に対しては、義時・義村が暗殺を実行せざるを得ないほどの対立関係にあったかといえ、それを傍証するものは何もない。加えて、阿波局にしてみれば、彼女は実朝の乳母であったわけ、実朝に危害を加えることに賛同するはずはない。

したがって、実朝と仲章、セツトでの暗殺計画という想定は、あまり現実的とは言えない。憶測を重ねれば、実朝を狙う公暁とお供の法師の中に仲章殺害の密命を受けた刺客が紛れ込んでおり、公暁と刺客それぞれが自己の目的を達成した別途二件の暗殺劇だったと推察できなくもない。したがって、公暁による実朝暗殺には黒幕の存在はなく、単独犯であったと結論付けたい。そしてそこに別方向からの源仲章殺害が引き続き起こったことにより、後の世に様々な仮説・疑惑・黒幕の存在の有無などが取りざたされるようになったと考えたい。

いずれにせよ、実朝が殺されたことにより、源家將軍の血筋は断

絶してしまった。これ以降、幕府には摂家將軍・宮將軍が登場することは周知のことである。因みに実朝は、「渡宋」を考えていたと言われている。そして義時や広元の反対を押し切って、唐船の建造を命じた痕跡がある。ただ、由比ガ浜で造られたその船は、海に浮かべることができなかったという。遠浅の由比ガ浜なので無理もないことではあるが、当時は事前に調べることはしなかったのであらう。

参考書籍
野口実『武家の棟梁源氏はなぜ滅んだのか』、細川重男『頼朝の武士団』、『鎌倉幕府抗争史』、呉座勇一『頼朝と義時』、坂井孝一『鎌倉殿と執権北条氏』



会員研究

二重構造モデル説は正しいのか？

木村 高久

1 はじめに

日本人の起源に関する学説のうち、形態学(注1)を基とする研究から平成3年に「二重構造モデル」という仮説が提唱され、現在定説となっているところである。

これに対し平成24年11月、DNA(デオキシリボ核酸)の解析からこの仮説を高い精度で証明する成果が報告された。

ところが、平成31年3月、同じDNAの解析を用いているが、この仮説は過ちであるとの真逆の見解が出されたのである。これは、如何に理解すべきであろうか。この点につき検証を試みるものである。

(注1) 生物の構造と形態に関する学問。主に生物の器官や組織の肉眼的・可視的な特徴を得る。(フリー百科事典から)

2 二重構造モデル説とは

(1) 平成3年(1991)に東京大学名誉教授で人類学者の埴原和郎氏が「二重構造モデル」日本人集団の形成に関わる「仮説」を発表した。この中で、日本列島には1万数千年前から東南アジア系の基層集団である縄文人が居住していた。

彼らは列島全体で同質の形質を有す縄文人であった。

そこへ、約3千年前頃大陸から北アジア系人(渡来弥生人)が稲作を携え北部九州などに渡来してきた。

やがて両者は九州・四国・本州とで混血化していった。

一方、日本列島の南北すなわち稲作が行われなかった北海道のアイヌ人と10世紀頃に農耕を導入した琉球人(沖縄人)には縄文系

が多く残り混血は少数であるという説である。

なお、埴原教授の二重構造モデル説発表に先立つ明治44年(1911)、ドイツ人のバルツ医師が形質(身体的特徴)の共通性からアイヌ人と琉球人は同系統(アイヌ沖縄同系説)であると主張していた。

(2) 形質から見た縄文人と弥生人
(ア) 容貌
(図1) 縄文人の男性



◎縄文人は顔の彫が深く、ゴツゴツしている。

(図2) 弥生人の男性



◎弥生人はのっぺりした面長
(図1および図2は「日本人の起源・洋泉社」から転写)

(イ) 身長等
身長は縄文人が平均男性158センチ、女性146センチである。これに対し弥生人は平均男性163センチ、女性152センチで縄文人より高身長である。

しかし、前腕や脛などが短く胴長短足であった。また四肢は頑丈でどっしりとした体形であったが、筋肉は縄文人が上回っていた。

(ウ) 外見等
縄文人は比較的多毛であり、二重瞼、巻き毛、耳垢が湿型である。これに対し弥生人は一重瞼、直毛で耳垢が乾型である。

3DNA・遺伝子等からの検証
従来の考古学、骨考古学、人類学などを基に「二重構造モデル説」が提唱された。しかし、今日ではDNA解析による二重構造モデル説の検証が複数行われている。よって、ここで、その成果について明らかにするものである。
(1) なお、具体的内容に入る前に遺伝子・DNA関連の基礎的な

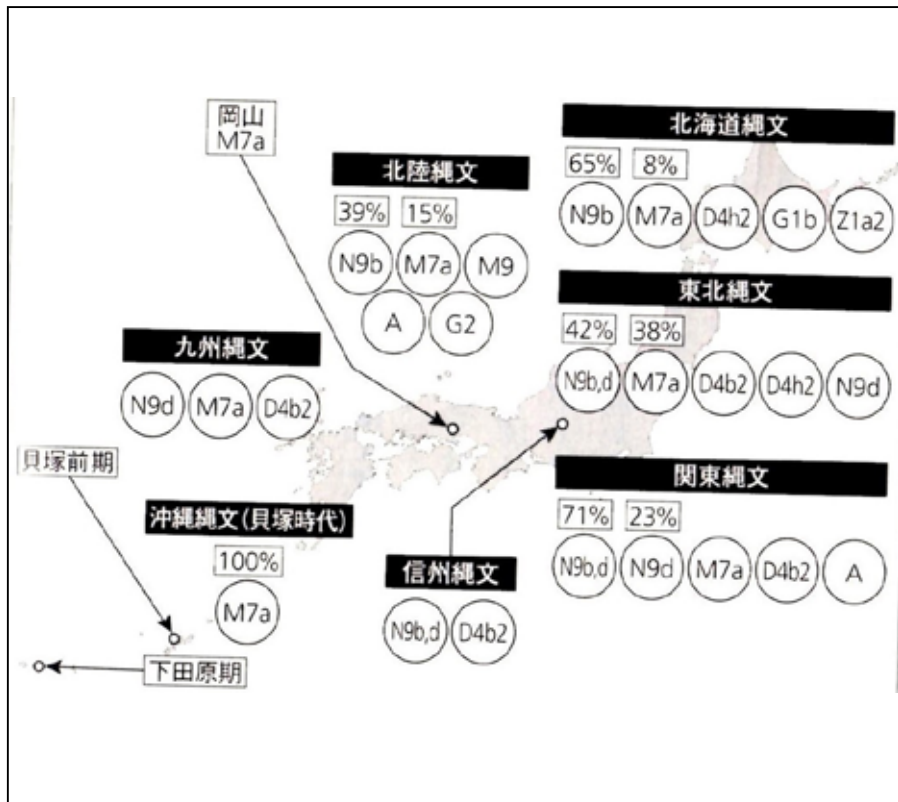


図3 各地域における縄文人のミトコンドリアDNAハプログループ

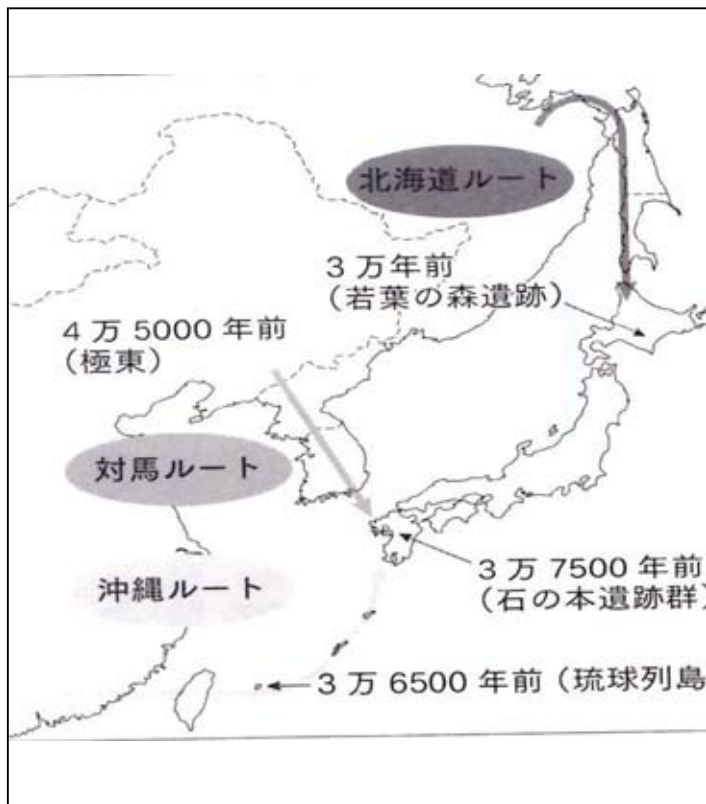


図4 旧石器時代の日本列島移住ルート

プログループ別に分類表示したものが図3である。

この図から見ると、各地域の縄文人のハプログループの種類、割合がまちまちである。例示すると沖縄縄文人はM7aが100%であるが関東・東北縄文人はN9b、

dが有力であり、また、北海道縄文人ではN9bが圧倒的である。このことから均一化した縄文人とはとても言えない。

この違いは旧石器時代に日本列島に移住してきた人々のルートが3通りあると述べる(図4)。

1つは「対馬ルート」である。熊本県の石の本遺跡群が約3万7500年前で日本最古のものである。

2つが「沖縄ルート」であり、最後に「北海道ルート」でユーラシア大陸から間宮海峡を経由して到達した。約3万年前の帯広若葉の森遺跡がある。以上の3つのルートからやって来たと考えられる。

南アジア系の基層集団である縄文人」との見解は誤りであると主張する。

第2は「アイヌ人と琉球人は縄文系が多く、本土日本人のように渡来弥生人との混血は少ない」また「アイヌ沖縄同系説」についてである。ここで、現代日本人の3地域別のミトコンドリアDNAハプログループ頻度比較(図5)を見よう。

◎ゲノムとは、ある生物が有している「遺伝情報の全体」を指す。人間の体は約37兆個の細胞から構成されているが、この中に核ゲノムが収まっているものである。

◎核(細胞核)とは細胞内にある細胞小器官の一つで、DNAやタンパク質を含んでいる。

◎ミトコンドリアDNA(mtDNA)は核内ではなく細胞内に存在する細胞内小器官の一つである。なお、ミトコンドリアDNAは母系のみで伝わることに特色がある。

◎人類集団が持つミトコンドリアDNAの多様性について最初の研究が行われたのはアメリカ先住民の集団であった。その結果、大別して4つのグループ(A~Dの記号)に分けられた。このグループをハプログループという。

Aが65%含まれているという。一方、アイヌ人と琉球人は一部共通性が見られ縄文人が共通の祖先であることは間違いない。しかし、各々特性の遺伝子があるという。

また、父系遺伝のY染色体上の「YAP」と言われる変異遺伝子によれば本土日本人と比較してアイヌ人と琉球人では比較的変異遺伝子の比率が高いと記述する。

第1は二重構造モデル説が述べらる「日本列島には1万数千年前に旧石器時代から東南アジア系の基層集団である縄文人が居住していた。そこへ約3千年前頃大陸から北アジア系人(渡来弥生人)が稲作を携え北部九州などに渡来してきた。やがて両者は九州・四国・本州などで混血化していった。」についてである。

その根拠としてDNA解析による結果を示す。全国の遺跡から発掘された縄文人の遺骨100体以上のミトコンドリアDNAのハ

(2) DNA・遺伝子解析からの諸説(ア説) 総合研究大学院大学の宝来聡氏が母系遺伝するミトコンドリアDNAを使用し、本土日本人、アイヌ人、琉球人(沖縄人)の三集団さらに韓国人、中国人を加えて調査を実施した。その結果、本土日本人はミトコンドリア遺伝子においてアイヌ人や琉球人に比して韓国人や中国人との共通性が多いことが判明した。渡来人のDN

(注2) 塩基とは、化学において酸と対になって働く物質のことである。

◎ある集団の1パーセント以上の塩基の変異をSNP(塩基多型)という。SNPは核ゲノムの集団比較に使用される。なお、SNPは両親から受け継ぐもので、ミトコンドリアDNAやY染色体とは異なる。

「YAP」と言われる変異遺伝子によれば本土日本人と比較してアイヌ人と琉球人では比較的変異遺伝子の比率が高いと記述する。

(2005年(平成17)発行「日本人の起源」中橋孝博著から)

以上の宝来氏の調査結果は「二重構造モデル説」は正しいことの裏付けとなっている。

(イ説) 次に、2012年(平成24)11月1日、東京大学や国立遺伝学研究所等で作られた研究チーム「日本列島人類集団遺伝学コンソーシアム」(以下、「遺伝学コンソーシアム」という。)が研究成果を発表した。

第1は二重構造モデル説が述べらる「日本列島には1万数千年前に旧石器時代から東南アジア系の基層集団である縄文人が居住していた。そこへ約3千年前頃大陸から北アジア系人(渡来弥生人)が稲作を携え北部九州などに渡来してきた。やがて両者は九州・四国・本州などで混血化していった。」についてである。

その根拠としてDNA解析による結果を示す。全国の遺跡から発掘された縄文人の遺骨100体以上のミトコンドリアDNAのハ

言葉の解説をしておくものとす。

◎遺伝子とは、生物の体をつくる設計図である。そしてこの設計図に書いている文字に該当するものがDNAという。なおDNAは4種類の塩基(注2)の連なりで出来ている化学物質で、遺伝子は情報である。

◎遺伝子を収納する入れものを染色体という。人には23種類の染色体がある。そして男女で22種類までは同じ染色体を持つているが、残りの1つは男女で異なる。女性はXXの染色体であるが、男性はXY染色体である。また、Y染色体は父系のみで伝わる。

また、父系遺伝のY染色体上の「YAP」と言われる変異遺伝子によれば本土日本人と比較してアイヌ人と琉球人では比較的変異遺伝子の比率が高いと記述する。

(2005年(平成17)発行「日本人の起源」中橋孝博著から)

以上の宝来氏の調査結果は「二重構造モデル説」は正しいことの裏付けとなっている。

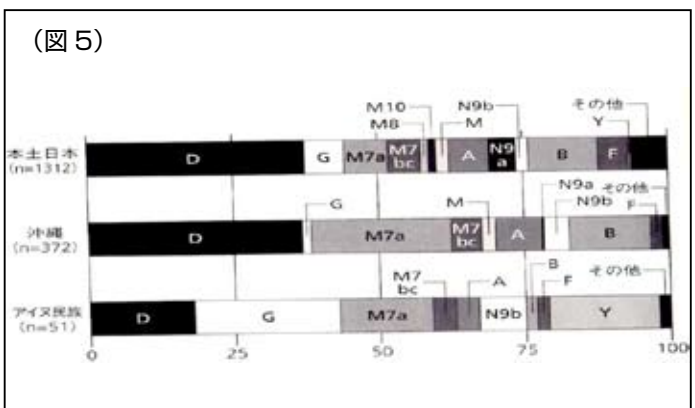
(イ説) 次に、2012年(平成24)11月1日、東京大学や国立遺伝学研究所等で作られた研究チーム「日本列島人類集団遺伝学コンソーシアム」(以下、「遺伝学コンソーシアム」という。)が研究成果を発表した。

第1は二重構造モデル説が述べらる「日本列島には1万数千年前に旧石器時代から東南アジア系の基層集団である縄文人が居住していた。そこへ約3千年前頃大陸から北アジア系人(渡来弥生人)が稲作を携え北部九州などに渡来してきた。やがて両者は九州・四国・本州などで混血化していった。」についてである。

その根拠としてDNA解析による結果を示す。全国の遺跡から発掘された縄文人の遺骨100体以上のミトコンドリアDNAのハ

本、沖縄、アイヌ民族のミトコンドリアDNA頻度は、それぞれ異なっている。

また、沖縄とアイヌ民族には類似性が少ない。どちらかというところ沖縄は本土日本人に類似の面が見られる。以上から、二重構造モデル説は、誤りであると記述している。「図3・図5は「新版 日本人になった祖先たち」から、図4は「気候変動と「日本人」20万年史」から転写」



4 結論

一点目として、先に二重構造モデル説に関するDNA解析の3例を記述した。即ち総合研究大学院大学の宝来聡氏と遺伝学コンソーシアムは二重構造モデル説が正しいといひ、一方篠田謙一氏は誤りであるとしている。何故、同じDNA解析による結果であるのに異なるのだろうか。思うに次のことが推定できる。

①正しい説か、間違い説のどちらか側の解析ミスが想定される。しかし、それぞれ専門家が慎重に取り組まれていると思われるのでその可能性は少ないであろう。

②DNA解析技術が年数の経過により進歩し、後になるに従いより精度が高まることが考えられる。なお、これによる差異かは不明である。

③一番可能性があるのは、検体の問題である。検体が発掘された時代、場所、数の多少により結果が異なるのではないだろうか。

以上を踏まえて、遺伝子・DNA専門家により再度の検証を願うものである。

二点目として篠田氏はDNA解析結果と異なるから二重構造モデル

ル説は誤りであると断言する。しかし、二重構造モデル説が説く「日本列島に縄文人が居住していた後に渡来弥生人がやってきて混血した。しかし琉球と北海道は渡来弥生人との混血が少なかった。また形質学からアイヌ人と琉球人が類似している。」は大要として正しいのではないか。考古学も裏付けている。確かに篠田氏が指摘したように、旧石器時代の日本列島移住を東南アジア系(沖縄)のみは誤りで、対馬、沖縄、北海道の3ルートから移住が正しいといえるが、枝部分の訂正である。

三点目は、本土日本人となる縄文人は同質の形質を有するとあるのは間違いだと篠田氏はいう。しかし、これは旧石器時代に3ルートから移住してきた人々が混血して縄文人になったが、DNAが同一になるまでの混血をしなかったからであるにすぎない(図3)。表現の修正は必要となる。四点目は形質学からアイヌ人と琉球人が類似していることに関して、DNAが異なる(図5)と篠田氏は指摘する。これについては、「遺伝学コンソーシアム」が言われるようにアイヌ人は北海道以北の民族と混血があること

と、沖縄が弥生時代の後の時代に本土日本人と交流があり混血したからではないか。

逆に篠田氏に要望したいのはアイヌ人と沖縄人のDNAが異なる(図5)にもかかわらず、何故形質が類似しているのかを明示して欲しいと思うものである。

以上から「二重構造モデル説」はDNA解析の結果により一部修正は必要になったが大要としては正しいと考えるものである。

参考文献

- 1 「日本人はどこから来たか」樋口隆康著 講談社現代新書 1974・11・28発行
- 2 「日本人の起源」中橋孝博著 講談社選書メチエ 2005・01・10発行
- 3 「新版日本人になった祖先たち」篠田謙一著 NHKブックス 2019・03・20発行
- 4 「人類の起源」篠田謙一著 中公新書 2022・03・30発行
- 5 「気候変動と日本人20万年史」川幡穂高著 岩波書店 2022・04・13発行
- 6 「日本人の起源 縄文・弥生の世界」本多秀臣編集長 洋泉社 2018・07・05発行

エッセイ

清少納言VS行成 〜和歌の力量〜

山本 修司

はじめに

今から千年ほど前の同時期に大活躍した二人の偉大な文化人、清少納言と藤原行成を「和歌」という同じ土俵にのせてその力量はどちらが上であったのかを僭越ながら私見を交えて判定させていただいた。

894年、菅原道真の提案もあり、遣唐使の派遣が中止された。わが国ではそれまで受け入れていた大陸文化を踏まえ、日本人の人情・嗜好が加味され、かな文字が誕生していった。カタカナやひらがなである。

カタカナは仏教の経典の文字を翻訳するために漢字を簡略化したもので、主に男性が使った。

続いて漢字を草書体にしてさらにぐじやぐじやにしたひらがなが誕生した。

ひらがなは主に女性が使った。

『源氏物語』や『枕草子』をはじめめとした平安文学の誕生である。

このようにして、10〜11世紀に国風文化が開いた。

また、漢字、カタカナ、ひらがなを駆使して「和様の書」が成立していき、わが国独特の微妙な感情表現がなされていったのである。

この和様の書の成立は和歌の発展でなされていったと言っても過言ではない。

仮名で書かれた醍醐天皇の勅命による最初の勅撰和歌集『古今和歌集』が紀貫之らによって選ばれ、国風文化の開花によって風流なやりとりを和歌で行うことが多くなった。

同時に書道も発展した。唐の書風を日本に持ち帰り、日本書道の礎を築いたのが9世紀に活躍した三筆(空海・嵯峨天皇・橘逸勢)であり、この三人はほぼ同時期に活動した。

そして仮名が誕生したのちの書家で日本書道の大家とされるのが三蹟(小野道風・藤原佐里・藤原行

成)であり、それぞれ野跡(やせき)・佐跡(させき)・権跡(行成は権代納言)である。

三蹟は活躍年代に数十年の開きがあり、和様の書が順調に発展し、継承されていった。

清少納言

清少納言は父の歌人・清原元輔から和歌や漢文(史記、白氏文集、白楽天など)を学び、深い教養を身につけた。名前の清は清原氏を意味するとされている。このような恵まれた環境下で成人し、陸奥守橘則光と結婚し、則長をもうけたが、離別し、993年に一条天皇の皇后・定子(ていし)のもとに出仕し、女房生活を送った。定子には30〜40名の才知ある女房がいたという。

清少納言はその一人で1000年まで定子の女房となっていた。清少納言の『枕草子』は300段程度のエッセイ集であるが、鴨長明の『方丈記』兼好法師の『徒然草』と並び、日本三大随筆とされている。

春はあけぼの、やうやう白くなりゆく山際すこしあかりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる…で

始まる文章は極めて著明である。

多数の才媛に交じて才能を発揮し、藤原実方(きねかた)・同公任(きんとう)・同斉信(ただのぶ)・同行成(ゆきなり)らと交流する日々を過ごしたが、定子の父の道隆が没して政権は道長に移動し、さらに定子の兄弟の伊周(これちか)・隆家(たかいえ)が大宰権帥・出雲権守に左遷させられる事件(長徳の変)が起こり、清少納言も私邸に籠居した。その間に『枕草子』の初稿を執筆して人々の賞賛を博したようである。

『枕草子』は再出仕後に増補されるが、現存本の完成は、定子が1000年(長保2年)に崩御したのちのことである。

『枕草子』は皇后・定子のめたさを賛美し、自己の観察した世界を記している。彰子サロンの赤染衛門(あかぞめえもん)や和泉式部ら女流歌人とも交流し、その明るい人柄は多数の人々から敬愛された。歌集に『清少納言集』がある。

当時、定子に仕える女房たちは、定子サロンといわれる文化サロンを形成していた。聡明な定子と才気あふれる清少納言は、すぐさま意気投合し、主従を超えた絆が生ま

れていた。清少納言は、定子のことを心から尊敬し心酔しており、定子が何を言っても、何を食べても、何をしても、そのことが素晴らしいと思っていた。

一条天皇もまた、4歳年上の姉さん女房、定子の教養と気品を受け入れており、素晴らしい文学青年であったようである。二人の仲は本当に良く、理想の夫婦だと清少納言は記している。

知的で愛に満ちた宮廷生活。やがて清少納言は、その輝くような日々を書き綴るようになる。これが『枕草子』になる。しかし、幸せな暮らしは長くは続かなかった。

995年（長徳元年）、定子の父であり天皇の補佐役（関白）を勤めていた藤原道隆が病に倒れる。

後継者を巡る争いの末、実権は道隆の弟である道長へと移行する。

そして権力を得た道長は、わずか12歳の自分の娘・彰子を一条天皇の後（きさき）として送り込んだ。これにより、一人の天皇が二人の後を持つ（一帝二后）ことになり、前代未聞の異常事態となった。

道長の狙いは、摂関政治だった。当時の有力貴族・藤原氏は、娘を

天皇に嫁がせ男の子を産ませることとに血道を上げていた。そうすれば、自らはやがて天皇の外祖父となり後見役の摂政や関白として絶大な権力を振るうことができるからである。

彰子が一条天皇の子を産むこと、それこそが道長の野望だった。だが、彰子は天皇より8歳年下の12歳の子供である。権力者である道長の手前、彰子に会いに行く一条天皇だったが退屈を持て余し、すぐに定子の元へ帰っていったという。一条天皇が愛したのは、定子ただ一人だったのだ。

999年（長保元年）、定子が待望の男の子を産む。一条天皇の一人途な愛は、定子が翌年世を去った後も変わることはなかった。

道長は天皇を我が娘に振り向かせるために奇策を講じる。彰子の女房として当時、『源氏物語』が話題となり始めていた才女・紫式部を迎え入れることにしたのだ。

定子の周りに清少納言がいたように、彰子の周りにも知的な女房を雇い入れて一条天皇を振り向かせようとしたのだ。清少納言と紫式部はこうしてライバルとなった。

清少納言と紫式部の背後には、

意見具申・説得役となっていた。

998年（長徳4年）に右大臣に昇格し、『権記』に「時に年27。年末だ30に及ばずして大弁に任ずるは、貞信公（藤原忠平）21、八将（藤原保忠）年25のみなり。」と誇らしげに記している。

一条天皇の蔵人頭としての行成の主な成果については別載の「藤原彰子」に記載した。

すなわち、

『史上初の一帝二后の実現』
『定子の遺児で一条天皇の長男・敦康（あつやす）親王の母親代わりとして彰子を指名』

『一条天皇崩御時に第一皇子の敦康親王ではなく彰子の生んだ第二皇子の敦成（あつひら）親王を春宮とする』等々である。

これらの行成の活躍に道長は「行成が蔵人頭として仕えるようになって以来、折に触れて自分のために取り計らっていてくれ、その厚い恩の深さを知った。行成については、お互いに子の代になっても必ずこの恩に報い、兄弟のように親しくするように言い含めておく」と感謝の言葉を述べているのである。

一条天皇からの信頼も厚く、「顧問の職（蔵人頭）を避くと雖も、

生臭い権力闘争があったのだ。世継ぎを巡る史上空前の文学バトルである。

定子の亡くなった後にも、『枕草子』は書き続けられており、その中には定子の生前の素晴らしい姿が書かれていた。それを次から次へと清少納言が書き、貴族社会にバラ撒いていったのである。

そうすることで、貴族社会も一条天皇も定子のことを忘れることができなくなる。このようにして『枕草子』は定子の生前の姿を永久保存したのである。

藤原行成

行成は972年（天祿3年）、右少将・藤原義孝の長男として生まれ、祖父の摂政・藤原伊尹（これちか）の猶子となる。祖父と父の逝去後は外祖父・源保光の庇護を受けて成長した。源保光は漢学に造詣が深く、この学問や知識をもって行成に十分な教育を施したと推定される。

行成は、能書家であり、その書は後世、「権蹟」（ごんせき）と称されて、前述した三蹟の一人に数えられる。

行成は三蹟の先輩、小野道風に

の内裏参入の儀のみに参加している。

道長外孫の後一条天皇の即位式の時は諸事を行成らが定めたが、自ら筆を執って式の作法や過去の記録の抄出を行い、道長を感動させている。

1017年（長和6年）、道長が摂政左大臣を辞し、長男の頼通が摂政となるが、これ以降の行成は頼通の側近的な立場となったとみられる。

行成は1027年（万寿4年）正月より体調を崩し、12月1日に隠所に向かう途中で突然倒れ、4日に逝去した。享年56歳。

全くの同日、道長は寅刻（午前3時〜5時頃）、行成は亥刻（午後9時〜11時頃）に没した。

行政官としての行成は道長に捧げた人生であったと言っても過言ではない。

行成の著作としては、詳細を極める日記『権記』が著名で、平安中期の政情・貴族の日常を記録したことで重要視される。

また、庶務に通じていた行成は有職故実書『新撰年中行事』を著した。

勅撰歌人としても、後述のとおり

私淑し、その遺墨にも道風の影響があるといわれている。道風への追慕の情はかなり強かつたらしく、行成は『権記』に「夢の中で道風に会い、書法を授けられた」と感激して記している。

行成の書風は道風や佐理よりも和様化がさらに進んだ優雅なものであり、行成は和様書道の確立に尽力した。そして世尊寺流の宗家として、また上代様の完成者として評価されている。

行成は行政官としても傑出した能力を発揮した。

従兄弟が花山天皇として即位すると、985年（寛和元年）、侍従に任ぜられるが翌年、右大臣・藤原兼家の策謀により花山天皇は讓位・出家してしまい（寛和の変）、行成は外戚の地位を失ってしまった。

しかし、行成が積み重ねてきた真面目な努力が、一条天皇（在位986〜1011年）をはじめ人々の認めるところとなり、995年（長徳元年）には一条天皇の蔵人頭に任ぜられる。

蔵人頭は天皇の秘書官長的存在であり、天皇・摂関・上皇・母后などの根回し役を果たし、時には

り9首が採録されている。

清少納言と行成

一条天皇の蔵人頭・行成が皇后・定子に連絡を取る時にはいつも清少納言を中継ぎ役としていた。清少納言は、行成より6歳ほど年上であり、そんな彼女に甘える部分もあったようである。

清少納言は主人の定子からは「和歌を詠まなくてもいい」という許可をもらい、行成も和歌の不得手を公言していたので、実は二人とも本当は和歌を避けていた節を感じる。

そうは言いながら、清少納言は、中古三十六歌仙の一人とされ、歌集『清少納言集』を残している。また、行成も勅撰集に9首を残している（後拾遺和歌集・新勅撰和歌集・続古今和歌集・続古今和歌集・玉葉和歌集に2首・風雅和歌集・新千載和歌集・新拾遺和歌集）。

清少納言と行成の微妙な関係が描き出されたのが次に述べる『枕草子』のエピソード「鶏のそら音」である。

鶏のそら音

ある夜、清少納言の元で雑談を終えた行成は、その翌朝、清少納言に手紙を届ける。

「名残惜しかった。徹夜で話したかったのに、鶏の鳴き声にせきたてられてしまった」。

まさに「後朝の文」（きぬぎぬのみみ）である。一晚共に過ごした恋人が翌朝に送る手紙であるが、これに清少納言は和歌で応酬した。
夜をこめて鶏のそら音ははかるとも世に逢坂の関は許さじ

（夜が明けないのに鶏の嘘鳴きには騙されないわよ。私の恋の関には厳しい門番がいるのですからね）
この鶏のそら音とは、『史記』の孟嘗君のエピソード（夜明けになったら開く函谷関を鶏の鳴き真似で夜明け前に開けさせたという逸話）を取り入れたものである。

それに対して行成の返歌は、逢坂はひと越えやすき関なれば鶏鳴かぬにもあけてまつとか（君の関は通行自由です。鶏の鳴き声なんて関係なくいつでも開けて待っているでしょ）
誠にダイレクトで、酷い歌を返してしまっただけです。
この行成の歌に清少納言はさら

る返歌はしなかったのである（尻軽女と思われた？）。

この清少納言の和歌「鶏のそら音」は、後に殿上人に広められ、彼女の和歌での名を高めたのである。

一方、行成の出来の悪い歌は、『枕草子』に全て記録されてしまい、さらに、鎌倉時代になって、藤原定家が京都・小倉山の山荘で選んだとされる『小倉百人一首』に採用された彼女の歌に引きずられて後世にまでしっかりと残ってしまったのである。

この和歌のやりとりを見る限り、行成は当時から著明な能書家ではあったが和歌の腕前は清少納言より下であると断じざるを得ない。
能書家・行成のエピソード
和歌での実力は別として、言うまでもなく能書家・行政官としての行成の実力は傑出していた。

行成の能書家としてのエピソードのいくつかを以下に紹介する。
・一条天皇は行成の明文・名筆の申文を秘藏したかったらしく、彰子立后時の申文を書写して献上するように勅している。
・道長から行成が『往生要集』

を借用した際に、「原本は差し上げるので、あなたが写本したものを戴けないか」と言われたという。
「鶏のそら音」での行成の最初の手紙は僧都（そうず）の君（出家している定子の弟）が土下座までして持っていた。

・その次の手紙（逢坂はひと越えやすき・）は清少納言が「書のお手本」として定子に献上した。
おわりに
近年、日本は男女の格差が大きく、いわゆるジェンダーギャップ指数というものの順位で、世界的に極めて低い位置にあります。
しかし、かつて、文化の世界では女性が男性を凌駕した時代がありました。

平安時代の藤原文化が花開いた時代であります。
確かな記録に基づいてその実例の一つとして当時から超一流と評価されて続けている『枕草子』の清少納言と『三蹟』の一人で日本書道の確立者とさえ言われている能書家の藤原行成の二人を共通の和歌という土俵に載せて紹介させていただきます。
改めて、千年も前の出来事が現

在でも手に取るように理解できるわが国の歴史・文化の驚異的な継続性に深い感動を覚え、自分がこのような国に生をうけた幸せを感じるのであります。
(以上)

主なる参考文献

- ・撰関政治と王朝貴族 倉本一宏 吉川弘文館 2000
- ・人物叢書 藤原行成 黒坂伸夫 吉川弘文館 1994
- ・藤原彰子の文化圏と文学世界 桜井宏徳、中西智子、福家俊幸 編 武蔵野書院 2018
- ・枕草子 面堂かずき 集英社 2006
- ・ウィキペディア



エッセイ

紙の本をタダで出す 自費出版に革命！

長田 格

自分の本を出版するのは長い間、筆者の夢であった。しかし、高額な費用やトラブルの多さ（*）などから、二の足を踏み、電子出版で我慢してきた。それが昨年（二〇二二）秋、簡単に無料で出せるようになった。革命である。

このニュースを知り、すでに発行済の電子出版十二冊と同じ内容の紙の本を出そうと、本年一月に作業を始めた。最初の一冊は、試行錯誤により二週間かかったが、それでコツをつかみ、残りの十一冊を十日で出版できた。夢がかなったのだ。その紹介を行う。

1. 概要

アマゾンのKindleを使う。電子

出版専用のプラットフォームであったが、容易に、そして無料で紙の本も出版できるように変わったのだ。無論、印刷の原価と手数料は取られるものの、持ち出しとなる費用は一切ない。その意味で無料である。

電子出版に興味がない方は、いきなり紙の本を出すことも可能である。ただ、電子出版と紙の本を出す過程は九割が共通で、異なるのは「レイアウト」と「表紙」の二点だけである。このため、まず電子出版を行い、次に紙の本を出すのがいい。実際慣れれば、電子出版済みの本一冊を、紙で出版するまで「数時間」の作業量である。

以下、自分で本を出すことの簡単な整理をし、具体的な出版方法について記述する。

2. 出版方法の整理

自分で本を出す自費出版の方法として、出版社を利用する（以下、会社出版）、電子出版、そして今回可能になったアマゾンによる紙出版（以下、紙出版）がある。これらを各種の観点から比較すると次のようである。
会社出版は出版社の手厚いサ

ポートにより、楽にできるはずで、満足度も高いであろうが、なんといつても費用の問題が大きい。数十万円ですめば安い方であろう。電子出版は手軽ではあるが、読者が広がらないという問題がある。紙出版は、一番問題が少なく、満足度が高い。何より、自分の手元に自分の本が低コストで入手できるのが嬉しい。

出版における各過程を自分で行うのか、出版社側が行うのかを示すと、表のようである。

会社出版と、電子出版・紙出版の違いは、編集（校正）からレイアウト、装丁（表紙作成）を自分で行うのかどうか、という点である。見栄えについてある程度の妥協は必要だが、普通にワードとパワーポイント（以下、パワポ）が使用できれば問題ない。

以下、電子出版と紙出版に分けて、各過程を実際にどう行うか説明する。共通の事項は電子出版の

自費出版	企画	取材	執筆	編集	レイアウト	装丁	印刷	配送	拡販
会社出版	著者	著者	著者	会社	会社	会社	会社	会社	両者
電子出版	著者	著者	著者	著者	著者	著者	一	会社	両者
紙出版	著者	著者	著者	著者	著者	著者	会社	会社	両者

項で説明する。企画・取材については省略する。

以降の例で用いているのは、筆者の『「おくのほそ道」を歩く その2』（以下『おく』）である。

3. 電子出版

(1) 執筆・レイアウト

ワードを使用して普通に文章を書く。それだけである。ただし、以下の三点が必要である。

- ・レイアウトは意識しない
電子出版は、各種の画面サイズの機器（携帯電話やパソコン）に表示させるため、自動的に、画面が再構成される。したがって、一行の文字数などは意味がない。文章の身を考えながら執筆する意味でも、最初はレイアウトを意識しないで書いた方がいい。筆者は基本的にワードのデフォルトの設定のまま書いている。
- ・スタイルと目次機能を使用
電子出版では「ページ」が意味をなさない。このため、手作業で目次を作成しても意味がない。ワードに自動的に目次を作成させれば、電子出版形式ではリンクに変換される。このため文章中で表題部分には、スタイルを付与し、目

次を自動生成させる。

スタイルは、「ホーム」タブの中の右上にある。表題の部分にカーソルを置き、付与するスタイルを選ぶ。筆者は、章に「見出し1」、節に「見出し2」、項目に「見出し3」を選び、この三つだけで済ませている。

目次生成は、「参考資料」タブの左上にあるボタンを押すだけで自動的に行われる。以降、文書を更新するたびに、生成された目次のところの更新ボタンを押せば、自動的に文字列もページ番号も更新される。非常に便利で、電子出版と関係なく、大きい文書を書く場合は必須の機能であろう。

写真や図はセンタリング
文章を図の横に置くことや、複数の図を並べることなどはできない。

図のワードの画面で説明すると、表題のところにカーソルがあり、スタイル欄の「見出し2」が四角で囲まれている。画面左はナビゲーションウィンドウで、見出しが階層的に表示されている。ここを使用して容易に目的の場所に飛ぶことができる。

最後に価格情報の入力である。この最初に指定するのが「KDPセレクト」への登録である。これに登録すると、読者がKindle Unlimitedのサービスを受けている場合、無料でこの本を読むことができる。ただ、著者にとってお金が全く入ってこないかというところではなく、「基金」なるものから、読まれたページ数に応じて分配金が支払われる。分かりにくいのが、基本的には登録した方がいい。なぜなら、ロイヤリティ率を高く設定できるからである。

販売地域の設定は必要がなければ、日本だけとする。ただ、海外にいる知人への販売を自論むなら、海外サイトでの販売も可能にする。筆者は、全世界で可能としているが、実際の売り上げはほとんどない。中国で販売できないのが痛い。

ロイヤリティ率、すなわち売り上げの何%が著者に還元されるかであるが、これはKDPセレクトに登録すれば70%を選べる。でなければ35%である。価格は99円から20000円の範囲で設定と画面にはでているが70%にした場合、250円から1250円の範囲となる。



(2) 編集・校正

自分で行わなければならない。ただ、ワードの「校閲」タブの中の「スペルチェックと文章校正」は役に立つ。助詞の入力ミスなどはほとんど指摘してくれる。しかし、同音異義語の入力ミスなどのチェックはできないことが多い。

もし興味を共にする友人がいれば、事前に査読してもらおうのもい

以上で設定は終了し、最後に画面右下の「出版」ボタンを押すと、アマゾンによる「審査」の局面となる。著作権関連のチェックをしていと言われるが、筆者はエラーとなったことはない。メッセージでは問題がなければ七十二時間以内に販売開始とあるが、筆者の経験ではほぼ一日で販売開始された。

(5) 拡販他

アマゾンで販売開始されたことを確認したら、まずは自分で購入して内容の確認をする。残念ながら著者であっても、無料で入手する術はない。

Kindルのサイトの中に、「著者ページ」があり、プロフィールを書き込むことができるので、これを入力する。販売当初「無料」とするような設定もできるが、筆者は行ったことはない。拡販としては、友人・親戚などへの口コミが中心である。

売上については、翌月の十五日頃に月単位の販売数、ロイヤリティ額のレポートが送られてくる。そして、待望(?)のお金がさらに翌月末に振り込まれる。

最後に税金についてであるが、種別としては雑所得である。収入総

い方法だが、問題は友人への送付方法である。大きな文書では、紙への印刷は大変だし、メールは容量制限で分割の必要がある。ファイル転送サービスを利用するのが良いだろう。

(3) 装丁

中身を書き終えたら、表紙を作成する。アマゾンの販売画面にできる顔である。
デザインスキルの低い筆者は、パワポに写真を入れるだけで済ませている。これだけで、まずまずの見栄えにはなる。写真は内容に合わせて一枚の時も複数枚の時もある。写真の説明は、「はじめに」に入れていく。



サイズは、2560×1600ドット固定で、パワポで作成後、JPE/Gを指定して保存する。
(4) 出版手続き

額から必要経費を引いた額が年間で二十万円を超えるなら確定申告が必要である。しかし、取材や資料の購入でかなり費用はかかったはずで、まず必要ないだろう。

(6) 改版

誤字・脱字を見つけたら、内容を修正したりする場合は、改版を行う。ただし、購入者に改版を届けることはできない。改版通知機能があるように案内されているが、「重大な誤り」があった時のみで、実際の適用はマレであろう。

内容を大幅に強化、見直しをする場合は、「別の本」として出版すればいい。その場合、以前の購入者ももう一度購入して入手することがができる。

4. 紙出版

さて、いよいよ紙出版であるが、執筆完了までは、電子出版と違いはない。レイアウトから異なる。

(1) レイアウト

アマゾンへの提出形式は、電子出版がワード文書であったのに対し、紙出版ではPDFである。このため、複雑なレイアウトができるDTPツールを使ってもいいが、ワードでもそれなりのレイアウトはでき

いよいよアマゾン・Kindルでの操作である。アマゾンのサイトの一番下にある「アマゾンで出版」を選ぶなどして、「Kindleダイレクト・パブリッシング」のサイトを開く。アマゾンのアカウントを使用してサインインできる。ただし、自分の銀行口座を指定する。売上の振込用である。米国税務者番号などの入力もあるが、米国で販売をしない限り無視してよい。

画面には「タイトルの新規作成」と大きくでている。三つのボタンが、左から「電子出版」、「漫画」、「ペーパーバック」と並んでいる。「電子出版」を選んで各種の情報を入力する。「詳細情報」「コンテンツ」「価格」の三つのタブがあり、順に入力し終わると、次を入力できる。

まず、「表題」など本の各種詳細情報を入力する。「概要」は、本の紹介画面に表示される重要なものなので十分考え、事前に文章を作成して、ここに貼り付けるといい。次に作成したワードの文書を選択してアップロードする。ここで自動的に電子出版の形式に変換されるので、数分はかかる。次に表紙の画像ファイルをアップロードする。

るし、それほど凝ったレイアウトは必要もないので、筆者はワードで済ませている。実際、筆者の出した多くの紙の本は、ワードのデフォルト設定からフォントを小さくし、行間を狭くしただけである。重要なのはただ一点、以下である。

・ページ数はできる限り少なく

これは、印刷にかかる料金がページ数依存だからである。あまり高くなってしまおうと購入してもらえない。なお、なぜか判型はコストに関係がない。できるだけ大きい判型を選んだ方がいい。最小は新書判、最大はA4である。

『おく』の場合は、標準のフォントを8ポにして、二段組にした。

ページサイズは、筆者の場合、出版時の判型はすべてA5とし、ワード上のサイズはA4としている。自動的に変換され、不都合はおきていない。特殊な判型にする場合は、ワード上のサイズも合わせておいた方が無難であろう。

なお、あまり使用することのない機能だが、オプションの「フォントの埋め込み」を指定しておくことが必要である。

(2) 装丁

表紙の作成が難関である。表だけでなく、裏と背表紙を含めた一枚の紙を作らなければならぬ。このため、「表紙計算ツール」が提供されている。

ツールの使用前に、判型、紙の質、モノクロ・カラーを決定する。これはサイズに関係する。

モノクロ・カラーは本文についてであり、表紙そのものは別である。本文をカラーにすると非常にコストが高くなる。計算式が公開されているが、大よそ2倍近くなる。モノクロ版とカラー版の両方をだすこともできる。

これらの情報やページ数を入力すると、表紙のひな型(PNG)が生成される。

このテンプレートと同じ大きさのパワポの一枚を作成し読み込む。背表紙と全体が赤く網掛けされているので、この部分にかからないよう、写真や文字を設定し、表紙を完成させる。薄い本の場合、背表紙の記入が大変で、場合によっては「なし」とする。最後にこのテンプレートを削除して、PDFで保存すれば完成である。

なお、裏表紙に価格を書きたいところだが、次項で説明する。

エッセイ

異界としての京都

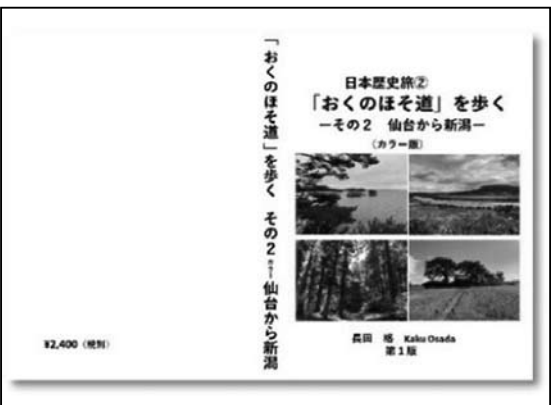
森 彩子

京都という町は、私にとって永い間、ただ通り過ぎる場所”に過ぎなかった。

千二百年の歴史を有する都であり、かつては政治・文化の中心であり、さまざまな文化財の宝庫であることは分かっているが、何故か、その華やかさ・みやびを人工的に感じる違和感が、京都から私を遠ざけていたのである。

以前より奈良が好きで、故郷に帰るような気持ちで奈良を訪れていた私は、天平の時が封印されているような奈良のおおらかさを愛していた。

ところが、大学のスクーリングの行き帰りに京都を散策し、寺社を訪ね歩くうち、京都に対する気持



(3) 出版手続き

電子出版同様、「詳細情報」「コンテンツ」「価格」の3つのタブで設定する。「詳細情報」は電子出版と同じでいい。

コンテンツタブでまず「無料のISBNの取得」を行う。その後、判型の指定などを行い、本文と表紙のアップロードを行う。各種のチェックが行われ、数分かかる。

次に「本のプレビュー」を行う。数分かかって本の全体が表示され、エラーがあれば指摘される。ここでは何度もエラーを経験している。主に、表紙のサイズが異なる(パ

ちに少しずつ変化が現れるようになっていった。京都を知れば知るほど、その歴史の重み、奥深さを感じるようになり、年に数回のスクーリング時には必ず京都巡りがスケジュールリングされるようになった。

今風に言えば、「仏ガール」(?)を自認していたわけだが、寺社巡りを続ける内に京都には別の顔が存在することに気づかされることとなった。千年単位で時を刻んでいると言われる京都には、神社・仏閣・原始的な杜が現代にそのまま残っている。

しかし、それ以外に時代の底に流れて今に続く、眼には見えない、あやしい、この世とは違う、論理的に説明のつかない世界、「異界」といふべきものが存在しているようなのだ。

京の都は条坊制によって築かれ、周囲に四神を配し鬼門に杜を建てるなど、陰陽五行説によって成り立っている。そして千年前の陰陽師たちの呪術や、怨霊や魍魎魍魎が今だに京都のあちこちに生きているのである。

その「異界」に興味を持ったのは、

ワポの操作ミス)、画像がマージン外にでている(画像が大きすぎる)などである。これらを修正して再アップロードし、問題がなくなれば右下にある「承認」ボタンを押すと印刷コストが表示される。

最後に価格設定である。電子版と異なり、ロイヤリティ率は60%固定である。ロイヤリティの中から印刷コストが支払われるので、それを考慮した価格設定が必要である。印刷コスト割れの価格設定はできない。簡単な方程式を解けば、印刷コストのちょうど倍に価格を設定すると、著者の取り分(ロイヤリティ)から印刷コストを引いた額)が一割となる。

『おく』の場合、コストは741円とされ、0.6で割ると1,235円であり、価格を1,600円とした。消費税は別である。一冊売れると、筆者に219円入ることになる。カラー版では、印刷コストが1,199円で、最低価格が1,999円、価格は2,400円とした。なお、あまりに高くなるので、行間を縮め、ページ数を少なくした。ちなみに同じ本の電子版の価格は1,200円で、筆者には840円入る。紙版の率が低い

ある博物館の特別展に展示されていた小野篁(おののたかむら)の木造彫刻を視たのがきっかけであった。



小野篁像(六道珍皇寺)

その像は等身大の大男で、その姿は衣冠束帯のいかにも高位の官人風であった。しかし、その風貌は冥府に出入りしていたという伝説を裏付けるような怪しさをまとうていた。私は、その眼を見た時、伝説はもしかして本当なのではないかと思った。その時、何故か背中がゾクツとしたのを今でも覚えている。普段は怨霊や地獄や陰陽道やパワースポットなどには全く関心のない私が、である。

小野篁

小野篁(802~852)は、嵯峨天皇に仕えた平安時代初期の官

が致し方ない。

価格設定が終わると、「校正刷り」の入手画面に飛ぶことができ。表紙に「再販禁止」という帯が入る以外は本物と変わらず、印刷コストのみの価格で5部まで購入できる。著者謹呈のシステムがないので、その代わりにアマゾン・プライムの優遇が利かず、送料がかかる。

最後に「出版」ボタンを押せば、電子版同様「七十二時間以内に販売開始」となるが、経験上ほぼ一日で販売開始される。出版後については、電子版と変わらない。

5. 最後に

以上、会報の分量の制限と、アマゾンの機能が進化途上であることから、基本的なポイントに絞って説明してきたが、PCを使いこなせている方には十分実践可能であろう。ぜひ、皆さんからの出版ラッシュを期待する。

また、会報のコストダウン・頻度増なども可能ではないだろうか。以上

*参考:『夢を売る男』百田尚樹 二〇一三 太田出版 自費出版を巡る戦い

僚で、武芸にも秀で、学者、詩人、歌人として知られている実在の人物である。

小倉百人一首には「参議篁」の名で、「わたの原 八十島かけて 漕ぎ出でぬと 人には告げよ 海人の釣舟」がみえる。官位は従三位という高官であり、身長は6尺2寸(188cm)の巨漢であったという。

この小野篁には奇怪な伝説があり、それは、「昼は朝廷の官人を務め、夜になると閻魔の庁の冥官として閻魔大王に仕えた役人であった」というものである。閻魔大王は、冥界の王として死者の生前の罪を裁く神であるが、一方、日本のお教においては地藏菩薩の化身としてこの世とあの世の「間」、地獄と極楽の「間」に居て人間界を守護しているとされている。



小倉百人一首

(国立国会図書館蔵)

六道珍皇寺

あの世とこの世を自在に往来した人物・小野篁は、京都東山にある六道珍皇寺の井戸から冥界へ通ったとされている。この寺は、建仁寺の南東、歩いて5分の所にある建仁寺の塔頭である。今なお、この寺の本堂背後の庭内には、篁が冥土へ通うのに使ったという井戸があり、近年旧境内より冥土から帰るのに使った「黄泉がえりの井戸」が発見された。そして、えんま堂には、篁作と言われる閻魔大王と篁の木造が並んで安置されている。



六道珍皇寺

六道珍皇寺の「六道」は、珍皇寺のある場所が「六道の辻」と呼ばれていることによる。

この辺り一帯は、鳥辺野（とりべの）と言う古くからの葬送地だった。亡くなった人を鳥辺野に葬る前に、最後のお別れをしたのが珍皇寺だった。この六道の辻を境に南は「あの世」（鳥辺野）で、北は「この世」になる。

この世と冥界の境ということによって二つの世界を往来したとされる小野篁の伝説とが結び付けられたのだろう。

篁と今昔物語

小野篁が死後ではなく、貴族として宮廷に出入りしていた時から閻魔大王の裁判の補佐をしていたという伝説は、『今昔物語』にはすでに載っているらしい。篁の謎は、当時から取り沙汰されていたようで、その他にも大江匡房の口述を筆記した「江談抄」などにもみえることから平安時代末期頃にはその伝説がすでに語り伝えられていたことがうかがえる。

鎌倉時代にかけての説話集にも紹介され、室町時代にはその伝説はほぼ定着したようである。

今昔物語集巻20第45話「小野篁、情によりて西三条の大臣を助けたる語」は、「今昔 小野の篁と云ひける人有り…」で始まる。

右大臣・藤原良相（よしすけ）（813〜867）が病に倒れて他界した時の話である。

なぜか蘇生した彼が言うには、「生前の罪を裁くという閻魔の庁に連れて行かれたが、そこで、閻魔大王の横に並ぶ篁の姿を見た」というものであった。

閻魔庁に篁が居ることを不思議に思う良相の前での篁と閻魔王との会話である。

篁：「この日本の大臣は心正しく人のためになる方です。今回のことは私に免じて許して下さい」
閻魔大王：「それは極めて難しいことだが、篁、お前がそう言うのであれば…」

そして、良相は間もなく生き返った。この物語には後日談がある。死を免れた良相がその後、篁に冥土でのことを密かに尋ねると、篁は微笑んで「以前、あなたに助けもらったことが嬉しくて、その想いを言ったまです。ただし、このことは他言無用ですよ！」
なんと、以前、良相が篁の窮地

を救ったことがあり、そのお返しに生き返らせてくれた、と言うのである。

三大葬送地

京都には、鳥辺野を含めて、化野（あだしの）、蓮台野（れんだいの）といわれる三大葬送地が平安時代から存在していたことはよく知られている。

葬送地の中でも一番規模の大きかったのが、東山の鳥辺野、嵐山の北にあるのが化野、船岡山の北西一帯が蓮台野と呼ばれた。鳥辺野は徒然草や源氏物語にも登場する。そして『京都名所案内図会』によれば、あの藤原道長（御堂関白）も親鸞聖人、源義朝もここで茶毘に付されている。

京都では、人が亡くなると遺体を野ざらしにしてあの世へ見送った。そのまま朽ちるに任せる風葬が主流で、遺体を鳥が啄んで処理するので「鳥葬」とも呼ばれた。身分の高い人は火葬だったが、火葬には木材が必要であり、庶民は最も経済的な風葬が一般的だった。

千本えんま堂（引接寺）

京都の中心を南北に走る千本通（昔の朱雀大路）は、蓮台野墓地へ通じる道で、「千本」という名は、墓地に立つ卒塔婆の数を表しているという。その千本通りには、快慶の「十大弟子像」や定慶の「六観音像」で有名な千本釈迦堂があるが、その北に、千本えんま堂（引接寺）（いんじょうじ）という寺がある。そこは、蓮台野の入口にあたる場所であり、大きな閻魔大王坐像がにらみを利かせている。「引接」は、仏が衆生を救い取って極楽へ導くことで、蓮台野の入口にふさわしい寺名と言える。この千本えんま堂も小野篁が開いたとされる寺である。



引接寺・賽の河原

このように、閻魔大王の冥官であった篁の話は、葬送地界限ではよく耳にする。そして、今でも篁の伝説は京都に住む人たちの日常に生きているのである。京都に住む友人の話では、小さい頃、悪いことをすると「ほらほら、篁はんが見てはるで！」と言われたという。

それは、「嘘を言うと閻魔様に舌を抜かれる！」よりも「子供心にも怖かった」とその友人は笑った。

さて、次は残る葬送地、化野を訪ねてみなければならぬ。どうとう、異界に足を踏み入れてしまったようだ。

(完)



追悼の辞

前常任理事 清水 漠^{ひろむ}さんを偲ぶ

熊本 修一

清水漠（ひろむ）さんは令和四年八月一日に逝去されました。享年七十八歳でした。

清水さんは会合では、「バクさん」と呼ばれ皆さんに親しまれていました。新人の私にも会員の方々のお名前、当会の規則・慣習等々親切に指導頂きました。大変感謝しています。

歴史研究では、甲斐・武田氏を主に研究していました。平成三十一年三月に研究発表「戦国氏三代目武田勝頼―その生涯、器量そして頼伝説―」は、長年武田氏を研究してきた纏めのようでした。

令和二年から旅行の担当となり令和三年のバスツアーは目的地を山梨・長野の「戦国武田氏のゆかり地めぐり」を計画されました。この実行に向け事前に下見しよう

と意気投合し、有志で計画行程を基に下見に行きましたね。

武田軍団に精通しているバクさんからゆかりの地でやさしく説明して頂きました。

武田神社（信玄ミュージアム）では最近の発掘調査で出た馬の骨格を見て、当時の騎馬軍団の馬はこんなに小さかったのか・・・と咳とバクさん曰く「乗る人間も小さかったんだよ」納得・・・

武田軍最後の城、新府城の山登りでは発掘調査中の現場に泥まみれになりながら見学しましたね。

高遠城の近くでの昼食に出た「高遠そば」の由来の説明を頂き勉強になりました。

諏訪湖畔のホテルでの温泉を浴びた後の地酒真澄の味忘れられませんでした。

下見までして準備したのに、新型

コロナの拡散で中止となり。残念でなりません。

翌令和四年は創立四十周年旅行を鹿児島に設定し計画していましたが、新型コロナウイルスでまた断念せざるをえませんでした

落ち着いたら、「もう一度山梨に行こうよ」と約束していました。約束を履行できず残念です。



新型コロナで例会が中止となりお会いする機会が無くなり、情報交換の名のもと関内の「とりろう」で昼飲み会をしましたね。二時に集合し、楽しかった思い出話に花を咲かせ五時に解散の会を毎月行っていました。

思えばバクさんとは数々の楽しい

ことが脳裏に浮かびます。

今年二月に「食欲がない・気力がない」と体調不調を訴えていたもので、総合病院で検査を勧めていました。

四月の例会に参加頂き、恒例の「とりろう」行きに参加しました。皆と飲むと少し食欲がでたよと言っていたので、少し安心していましたが、六月末にご子息から余命一ヶ月との連絡を頂き驚きよりショックでした。

病気に縁遠いと思われたバクさんがこんなに早く逝くなんて・・・

地酒の真澄をお持ちしますののでしばらくお待ち下さい。一緒に飲みましょう。

(78)

ご子息・お孫さん・ご家族思いの清水漠（バク）さん。

どうぞやすらかにやすみいただき、ご家族が安寧にお過ごしできるようお願い申し上げます。

心よりご冥福をお祈りいたします。

【合掌】

追悼の辞

上野みどりさんを偲ぶ

佐々木 文江

令和四年二月二十四日、上野みどりさんが逝去されました。享年七十四歳でした。

突然の訃報に接し、私は動転して言葉も出ませんでした。

二月二十八日にもみどりさんとお姉様の告別式が行われましたが、これ程つらく悲しいお式は初めてです。

式場にはお姉様とみどりさんのお二人の柩が並べられておりました。故人との別れの際に拝見した、みどりさんのお顔が優しくお綺麗で、旅に出るように思えたことが本当に良かったです。また大好きなお姉様と御一緒にご両親のもとに旅立たれたのですね。

横浜歴史研究会のお勉強会の時もみどりさんはスマホを握りしめていました。お姉様の具合があまり良くないので病院からいつ電話が入

るのか分からないのでこのことでした。

何回かそのようなことがございました。お姉様もお幸せですね。この様に優しい妹さんと最後まで一緒に出来たことは。

みどりちゃん（今までの様に、こう呼ばせていただきますね。）との出会いは、横浜歴史研究会でみどりちゃん（平成二十一年入会）と私（平成二十三年入会）がお会いしたことです。以後、仲良くさせていただきます。

昔の記憶なのでおぼろげな部分もありますが、確か平成二十五年四月の歴史散歩「根岸森林公園周辺の隠れた歴史を探訪」の出来事です。それは、中華街近辺のお寺の後方にあるお墓を見学していた時、みどりさんと私が同じ誕生日（四月十日）と分かり、同時に二

人で大きな声で叫びました。その時のことが大変懐かしく思い出されます。

その後お食事に行ったり、旅行にも何回か行きましたね。まだまだこれからも一緒に出来まస్తు思っておりますのに誠に残念です。

みどりさんとの楽しかった数々の思い出を大事にしてゆきたいと思えます。

余りにも急に旅立ってしまったみどりちゃん、ご主人様を一人にしまつてどれ程心配なされたことでしょうか。でも、ご主人様のことをそちらから沢山褒めてあげて下さい。

ご主人様にお話をお聞きしましたら家事は何も出来ないとおっしゃっていました。電子レンジ、洗濯機の使い方も分からなかったとのことでしたが、七か月後の今は日常の生活が出来るようになったとのこと。本当に努力の賜物だと思います。手抜きばかりしている私ですが、お聞きしていると何でも完璧です。私の方が見習わなければと思うくらいです。男の方は、いざという時何でも徹底的に

なきるのだと感心しております。

また、私がそちらに行きましたら楽しいお話を沢山しました。もう少し待っていて下さい。

安らかにお休み下さい。 合掌

福島県大内宿にて



(79)



福島県会津のお寺にて

横浜歴史研究会 四十年の足跡

平成二十九年 度

横浜歴史研究会は昭和五十八年十月三十日(日)、大町初代会長により「歴史研究会横浜支部」として発足いたしました。会場は中区山下町にありました駐労働会館で、会員数は三十六名でした。その後昭和六十二年一月に会名を「横浜歴史研究会」に改称いたしました。また、活動としましては、研究発表会、歴史散歩、歴史見学旅行、講演会さらに横歴はまよせなど幅広く開催しております。現在の会員数は約百五十名です。

なお、創立三十五周年記念誌「壮志」では平成二十八年十二月までの本会の実績を掲載しておりますので、本誌では平成二十九年一月から令和三年十二月までの五年間の実績を載せるものです。今後の参考として頂ければ幸いです。

2/5 (日)	1/10(火)	月日
研究発表会(3名) *坂本花子氏 「モンゴル草原の風景(4)」 *蛭田喬樹氏 「日本書紀」 *堀江洋之氏 「日米親善に貢献した荒川の五色桜物語」シンドモア桜と横浜	定期総会 於「横浜市開港記念会館」 新春発表会(1名) *竹村紘一氏 「鎮西随一の勇将立花宗茂の不屈の生涯」 新年祝賀会 於「ホテル横浜ガーデン」	行事(☆は初回発表者)

5/23(火)～25(木)	5/2(火)	4/23(日)	4/1(土)	3/2(木)	月日
創立35周年記念旅行 「北陸路に栄華の足跡と幽玄の里を探る」 (参加者数35名)	研究発表会(3名) ☆桐山有節氏 「犬山城をめぐる攻防」 *北村邦明氏 「東寺百合文書の売券に見る土地の売買」 *間淵二三夫氏 「日本書紀の道教」	春の歴史散歩 「戦国の小田原城を訪ねる」 (参加者数68名)	研究発表会(2名) *長尾正和氏 「古代わが国の形成過程」 最近の研究から *清水 漢氏 「国号「日本国」の誕生を考える」	研究発表会(3名) *遠藤容弘氏 「古代の国の名と地名について」 *斎木敏夫氏 「空海と東寺の仏像」 *山本修司氏 「大塔の宮護良親王」 宮將軍奉殺伝説	行事(☆は初回発表者)

8/19(土)	8/2(火)	7/8(土)	6/4(日)	月日
ことも歴史教室(2名) 於「横浜市開港記念会館」 テーマ「昔の人々のくらし」 *木村高久氏 「縄文人のくらし」 *高尾 隆氏 「江戸のくらし・時間と旅」 (参加者数37名)	役員研修会 「上期活動のまとめ、下期活動計画の討議」	研究発表会(3名) *前出郁子氏 「干利休」 *村島秀次氏 「日本最初のみやこ」 「藤原京のモデルは何処か」 *木村高久氏 「正倉院文書から見えるもの」	研究発表会(3名) *大瀬克博氏 「肥後の猛婦・矢嶋楯子」 女子学院初代院長 *大岩 泰氏 「二宮尊徳の実像と後世に伝えたもの」 *竹内章二氏 「藤原不比等とその一族の攻略」	行事(☆は初回発表者)

11/4(土)	10/10(火)	9/18(月)	9/3(日)	月日
研究発表会(3名) *進藤洋輔氏 「ヒトラーを招き寄せたもの」 *春口健二氏 「民主主義の挫折」 *上野隆千氏 「神社研究(その5) 神社を中心に祈りと祭り」 「北条高時 敗者の言い分」	創立35周年記念 特別講演会と日本の伝統を築きむ集い於「横浜市開港記念会館」(参加者数 243名) ○特別講演 所功先生 「象徴天皇と高齢化社会の在り方」 ○伝統芸能 落語 古今亭菊太郎師匠 紙きり 林家二葉 ○端唄 永野桃勢一門	創立35周年記念式典・祝賀会 於「ホテル横浜ガーデン」(参加者数 100名)	研究発表会(3名) *瀬谷俊二郎氏 「江戸後期の三先生」 *古谷多聞氏 「聯合艦隊の勝因・露艦隊の敗因」 *天祐神助 *渡会裕一氏 「伊勢神宮における度会氏について」	行事(☆は初回発表者)

2/7(水)	1/9(火)	月日	12/1(金)	11/28(火)	月日
研究発表会(3名) *大瀬克博氏 「晩年の宮本武蔵と細川忠利」 *蛭田喬樹氏 「神武天皇即位紀元前660年ほどのように決められたか」 *堀江洋之氏 「神皇正統記誕生秘話をさぐる」	定期総会 於「横浜市開港記念会館」 新春発表会 *竹村紘一氏 「越前朝倉氏興亡録」 新年祝賀会 於「ホテル横浜ガーデン」	行事(☆は初回発表者)	研究発表会(3名) *西山達夫氏 「田沼意次の時代」 *宮下 元氏 「理想郷シャングリ・ラと現代中国」 *加藤導男氏 「清和源氏の真実」	役員研修会 「下期活動のまとめ 30年度総会・同活動計画の討議」	行事(☆は初回発表者)

平成三十年 度

5/6(日)	4/22(日)	4/8(日)	3/3(土)	月日
研究発表会(3名) ☆丸山雅子氏 「吾妻鑑に見る梶原景時追放の真相」 *宮下 元氏 「石器時代の日本とホモ・サピエンス」 *高尾 隆氏 「江戸庶民の憧れ・富士講」	歴史散歩 「谷中界隈に幕末・明治を偲ぶ」 (参加者数46名)	研究発表会(2名) *中島賢治氏 「江戸の蔵書家狩谷掖斎とその時代」 *村島秀次氏 「2泊3日の邪馬台国ツアー」	研究発表会(3名) *齋木敏夫氏 「極楽浄土への憧れが具現化した九体阿弥陀堂」 *清水 漢氏 「甲斐武田氏親族(穴山氏の興亡)」 *木村高久氏 「在野考古学研究者の相沢忠洋とF氏から思うこと」	行事(☆は初回発表者)

8/4(土)	7/8(日)	6/4(月)	5/24(木)～/25(金)	月日
第2回ことも歴史教室 テーマ「関ヶ原の戦いと徳川家康」 於「波止場会館」 ☆東 瑞喜君 「関ヶ原の戦い」 ☆徳川家康人生の選択肢」 (参加者数 38名)	研究発表会(3名) ☆中村康男氏 「浮世絵でお江戸にタイムスリップ」 *北村邦明氏 「香取文書の売券から見える中世の東国」 *山本修司氏 「諸説あり「島原の乱」」	研究発表(1名) *加藤導男氏 「前九年・後三年の役奥州制覇の野望に失敗した源氏」 (埼玉城郭研究会) 「埼玉の城郭とその歴史」	一泊二日バスツアー 「水戸徳川家ゆかりの地を訪ねる」 (参加者数38名)	行事(☆は初回発表者)

11/4 (月)	10/12 (土)	10/6 (日)	9/2 (月)	8/6 (火)	月日
研究発表会 *高橋正一氏 「明智光秀を織田信長に 推挙した人物」 *進藤洋輔氏 「横浜水道道を探る」 *上野隆千氏 「明治の内務官僚・三島通庸 は鬼か」	伝統芸能を楽しむ集い ○第一回横歴はま寄席 於「横浜市鶴見公会堂」	研究発表会 *鈴木美恵子氏 「医聖・花岡青洲とは」 *寺田隆郎氏 「落語の種」 *大岩 泰氏 「仏教史から歴史を眺める (中世まで)」	研究発表会 *佐藤猛夫氏 「私の歩いた五街道(中山道 編)」 *瀬谷俊二郎氏 「江戸を吟味する」 *山本修司氏 「天誅組主将・中山忠光と その流転の血脈」	役員会 「上期レビューと 下期活動討議」	行 事 (☆は初回発表者)

11/5 (月)	10/13 (土)	10/1 (月)	9/2 (日)	8/21 (火)	月日
研究発表会(3名) *春口健二氏 「神社研究―その6 「古代の祈りと祭り」 *森岡 璋氏 「松陰日記を読む」―柳沢 吉保伝小机城を訪ねて」	第7回横歴落語会 *古今亭菊太郎師匠 *永野桃勢端唄の会 於「旅館松島」	☆竹内秀一氏 「神奈川の古代直線官道 について」 *吉田友雅氏 「武田信玄の大将として」 *榎 良生氏 「幕末・維新そして明治を 駆けた宇和島藩」	研究発表会 *瀬谷俊二郎氏 「第0次世界大戦 (日露戦争)」 *古谷多聞氏 「シベリア出兵(前編)」 *三齋行雄氏 「青い眼をした勤王の志士 アーネスト・サトウの果た した明治維新への役割」	役員研修	行 事 (☆は初回発表者)

1/8 (水)	月日	12/9 (月)	11/24 (日)	11/15 (金)	月日
定期総会 於「ホテル横浜ガーデン」 新春発表会 *竹村紘一氏 「幕末の重大事件・ 生麦事件」 新年祝賀会 於「ホテル横浜ガーデン」	行 事 (☆は初回発表者)	研究発表会 *吉田友雅氏 「武田家滅亡から学ぶ」 *西山達夫氏 「資本主義経済確立の先導 者 渋沢栄一に学ぶ」 *加藤導男氏 「坂上田村麻呂とは」	歴史散歩 「海洋日本の歴史の変遷と共に 歩んだ港町「浦賀」」 (参加者数46名)	役員会 「下期レビューと次年度計画 討議」	行 事 (☆は初回発表者)

1/8 (火)	月日	12/3 (月)	11/27 (火)	11/25 (土)	月日
定期総会 於「ホテル横浜ガーデン」 新春発表会 *竹村紘一氏 「天下の神器と期待されながら も早世した蒲生氏郷の生涯」 新年祝賀会 於「ホテル横浜ガーデン」	行 事 (☆は初回発表者)	研究発表会(3名) *西山達夫氏 「後編・田沼時代」について *植木静山氏 「日米・日英・日露和親条約 の対外的そして国内的な 影響について」 *上野隆千氏 「田中正造と足尾銅山鉅毒 事件」	役員研修会 「下期活動のまとめ・31年度 総会・同活動計画の討議」	秋季歴史散歩 「開港地横浜に行く」 (参加者数61名)	行 事 (☆は初回発表者)

9/6 (日)	8/1 (土)	3月～7月中止	2/2 (日)	月日
研究発表会(3名) *木村高久 「乙巳の変と大化の改新の 真相」 特別講演会 *西野博道氏 「西洋と日本の城―比較と 検証」	役員会 「上期レビューと 下期活動討議」	3月～7月 研究発表会 4月 歴史散歩 5月 バスツアー 右の事業は、新型コロナ 感染のため中止となる。	*研究発表会(3名) *真野信治氏 「細川藤孝 その謎の出自に 迫る」 *佐藤猛夫氏 「私の歩いた五街道(甲州街 道編)」 *堀江洋之氏 「童謡詩人・野口雨情と尊 王攘夷の系譜」	行 事 (☆は初回発表者)

4/21 (日)	4/7 (日)	3/3 (日)	2/6 (水)	月日
歴史散歩 「早稲田の杜から神田上水へ 春の庭園を巡る」 (参加者数43名)	研究発表会(3名) *近藤政次氏 「日記を読む・そして〇〇を 書く」 *高野賢彦氏 「武田信玄の死因と卒去地 を探る」 *高尾 隆氏 「富士講の祖 食行身縁に ついて」	研究発表会(3名) *大瀬克博氏 「日本最長の大名家・九州相 良藩」 *齋木敏夫氏 「飛鳥、白鳳時代の斑鳩の里」 *清水 漢氏 「戦国武田氏三代目・武田勝 頼そして勝頼伝説」	研究発表会(3名) *長尾正和氏 「大江広元と息子たち」 *蛭田喬樹氏 「日本は九州出身？」 *堀江洋之氏 「伝説に満ちた陰陽師(オシ ミヨウジ) 阿部清明の生涯」	行 事 (☆は初回発表者)

12/1 (火)	11/22 (日)	11/12 (木)	11/8 (日)	10/12 (月)	月日
研究発表会 *小林道子氏 「金印発見―志賀島の甚兵衛 は何処へ消えたのか」 *中村康男氏 「明治新政府、勢力闘争と 近代化の歩み」 *長尾正和氏 「元禄期の大大名、良将、善 将 悪将、悪将―「土芥寇讎記」	歴史散歩(中止) 「江戸文化の光と影―裏浅草 を歩く」は新型コロナ感染の ため中止となる。	役員会 「下期レビューと 次年度計画の討議」	研究発表会(3名) *長谷川憲司氏 「近代日本が生んだ世界的 細菌学者 野口英世の実像」 *齋木敏夫氏 「宇佐八幡と八幡神」 *高尾 隆氏 「間宮林蔵は善人か悪人か」	研究発表会(3名) *大瀬克博 「義和團事件の英雄・会津人」 *高野賢彦氏 「王を支えてきた大伴氏の最 期」 *清水 漢氏 「赤備え虎昌・昌景&直政・ 幸村」	行 事 (☆は初回発表者)

7/1 (月)	6/2 (日)	5/23 (木)～5/24 (金)	5/4 (土)	月日
研究発表会(2名) *真野信治氏 「チンギス・カン一族とその 系譜」 *古谷多聞 「シベリア出兵(後編)」	研究発表会(1名) *木村高久 「開国と横浜開港の真の 功労者は誰か」 特別講演会 *松尾 光先生 「ゴトバを創り、 話したように記す― 古代びとの挑戦」	1泊2日バスツアー 「辛酸と忍耐 若き日の 家康をたどる遠江の旅」 (参加者数43名)	研究発表会(3名) *中村康男氏 「浮世絵から歴代市川團十郎 の特徴と日本の伝統芸能を 垣間見る」 *村島秀次氏 「倭の五王と前方後円墳ツアー」 *宮下 元氏 「縄文文化の疑問と概説」	行 事 (☆は初回発表者)

令和三年度

月日	行事 (☆は初回発表者)
1/11 (月)	定期総会 於「横浜市開港記念会館」 新春講演会 (新型コロナウイルス感染のため延期)
2月～5月	2月・3月研究発表会中止 4月 歴史散歩中止 5月 バスツアー中止 (新型コロナウイルス感染のため中止)
4/4 (日)	研究発表会 (1名) *忌部 守氏 「日本書記1301年と平城京ツアー」 特別講演会 *柴 裕之氏 「山崎合戦の性格―本能寺の変後の主導権争い」 (参加者数94名)
5/1 (土)	研究発表会 (新型コロナウイルス感染のため中止)
6/12 (土)	研究発表会 (3名) ☆林 久幸氏 「後北条氏五代とその後の小田原城」 *粟 光行氏 「聖徳太子 その系譜と業績」 *槇 良生氏 「平民宰相 原敬の生涯」 (参加者数81名)

月日	行事 (☆は初回発表者)
7/3 (土)	研究発表会 (3名) *瀬谷俊二郎 「膨張の70年 (PART1)」 *森岡 璋氏 「五代將軍綱吉と柳沢吉保」 *古谷多聞氏 (参加者数58名)
8/14 (土)	上期役員会 「上期レビュー」と下期活動討議」
8月～9月	研究発表会 (8月、9月研究発表会は新型コロナウイルス感染のため中止)
10/2 (土)	研究発表会 (3名) *植木静山氏 「幕末、サムライ達の「北方領土交渉」」 ☆遠田千代吉氏 「二上山に偲ぶ 大津皇子山頂墓」 ☆武田収功氏 「水銀の道 飛鳥池工房遺跡の出土品」 (参加者数68名) 永年会員顕彰 (市川康夫氏・佐藤好子氏)

月日	行事 (☆は初回発表者)
10/24 (日)	横歴はま寄席 於「横浜市開港記念会館」 (参加者数227名)
11/9 (火)	研究発表会 (3名) ☆森 彩子氏 「開港横浜で生まれた 仏蘭西瓦」 *高橋正一氏 「翁草」著者自筆原本 (二部他筆) の再発見について *加藤導男氏 「悲運の比企一族と陰謀の北条一族を検証する」 (参加者数79名)
11/23 (火)	秋の歴史散歩 (新型コロナウイルス感染のため中止)
12/7 (火)	研究発表会 (3名) ☆高田 茂氏 「七支刀と四世紀の倭国」 *真野信治氏 「鎌倉殿のおじいさん源為義の虚像と実像」 *木村高久 「邪馬台国畿内説は正しいか？」 永年会員顕彰 (安藤綾信氏)

創立四十周年記念行事実行委員会

- 委員長 木村高久会長
- 副委員長 加藤導男名誉会長
上野隆千副会長・熊本修一副会长・高尾隆副会長
- 委員 委員長・副委員長を除く役員
- 記念式典・祝賀会部会
部会長 上野隆千副会長
副部会長 村島秀次事務局長
主任 竹内章二常任理事
- 記念講演会等部会
部会長 村島秀次事務局長
副部会長 橋本 誠事務局次長
顧問 高尾 隆副会長
- 記念旅行部会
部会長 熊本修一副会长
副部会長 清水 漠常任理事
- 記念誌発行部会
部会長 山本修司常任理事
副部会長 高島 治常任理事
佐藤猛夫理事
- 財務・会計部会
部会長 熊本修一副会长
副部会長 石井昭徳会計
- 広報部会
部会長 竹内章二常任理事
副部会長 雨宮美千代理事
- 各部会委員
藤盛詔子常任理事・
宮崎世理事・武中正文理事・
真野信治理事・小林道子事・
牛山真弓理事・高田 茂事・
中澤静雄監事・宮下 二元監事

研究発表の概要
(令和3年10月～
令和4年9月)

なおこの期間に於いて、令和4年2月と3月の例会は、新型コロナウイルスの蔓延拡大を防止するための「まん延防止等重点措置」適用に伴い中止となりました。

*令和3年10月2日(土) 例会開催。会場は横浜市開港記念会館講堂。発表者3名、参加者68名
▼植木静山氏 題『サムライ達の「北方領土交渉」』
幕末の海外との条約交渉は、日米和親条約の他に英・仏・露・蘭から条約締結を要求されていた。中でも露は18世紀末から北海道沿岸に通商を求めて来た。幕府は交渉窓口は長崎にありと、信牌(長崎の中国船に与えていた通商用

許可証)を与えて追い返した。紳士的なプチャーチン提督は、散々じらされ怒り心頭の末、米に続き国境交渉・友好条約を結ぶことができたが、安政の大地震で破壊された艦船の代替船建造を日本が助けるなどがあり、親日的な交流も生まれ、川路聖謨の聡明な対応は相手に尊敬の念を与える一方、川路は日本の船大工に露船建造のノウハウを覚えさせるなど、したたかな一面も見せた。現代よりも高い外交能力があるのではないか。文献をくまなく押さえまとめあげた植木氏ならではの発表だった。

▼遠田千代吉氏 題『二上山に偲ぶ』大津皇子山頂墓』
判官びいきの日本人は大津皇子に多大な同情を寄せ、非業の死とその墓所に関する話が語り継がれる。万葉集の「二上山の頂へ」という歌が鍵となり、若き皇子に思いを馳せ、山頂にあるはずのない古墳の存在の有無を後世の人は検証しようとしてきている。遠田さんも、自ら山へ足を運ばれ、残された文献の真偽を実施、地道な歴史捜査を行われた。そして、「二上山山頂墓は大津皇子を象徴し祀

る社である」の結びにすっきりとした思いで聞き終えた。



初めての発表をする遠田氏

▼武田収功氏 題『水銀の道』飛鳥池工房遺跡の出土品』
金銀は世界の歴史を動かしてきたが、どこで手に入れ、どこでどう生産したかまでは掘り下げていないことが多い。武田さんの発表はまさにそこを突いた。



初めての発表をする武田氏

飛鳥池工房遺跡での水銀アマルガムの出土から一粒の銀を発見、その生産拠点を結びつける産業ル―



初めての発表をする森氏

▼森 彩子氏 題『開港横浜で生まれた仏蘭西瓦―ジェラール瓦』
明治の初め横浜では様々な産業が生まれたが、演者はジェラール瓦というフランス瓦が存在したことに着目、調査研究された。この西洋瓦は従来の瓦とは、色や形、製造方法が違う。蒸気機関を動力とする製造工場も生まれ、その痕跡

も横浜に残されているのだが、その後の瓦産業に伝承されることもなくシエラール瓦は明治の終わりには終焉を迎えたという。演者は綿密にその存在の推移と足跡を調べ上げた。まさにたくさんのピースを敷き詰めていく瓦敷のような地道な作業の集大成であった。

▼高橋正一氏 題『「翁草」著者自筆原本（一部他筆）の再発見について』

「翁草」は江戸中後期の随筆家、神沢杜口（かんざわとこう）の室町時代末期から寛政3年までの200年間の随筆であり、森陽外が「高瀬舟」に引用するなど多大な影響を与えている。数多くの写本があり、記述の真偽が指摘されることもあるが、一昨年行方不明になっていた自筆原本が発見され、演者は現在、杜口研究者と共同で調査を進めている。今回の発表は自筆原本であるとされる根拠・理由を、その本の出所・筆跡・押印・構成・用紙などを詳細に解説された。原本なればこそ浮かび上がってくる真実がある。今後の更なる新発見の成果に期待したい。

▼加藤導男氏 題『悲運の比企一族と陰謀の北条一族を検証する』

▼植田 喜兵成智先生（学習院大学東洋文化研究所助教）

題『白村江の戦いから羅唐戦争へ』 横歴には多くの古代史ファンがいる。演題の「白村江の戦い」は日本の国のあけぼのと言える頃のこととて、海外との関りがあった事件として聞き逃すことのできない話である。そうしたことから植田氏の講演を楽しみに来た方が多かったのではないだろうか？

ところが7世紀の東アジアのこの戦いに我が国の出征がどのように影響したのか興味を持って臨んだ向きには期待外れであったかもしれない。

講師の言葉にあるように日本史にとってエポックではあるが、当時の東アジアにとっては一局所的な事件でしかないということである。なるほど大國唐からすると百済の加勢といっても倭国など脅威に感じる程もなく歯牙にもかけない相手だったのだろうか。

しかし学ぶべきことはたくさんあった。当時の東アジア状況は建國したての唐にとって広い国土の統一には北方、西方を固め、朝鮮半島も安定させなければならぬ。その朝鮮半島は高句麗・新羅・百

来年の大河ドラマが『鎌倉殿の13人』である。演者は東日本の鎌倉武士の成り立ちやその経緯を長く調べられているが、歴史を調べる上で一番の資料はその時代の書物である。この場合の『吾妻鑑』は北条氏側が著したものだから、「北条が正義」の姿勢であるが、演者は北条家＝悪玉と結論されている。「むい」と憤るほどの北条氏の時代を知り、大河ドラマで演じられる勝者の立ち位置を確かめるのも歴史の楽しみ方であろう。

*12月7日（火）例会開催。会場は横浜・関内小ホール。発表者3名、出席者85名

▼高田 茂氏 題『七支刀と四世紀の倭国』 七支刀は石上神宮に伝



初めての発表をする高田氏

濟の三国による抗争が起きていた。俯瞰的に見ると、極地闘争を大

国がにらみを利かせる状況に小国日本が口を挟む場合ではないことが明白である。結果、日本は以後の情勢を左右するような関わり方をしなくて良かったのかもしれない。（結果負けてよかった？・百済と共に敗北、撤退）

羅唐戦争の結果、新羅が朝鮮を統一し、新羅・唐の関係が回復した後、日本は新羅から律令などの影響を受けることになる。日本の歴史年表に大々的に記される「白村江の戦い」も世界史視点で捉えないといけないことを教えられる講義だった。

*4月10日（日）例会開催。会場は横浜関内ホール。発表者3名、出席者76名。

▼忌部 守氏（村島秀次事務局長） 題『聖徳太子の謎と法隆寺修学旅行ツアー』

発表は聖徳太子にまつわる「建物」を時代的に検証することと日本書紀に書かれた太子死亡の記述の真偽を解明したいということである。前者に関しては、法隆寺が大火にあっていることなどから現存す

えられる鉄剣で儀式用（道教の儀器）として使われたらしい。文字が刻まれ、百済王から倭王のために造ったと記される。古代朝鮮と倭国の交渉を直接示す現存最古の文字資料であり、百済王世子奇が倭の国王へ王として自らを戒め律するとの道教思想を伝えたかったのではないかと推察されている。

高田氏は、倭国の王と贈与者である百済世子（太子）とは対等な関係ではない点からなどを考慮して、時の倭国王は女王ではなかったのかと論じている。当時の百済と倭国が親密な関係であったことは明白であり、後の「白村江の戦い」に中大兄皇子が百済救援の出征の断を下す話へとつながる。

▼真野信治氏 題『鎌倉殿のおじいさん 源為義の虚像と実像』

日本家系図学会監事も務められている真野氏も認めるように歴史に残る家系図には多くの虚偽創作があり、家系図を読み解くにはかなりの歴史的知識とそれに基づく客観的な推理力が必要である。

本演題は武家の元祖源氏の由来となる頼朝の祖父・為義の出自が明確でない点があり、武家の礎を築いた源義家から義朝→頼朝に到

るものが創建時ではないことは聴者にも納得がいく。問題は太子暗殺説？の件である。聖徳太子の死に対する謎は法隆寺金堂の釈迦三尊像の光背に刻まれた記述であり、そこにある年号によって日本書紀とは死亡年に1年の誤差があるということだ。僅か1年の違いではないか？否、これだけの大人物だ。天皇になる人ではなかったのか？何かあったのではないか？そこから推理を巡らせたのが後者の話である。

釈迦像の「愁毒をいただき」という記述や斑鳩宮の造営など氏の説には同意の感を持つ。

▼宮下 元氏 題『はじめにコトバありきか！』

古代中国で生まれた漢字（甲骨文字）と古代エジプトで生まれたヒエログリフの発表を聴き、人類の言葉の起源や文字の成立をひも解いた人は宮下氏のような人々であっただろうと想像する。それは浜辺で失くした指輪を探すような気の遠くなるような作業のくり返しだからである。ヒエログリフという象形文字がたまたま2つの言語と併記された碑文が見つかったか

る源氏の系譜が乱れることになる。さらに為義の兄弟の足利の祖・義国の出自さえも冴えないものになるのである。しかし乍ら家系図にしっかりと収まっているのは「尊卑分脈」の編者、洞院公定（とういんきんさだ）がその作為に関わり、これに確固たるお墨付きした人物が足利幕府を盤石な地位に引き上げた足利義満であったとする論理は歴史ミステリー番組のような面白さであった。

▼木村高久氏 題『邪馬台国畿内説は正しいか？』

近年畿内説が定番ようになっていくが、いまだ決定的な根拠となる物は何も出てきていない。木村氏の結論は『九州説』である。その論理を畿内説では無理である根拠を細かく提示し納得のゆく論法で提示された。

しかし九州のどこであるかの指摘までには至らなかったが、比較的信頼性の高い発表であった。簡潔にまとめられ、聞き手に満足を与えられる発表であった。

*令和4年1月8日（土）特別講演。会場は横浜市技能文化会館。参加者72名

らこそ紀元前のエジプト王朝の歴史が解明されることになった。漢字の起源となる甲骨文字が司馬遷の「史記」と符合したからこそ中国古代史が日の目を見るようになったのである。前講の忌部さんの話も残された刻文が人の好奇心や知識欲を掻き立てたからであろう。

▼大瀬克博氏 題『台湾で最も愛される日本人 八田與一』

今回の八田與一は、台湾の治水工事を成し遂げた功績だけで歴史に残るが、八田の場合は文句のつけようのない人物としての評価がある。

戦前の統治下にあった台湾で現地の人々を雇用して、東洋一のダムを建設するという難事業は「監督命令する」というような立ち位置でなければ成し遂げられないと考えるのが普通である。八田の場合は戦後の台湾の教科書に偉人として扱われるほどの人としての評価なのである。八田の場合はそうした一部始終を日本からのアプローチは一切なく、台湾からの報道などで我々の知るところとなった。

大瀬氏の語りは定評があり、一つ間違うと日本人英雄視となりがちな題材を淡々と心に沁みるよう

な話法で聴衆に語りかける。研究発表はこうありたいと思わせる発表だった。

＊5月8日（日）例会開催。会場は横浜関内ホール。発表者3名、出席者62名

▼春口健二氏『三浦武士団と鎌倉幕府の成立』

これまで研究は常に足で歩いて研究されてきた同氏ならではの発表である。平忠常の乱が貧土の房総半島が要因にあり、片や三浦半島は内陸に深く海水面が入り込む豊潤で海の恵みに富んだ土地柄との比較説明は腑に落ちる。

頼朝から北条への鎌倉政権で重要な役割を務めた三浦氏（義澄、義村）のおっとりとした人の好性格もこの恵まれた三浦半島の風土が生んだものだとする春口氏の話の伺い、大河ドラマで演じられる三浦一族像がまさにはまっていることに感心させられた。実地調査を行い多方面からの資料を調べ上げ、研究にいたる同氏の姿勢は大いに学ぶべきである。

▼槇 良生氏『永遠の旅人 松浦武四郎』

幕末の北方領土開拓といえは松

か？

長尾氏は「わが国の歴史と文化は外国のものをうまく取り入れながら、独自の工夫を加えて発展してきたとよく言われるが、天皇の陵（みささぎ）もそのよう流れの中で変化してきた。」と話された。その流れがよく分かるような話であった。

▼高尾 隆氏 題『ラストサムライと呼ばれた男達―中島三郎助と土方歳三』

長崎海軍伝習所で一期生として机を並べた三郎助と勝海舟はあまり仲が良くなかったと伝えられる。方や勤勉で実直な技術屋の男。もう一方は一を聞いて十を知る頭脳明晰の海舟とでは、そりが合わないに違いない。浦賀で咸臨丸を修理した時、築地の海軍操練所の時、榎本武揚が函館に向かおうとする時、二人は顔を合わせ、言葉を交わしているはずである。榎本と三郎助、徳川報恩の思いが強い二人は幕臣の新天地を求めて函館へ向かう。当時海舟は榎本に対し、江戸湾に集結する徳川軍艦を新政府に引き渡せと強く勧告する。榎本は「俺の魂を売れというのに等しい」とこれを無視する。三郎助もしか

田伝十郎、間宮林蔵、最上徳内、近藤重蔵といった人物があげられるが、政治的な開拓といった視点だけでなく平和的、友好的な姿勢を併せもって現地を歩き、文化的、親善的な開発を行った人が北海道の名付け親である松浦武四郎である。

槇氏はこの人物を解説するにふさわしい温厚な語り口で発表いただいた。武四郎の人柄に触れるように良い発表だった。なお、話術に定評のある同氏にそのポイントをお伺いしたところ、①どうやって聞き手の興味を引かせるか。②話をまとめるにあたり、自分の主張は何かを明確にすると良いとのことであった。

▼瀬谷俊二郎氏『激動の70年（PART2）』

この100数年の間で、当会例会での発表テーマとして最も現代に近い太平洋戦争の終焉に到るまでの話である。パワーポイントを駆使して話を進める手法も板について大変わかりやすい発表だった。前回発表をダイジェストにして明治維新後の廃藩置県に乗じた沖繩の日本への取り込みから、台湾在住の日本人虐殺を契機とした台湾占領に

端を発する日本の海外覇権そして太平洋戦争敗北に至るまでの歴史を上手にまとめていただいた。

瀬谷氏はこの戦いの歴史は何だったのかと自問し、「この戦いには白人の植民地に対する独立運動、建國運動を日本が手助けしたという側面がある。日本は米英をはじめとする欧米と戦ったが、アジア人同士で戦ってはいない。結果としてこれらの植民地の独立や建国に寄与したことを理解しておかなくてはならない。戦後独立を勝ち得た毛沢東やマルクスは日本が侵略してくれたお陰で独立できたと言っている。日本人はマッカーサーのノーギルティインフォメーションプログラムという戦略で戦争による罪悪感を植え付けられてしまった」と総括する。

＊6月4日（土）例会開催。会場は横浜関内ホール。発表者3名、出席者80名。

▼佐藤猛夫氏 題『清水の次郎長と明治維新』

清水の次郎長は、日本史に残る代表的な渡世人である。渡世人とは賭博や用心棒と呼ぶような反社会的な稼業で生きる人間を呼ぶ。

であるというのが2回にわたり発表された主旨である。同氏は墳丘に覆われていた石槨の様子を画像を用い詳細に解説し、大津皇子の墓である可能性を推察された。現在そのありかがどちらかであるという結論は出ていないが、遠田氏の押す鳥谷口古墳の方が墳墓を造る過程に人の意志や感情が存在しているという歴史的なロマンを感じさせる。

▼植木静山氏 題『南北朝における天皇拉致事件の真相』

今回の発表は足利尊氏による新政権樹立後に、未熟な政権運営により幕府の足元から火が上がり、身内や御家人に南北の朝廷を巻き込み権力争いが始まる過程に起きた事件である。現大河ドラマにある朝廷が鎌倉武家政権を奪還しようとして起きた承久の乱に始まる勢力争いは後醍醐天皇の元弘の乱以降、朝廷は国の統率力を失っていく。発表の論旨は正平一統と呼ばれる南北朝廷の統一を図ろうとした尊氏の対応のまずさが生んだ天皇拉致誘拐事件である。政局は「武力」対「権威」の駆け引きだが、この関係は南北朝時代を終わらせた三代将軍足利義満によって朝廷・

佐藤氏の話で、森の石松をはじめとするヤクザの親分としての次郎長の実像は、清水という地勢学的特性が左右していたことがわかった。またにも勉強もせずについたことだが、ヤクザ稼業が主でなくなった明治以降に行った様々なビジネスや社会的事業の数々を知ると頭も良い人だったのではと推察できる。私の知るところによると横浜にも顔を出しており、「これからの若者は英語が必要だ」と若い人への英語教育にも力を貸したそうである。

▼長尾正和氏 題『天皇陵』

天皇陵における被葬者の是非については多くの問題がある。それを解決するのが陵墓の綿密な調査である。発表を聴いて思うことは時代毎に権力の移動があっても天皇家が自身の威光や場所を変え生き続けてきたという事実の偉大さである。最大のピンチが鎌倉から室町にいたる治世権の喪失だろうか？されど信長も家康も抹消しようとはしなかった存在はどこから生まれたのか？ずっしりと重く続いた徳川の武家社会の中でも、その武家が最後に精神的支柱として帝を担ぎ上げたのはどうしてなの

公家の権威が骨抜きにされ武家主導社会を確立させたことで幕となる。権力を持たず象徴として存在する天皇の歴史を知る上で重要な話である。

▼斉木敏夫氏 題『寺院の始まり』

自ら日本の仏像や寺院研究などを行う日本美術史同好会の主宰を務める斉木さんによる、飛鳥時代における我が国の寺院のはじまりをお話いただいた。このジャンルにおいては当会きつての博識を誇るだけあって、端的でわかりやすい解説は聴くものの知識欲を満足させてくれる。話に挟む持論の部分もそれなりの裏付けがあり説得力がある。

広隆寺の国宝弥勒菩薩半跏像が赤松で造られており、当時日本では用いない素材であることから朝鮮半島から譲り受けたものであろうとの指摘は大陸からのつながりを鮮明にしてくれる話である。また法興寺や法隆寺などが海外からの使者に我が国の優れた現状を見せつける意図があったとの言葉に、今日世界に誇る日本の仏教文化を大切に護ってきた結果であり、これからも引きついでいかねばならないとの意を強くした。

*8月3日(水)例会開催。会場は横浜関内小ホール。発表者3名、出席者71名。

▼古谷 多聞氏 題『ノモンハン事件(後編)・停戦後の秘話』

前回「ノモンハン事件」は太平洋戦争のプロローグとしてまったく無益で無意味な戦いだったと断じた論者が、今回この戦いの全容を日露双方の戦果の実勢を具体的に示しながら解説するに至った。そしてその戦いの評価や処分においていかにも日本的な収め方で、次の戦いに活かす術を持たなかったということをわれわれは教えられる。これが戦国時代の戦いなら笑って済ませるが、これが太平洋戦争のはじまりだとなると唾然としてしまうのは私だけではないだろう。古谷氏はロシアについても今も変わらずに引き継がれている悪しき問題点を指摘している。近代史は胸騒ぎが起きる位人の心をえぐる。毎回聞かされることだが教訓は山ほどあるのに、誰も歴史から学んでいないという思いである。

▼忌部 守氏 題『藤原鎌足Ⅱ東国出自論〜もうひとつの古代史逸文〜』

それは直立二足歩行をすることにより頭蓋骨に変化をもたらした声道や咽喉といった新たな構造が母音をつくる条件を生み出したから他の動物とは異なったとされる。そして『知恵のビッグバン』と呼ばれる過去や未来・遠方・明日(未来)を認知するという計画能力を身につけ、演題にもある「噂話をする」というコミュニケーション能力があるからだという。

人類の素晴らしい進化はまさにここににあるのだろう。しかしここまで文明を築き上げたのに、噂話が争いの道具としてまかり通っているのには溜息しかでないのは悲しい。

▼高尾 隆氏、題『街歩きで出会った古刹とつながる数奇な糸―濟松寺―』

江戸の街歩きが楽しいのは、その対象を現代でもリアルな状態で享受できることである。その多くは現存する寺社にある。牛込濟松寺の祖心尼は戦国武将の娘に生まれ、歴史的転換期の荒波に翻弄されながらも自分の生き方を貫き、徳川初期の時代形成に大きな影響を与えた。この女性が紡ぐ糸と糸が織りなす人間関係は、人は誰しもさまざまな結びつきで生きていくもの

若い学生さんに藤原氏ってどんな家系なのかと尋ねられたら、この話をしてあげて欲しい。学生時代、大化の改新を学び覚えた名前―藤原鎌足は中大兄皇子と共に蘇我入鹿を討つたと学んだ。鎌足は元々優秀な貴族であったのだろうと思いつけなかった。(余談・私には名優藤原釜足の方がリアルな存在だった。彼は戦前藤原氏の祖といわれる鎌足を名乗ったことで皇族の忠臣たる者に対する不敬とされ、改名を求められた。)

鎌足の出自には大和国高市郡と常陸国鹿島の2つの説があり、忌部氏の話は後者の説をひも解いたものである。春日神社の鹿が、常陸の鹿島から由来するものであること、また鎌足の家 中臣家は祭官である。その出自は孝徳天皇時代に造られた鹿島神宮の奉斎一族であるとのことは納得のいく話である。

この乙巳の変以降に律令国家となるのだが、当時にも地方行政組織「評制」があったことなど学ぶべきことが多々あった発表だった。

▼真野 信治氏 題『どうする頼朝!〜一か八かの拳兵だった〜』

頼朝拳兵は謎が多い。伊豆の田だと教えてくれる。また春日局という偉大な女性の陰に隠れてしまいそうだが、その生涯を知ると人間的な魅力に感動を覚える。局をサポートするために大奥に入った時、祖心尼は大奥の女中達に禅の教えを説いた。ところが瞬く間に多くの女中たちを魅了し虜にしてしまう。当時の幕閣達は祖心尼の教えはキリシタン(邪教)ではないかと疑い詮議したそうである。しかし祖心尼は將軍家光が尊敬する沢庵和尚と同様に教えを乞うほどの教義を身につけたという。おそらくその教えとは宗教という枠組で語るものではなかったのだろう。

舎に人の眼が届かないとは言えない長い浪人暮らしをしている頼朝にさあ決起しろと言っても、そうやすやすと立ち上がれるものではない。また多勢に無勢の中、房総へ逃れてから、大スターにファンが群がってくるように集まった大軍団を引き連れて鎌倉へ戻ってくるという作り話のような展開がなぜ生まれたのか。真野さんが実に明快に解き明かしてくれた。

そこにはカリスマ性を持って関東を統治するような武士が存在していなかったことや、そうしたことも未熟な土壌があったのだろう。頼朝のみが持ちえたレジティマシー(正当な血筋)というよりどころだけで、少なくとも東日本の雄となるのだからかなりの運の良さを感じる。北条がその地位を取り引き継いでいくものの、足利にとって代わられる時代へのステップもわかりやすく講演いただきました。

*9月17日(土)例会開催。会場は横浜関内小ホール。発表者3名、出席者64名

▼竹内秀一氏、題『古代東海道の水遺跡』を中心に』

文明が進んだ現代からみると、古代の官道とは言っても、獣道程度の想像しかつかないのは私だけではないだろう。それは古代律令国家が威信を示す象徴的な施設として大規模な道を開いていたとは歴史を甘く見てはいけないという教訓であろう。竹内氏は日頃グーグルマップの航空写真を鳥の目で眺めながら、「ここはもしかや古代の官道ではないか?」と思いつくのが楽しみの一つと言う。できればこの大規模官道がどうしてなくなったのかなど次回お話しただければありがたい。

▼宮下 元氏、題『サピエンスは「噂話」で進化した』

宮下さんは“自分の話を聞いて欲しい”という方の話を傾ける“傾聴ボランティア”という活動を地元でされている。だからというわけではないだろうが、当会ではゴトバに関する研究発表をされてきた。言葉の大切さや力が分かるからであらう。

今回は人間だけがどうして言葉を持ち今に至るのかという話。なぜ人類はホモ・サピエンスは類人猿から新人(サピエンス)に進化することができたのか?

◇江戸の歴史研究会

「会報 江戸」#175号、#180号

◇静岡県歴史研究会

「会報」第161号、第162号

◇歴史論叢」第八号

◇愛知歴史研究会

「あいち歴史会誌」

第172号、第176号

◇しんあいち歴史研究会

「歴史会誌」第85号

◇大阪歴史懇談会

「会報」第443、第454号

「会誌 歴史懇談」第三十六号

◇岡倉天心市民研究会

「天心報」第四十一号、第四十五号

◇歴史と中国の文化を学ぶ会

「ちゅうぶん」第三十五号



受贈図書(編・記)

全国各地の歴史研究団体より、会報等をご恵贈いただきました。紙上より厚くお礼申し上げます。(令和4年9月30日現在の最新到着分を掲載いたします。)

会員活動報告

令和3年10月〜

令和4年9月

●村島秀次事務局長の活動

*令和4年6月25日 学習院大学で開催された史学会大会の冒頭で、村島さんは「浄御原令制下の官司制と官職」を講演され好評を博しました。

●真野信治理事の活動

*横浜市社会福祉協議会の「趣味の会」で、西区野毛荘を含め5施設を担当する。

*地域ケアプラザの歴史講座で、青葉区さつきが丘ケアプラザを含め5施設を担当する。

* (社)健康生きがい開発財団「歴史」講座担当

会報第八十五号 原稿募集

今回の会報誌は、令和5年6月末日発刊予定の「歴研よこはま第八十五号」です。つきましては応募規定により原稿の募集をいたしますので、皆様奮ってご応募願います。

「応募規定」

○内容 研究論文、エッセイ、俳句、短歌、詩など。

○字数 会報4頁以内（1頁に1800字はありますが、この中には題名欄、文字間の空白、写真、表、地図などすべてを含みます。）

○その他 研究論文、エッセイはワードの電子データでご投稿ください。

なお、俳句は5句以内、短歌7首以内、詩30行以内です。

○原稿受付期間 令和5年1月から同年3月末日

○原稿提出先

〒2332-0022

横浜市南区高根町

2・8・111001

編集事務局 木村高久

045・242・8670

Kimutaka726yah00.ne.jp

編集後記

本誌は、多くの会員の皆様からの投稿を頂き、また表紙の写真や俳画などを寄せて下さったことにより完成したものです。ご協力頂いた皆様に厚くお礼を申し上げます。

また、今回の記念誌の題号は、役員会で募集し、5名の方から12の候補名が出されました。そして投票の結果、理事高田茂氏の「躍進」に決まった次第です。このことから創立四十周年を盛り上げよう、記念誌を向上させようとの役員会の意欲を感じたところです。なお、今回惜しくも落選した候補名も甲乙つけ難いものでした。

ところで、本記念誌中で特質する記事として、一つは名誉会長加藤導男氏の「先人の叡智を継承しよう」とあり、二つとして「2022の会員メッセージ」が挙げられます。前者は名誉会長さんが入会された平成4年から今日までの本会で知り合われた方々との交流などについて記述されています。横浜歴史研究会（以下、「横歴」という。）の歴史の一端を知ることが出来ます。特に新しい会員さんにお勧めで

す。後者のメッセージですが、40年後の2062年の横歴の仲間に対するメッセージです。これは現会員の覚悟であり、また40年後の仲間へのエールでもあります。ぜひ、ご覧ください。

話は変わりますが、私たち「横歴」会員は、在野の歴史研究者（以下「在野」という。）と言われます。では「在野」とは何かといえますと公職に就かない民間人を指します。端的に言いますと学者、専門家がプロの研究者で、「在野」はアマチュアの研究者となります。そこで「在野」の研究者が活動しているスタイルですが大別すると次の5通りあるのではないのでしょうか。プロは学界の常識に捉われませんが、「在野」は柔軟な思考で研究できます。

一つは、この様な柔軟な思考で活動している人です。代表例が群馬県の岩宿遺跡を事実上発見した相沢忠洋青年です。プロが日本列島に縄文時代の前に人はいなかったという当時の常識に縛られていました。それが捉われず旧石器遺跡を発見できたのです。

二つは、すき間産業的分野について研究する人です。プロは学会などに発

表できるものなどを研究対象としますが、それ以外は対象にしません。一方、「在野」はプロが対象としない分野の研究もできるのです。

三つは、各分野でのボランティア活動やプロの助手活動をする人です。具体的には、遺跡発掘現場や歴史博物館などでのボランティア活動とかプロの補助活動等を指します。

四つは、一般の方に歴史の面白さ、楽しさを知らせ伝える活動をする人です。友人、知人に歴史について面白いよ、奥が深いよと話すとか、得意の分野の一端を解説することも十分な活動です。

最後の五つ目は、ご自身が関心を抱いたテーマについて学ぶ人です。どのスタイルを選択するのかがご自身の自由です。一つに限らず複数のスタイルを選択する方もいます。

何れにしても在野パワーで頑張ってください。大いに楽しんで下さい。そして人生を豊かにされることを願っています。

編集者としては「在野」の歴史研究者である会員の皆さまの研究推進の一助になることを心がけております。

（編・記）